

廣島師範學校  
圖書印

兒童の心理

文學博士久保良英著

叢文閣

廣島師範學校  
圖書印

370類  
56号

和  
教育  
第六四号

廣師別登録番號  
第 2256号

140類  
70号

2500 002256

## 序

児童心理學といふやうな科學的のものでなく、世の親がその子弟を教養するに當りて、當然心得て居なければならぬ學童の一般心理状態を述べたものを書いて貰ひたいとの出版者からの依頼があつた。

これより先き、児童研究所で、眞に児童を教養する方法の宣傳として、毎週日曜の午後には講演會を開いて居たが、その中の一部の人から、断片の話でなく、少し纏つた児童心理の話を開きたいといふ希望が出て、その人員は極めて少數であつたが、その熱心なる態度に著者も大に激勵され、児童の心理一般に就て十五回の講話を試みた。今幸にも、その稿本が著者の手許にある。その草稿はノースワシーの著書を骨子とし、他の二三の著書を參酌し、それに私見を加へて出來上つたものであるが、今回更に加筆して、出版者の御依頼に應ずることにした。極めて平易にと出版者の希望であつたが、紙數を減少する爲めに、出来るだけ簡潔に書いたので、多少むづか

しくなつた憾があるのは特に讀者の御諒恕を仰ぎたい。

尙附録として、數篇を卷末に添加したが、これは前記の兒童研究所に於ける日曜講演の草稿の中で、特に家庭の實際問題として、世の親の心得て居なければならぬものを選出して、鶏肋としたのである。幸に、前の講話と後の附録とが、幾分なりとも兒童の福祉増進の上に貢獻することが出来れば、著者の本懐が達したと欣ぶ次第である。

著

者

# 目次

## 第一章 本性

親子の類似—能力の遺傳—遺傳か教養か—性の相違—種族の相違—本性の特質—本性を變化せしむる方法

一—二六

## 第二章 非社會性

本能とは何か—身體的活動—筋肉發達の順序—靜肅教育の可否—發音運動—手技の基礎—食物攝取と狩獵—からかふこと—所有及び蒐集本能—争闘本能

二七—三〇

## 第三章 社會性

母らしき行動—親切—同情—群居本能—承認及び誇示の欲望—競争の本能—模倣の本能—性の本能—性の教育

三一—四〇



第四章 感情状態

満足の感の生理的基礎—如何にして感情を教育に利用すべきか—美的感情とその養成—原始的情緒—情緒統制の一般的方法—恐怖の情とその統制—嫉妬の情とその統制

四—五

第五章 注意

注意作用は本來の性向—子供の注意は一局部—習慣上の相違—集注力が弱い—注意繼續の時間が短い—注意の型—有意注意の發達—誘發せられたる注意作用

五—六

第六章 感官知覺

知覺の發達—大人と子供との差異—特殊の知覺の發達—感官に於ける諸種の缺陷—知覺を陶冶する方法

六—七

第七章 智能

七—八

智能検査法—智能の高下を示す方法—作業検査法—團體検査法—検査法の二三の結果—検査法に對する注意—智能とは何ぞや

第八章 記 憶…………… 六—二〇

子供の記憶と大人の記憶—材料の相違と子供の記憶—學習法と把任との關係—反覆と集注と再生—全體法と部分法と折衷法—學校に於ける記憶作業—記憶に及ぼすその他の影響

第九章 想 像…………… 二一—二四

子供は視的心像が多い—具體的心像が多い—想像の年齢に伴ふ變化—創作的想像の教育—青年期に於ける危機—大人と子供の想像の第二の相違點—心像の分量に於ける相違

第十章 思 考…………… 二五—三〇

思考作用の發達—思考する量が少ない—思考が不確實—問題になる材料の相違—思考陶冶

の必要

第十一章 習 慣……………一三六——一三六

習慣は極めて大切—習慣構成の生理的基礎—習慣構成の最良時期—習慣構成上大切なる方  
法—習慣構成に關する法則—實驗室の結果は何故に良好か—練習曲線に就て

第十二章 遊 戲……………一三五——一四六

過剩説—準備説—反覆説—競争説—生物學的説明—遊戲の意義—遊戲と作業との相違點—  
遊戲的氣分の必要—遊戲的興味の年齢による相違—教育的價値と指導の必要

第十三章 道德並に宗教心の發達……………一四一——一七

道德性の主要素—道德的本能は存在するか—宗教的傾向とは何か—宗教は道德性を含んで  
居る—宗教的本質は存在するか

第十四章 道德並に宗教々育……………一七——一八

道德並に宗教教育に於ける心理的法則—年齢に應じて如何に教育するか—最も早い時期の  
特質と訓練—中間期の特質と訓練—青年期の特質と訓練

第十五章 異常兒童……………一七——二〇

正常と異常との境界—道德的異常兒—身體的異常兒—知的異常兒—優良兒と早熟

附 録

第一 子供の虚言……………二二——二五

動物の保護色—虚言の種類—記憶の誤り—眞の虚言

第二 子供の雑誌に就て……………二六——三〇

近頃の傾向—繪雑誌の附録—話を主とする雑誌—自由畫

目 次

第三 不良少年の心理……………三〇一—三〇八

不良性は先天的か—勢力の昇華作用—社會的條件の變化—家庭の狀況—環境と友達—精神的軌轍

第四 兒童の職業選擇に就て……………二九〇—二九六

精神分析的研究—職業選擇に關する統計的研究—職業の選擇を規定する條件—職業選擇の動機—職業に對する理想の變化—結論

第五 兒童の遊園に就て……………二八二—二八八

兒童遊園の問題—兒童遊園の最低標準—遊園設備の理想案

第六 母性擁護の叫び……………二九一—二九四

大戰以來母性擁護の聲—我國の幼兒死亡率—有識階級の出産率—母性擁護の方法

# 兒童の心理

久保良英

## 第一章 本性

### (一) 親子の類似

子供がその父や祖父の顔形や目つきに似たり、身長、頭蓋指數、手や足の形が親子殆ど同じであつたりすることは、吾人の常に目撃する所である。あの家は長命たとか、代々嘔の續く家とか、或は氣狂が出る家だなどといふことも、吾人がよく口にする所である。又、よく氣をつけて見ると、意志の鞏固、顔をよく覺える能力、音樂的想像、數學又は語學の才能、美術的技能など

も、親から子に傳はるやうである。かやうに身體の方面にも、又精神の方面にも、その兩親からの遺傳はあるが、しかし、子供の本性を決定するには、單に兩親のみを見ては不充分である。ゴルトンが遺傳の研究をした結果によると、子供の本來の性質の二分の一は兩親の影響を被り、四分の一は祖父母、八分の一は曾祖父母の影響を受けて居るといふ風に、漸次、稀釋はされるが、其の祖父の要素が傳はつて居る。よく世の中には兩親に似ない鬼つ子がある。それはよく調べて見ると、兩親の祖先の中に必ず其の種のものが存在して居ることが分る。

メンデルの植物雜種の研究によると、或特質が兩親に似ないで、三代乃至四代前の人に似て居る場合の説明がつく。即ち豌豆の雜種を作ると、前代の孰れか一方の性質がそのまま傳はると(優性)、潜伏して表はれないで(劣性)、後になつて表はれるものがある。其の次の代になると、其の二十五％は祖父母の中、孰れかの劣性を有し、二十五％は他の一方の優性を有する。残りの五十％は雜種の兩親の孰れかに似て居る。而して二十五％宛の優性と劣性とは、純粹になつて傳はり、五十％の雜種からは、又前と同一の割合で、優・劣・雜が生するのである。しかし、こ

これは植物に就ての研究で、この法則によつて複雑なる吾人々類の性質の遺傳を、どの位まで説明し得るかは目下の處、不明である。只或特質が隔世的に表はれるから、メンデルの法則のやうなものが、人類にも行はるゝに相違ないと、推測するに過ぎない。

## (二) 能力の遺傳

鬼も角、兒童の生來の性質に、兩親又はその祖先が影響を及ぼすことは事實であるが、其の遺傳は特殊のものであるか、或は一般のものであるかといふ疑問が起つてくる。ゴルトンの「遺傳的天才」の研究によると、二百八十六人の裁判官の中で、九人に一人以上は、其の父や兄弟や子供に裁判官があつた。又非常に智能の優つた人、辯舌の巧みな人、他人を操縱するに秀でた人、困難な事業に屈しない人等は遺傳的である。文學・美術又は音樂的天才にも、やはり其の近親にそれ等の天才が居た。畫家のチチアン、ラファエル、ヴァンダイク、ムユリロ、音樂家のベートーベン、メンデル、スゾーン、モツァルト、ハイヅン等は其の好適例であるとされて居る。

如上のゴルトンの例は、都合のいゝものゝみを集めて來た憾があるが、しかし能力の遺傳は極



めて特殊てくしゆ的で、一般いぱん的でないやうに思はれる。例へば同一家族かいていの兒童こどもの特殊能力てくしゆのうりよくを檢査けんさして見ると、其の事實じじつが表はれて居る。兄あには或能力あるうりよくに秀で、居るが、弟あには他の能力たのうりよくを有して居る。双子ふたごですら、身體しんたい的特質てくしつは似て居るが、精神しんじん的特質てくしつが異なることことがある。それかと思ふと兩人ふたりとも習字しじゆが非常に旨うまいが、一方ひとは短氣たんきで一方ひとは忍耐にんたい力の強いものもある。故に子供こどもがその兩親ふたご又は祖先そぜんに似て居ると言つても、分析ぶんしして見ると、兄あにの方は例へば甲かの特質てくしつは多く似、乙おつの特質てくしつは少く似て居るが、弟あにの方は甲かの特質てくしつよりも、乙おつの特質てくしつが多く兩親ふたご又はその祖先そぜんの者に似て居るといふことが分る。

かやうに、一方ひとに似るといふ原理げんりの外ほかに、又趣異すういといふ事實じじつがある。例へば父ちちが五尺四寸ごせきしゆしゆあつたとすれば、其の子こは、五尺四寸五分ごせきしゆしゆごぶんあるとか、又五尺三寸五分ごせきしゆしゆごぶんあるといふやうに、全く親おやと同じものが出來ないで、高たかい方や又は低ひい方へ、少しく趣異すういする場合ばいがある。又この他に平均へいきんに歸へらんとする原理げんりもある。非常ひじょうに能力のうりよくの發達はつたつした子供こどもに平凡へいぱんなものが生れるのは、その爲である。自然しぜんは常に平均へいきんの方に引張ひきちがつて行つて、安定あんていと平衡へいかうとを保つて行かうとする傾向けいこうがあること

を忘れてはならない。

遺傳について尙問題になるのは、親が一代にて獲得した性質は其の子に傳はるか否かといふことである。ラマルク及び其の繼承者は其の事實を認めると主張し、ワイズマン及其の派の人は極力之に反對する。しかし種々の外界の刺戟によりて、變種が出來ると、その變種が其の子に傳はつて行く事實がある爲め、ワイズマン一派も極度に獲得性の傳はる事を拒まない。尤も遺傳とは言はないで、他の語で説明して居る。即ち生物の細胞には生殖細胞と身體細胞とがあつて、外圍の刺戟は、生殖細胞が發生の初期にある時に限りて、極めて稀に其の遺傳的構成を變ずることはあるが、身體細胞の受けた變化に伴ひ、生殖細胞の遺傳的構成に變化を生ずることは無いといふのである。しかし、この獲得性の遺傳の有無は尙今後の研究に待つべきであるが、それまでは吾人は今暫くワイズマン派の主張に従ふことにする。

### (三) 遺傳か敎養か

遺傳する性質は一定不變であるとすれば、外界又は自己の練訓とか敎育とかは、どの位まで吾

人の性質に影響するか、換言すれば遺傳と教養と何れが優勢なる決定者であるか、ゴルトンは智能に於て、四千人中に一人といふ位な優れたもの九百七十七人の英才の親族の經歷と、同じ社會上の位置にある普通の能力を有する九百七十七人の親類の經歷とを比較した。蓋し兩團體に於ける優れた人が同數であれば、教養が優勢なる決定者たることが分かるといふのである。處が、其の結果は、前の團體に於ては、八十九人の父、百十四人の兄弟、百二十九人の子供、五十二人の祖父、三十七人の孫、五十三人の伯父、六十一人の甥、即ち合計五百三十五人の優れたものが居た。處が、第二の團體では父・兄弟・子供を一所にして一人、祖父・孫・甥を一所にして三人、合計四人の優れた者が居たに過ぎなかつた。しかし、非難するものは、社會上の位置は同一でも近親に優れた者があれば、家庭の影響は同一でないといふかも知れない。それでゴルトンは僧正の弟子になつたものを調べた。即ち非難者の言が、眞とすれば種はよくなつても、非常な道徳と知識とを有する高僧の下で、訓育されるから優れた人になるのに相違ない。處が、歴史上の記録は一もその事實を示して居ないといふことである。これによると、本來の性質の方が、教養より

も優勢なる要素であるやうに思へる。

ソーンダイクはニューヨーク市の小學校生徒の中から、五十組の双子を選んで、其の間に精神的類似があるか否かを檢した。其の結果は

一、一字の字を抹消する檢査

○・六九

二、一定の文字を與へて語を構成する檢査

○・七一

三、誤りの綴字を指摘する檢査

○・八〇

四、加算の檢査

○・七五

五、乗算の檢査

○・八四

六、一定語の反對語を答へしむる檢査

○・九〇

かやうに類似が多いのに、一二年相違する兄弟や姉妹を檢査すると、其の類似點が前者に比べて約半分であつた。即ち本性の類似が境遇よりも如何に多くの影響を有するかと分る。ソーンダイクは、この他の本性の方が教養よりも、影響の強いことを示す理由として二つを擧げて居る。

(一)若し環境の影響が大とすれば、九歳や十歳の双子の類似よりも、永い影響を受けた十三歳乃至十五歳の双子の類似の方が多くなければならぬが、實際に於て、其の反對を示して居る。

(二)訓練が影響するとすれば、訓練に支配され易い教科目が多くの類似を生ずべきであるが、何等其の事實がない。かやうにソーンダイクの結果はゴルトンと同じで本性が教養よりも、知的能力に大なる影響を與へて居ることを示して居る。ピヤソン、ヘーマン、ウィルスマ等は家族間、例へば親子の特質の類似を研究し、やはり本性の類似又は遺傳の力の大きなことを結論して居る。村瀬君は岡山で、親子同一の小學校を卒業した者二百二十六組の學業成績を比較して見た處が、女子は多く母に似、男子は父に多く似て居た。又科目では算術能力の親子間の類似が、他の科目よりも多かつたといふことである。勿論、是は外界の事情とか、教育の方法が親の時と子の時と同一でないから、兩者の比較の結果は正確とは言へないが、しかし、其の間に能力の遺傳のあることを暗示して居るやうである。

#### (四) 性 の 相 違

兒童の本性を生ずるに、他の要件は性の影響である。吾人は常に身體上にも、精神上にも、明かに男女の區別を認めるが、果してそれがどの位まで相違するかといふことは極めて困難な研究である。而してずつと祖先に溯ると男女の別はさまで無く、只環境と教育とによつて、漸次男女の相違が生じたので、若し幾代も幾代も女兒に男兒と同じやうに環境や社會上の要求や取扱をしたならば、男兒と同じ性質のものが出来るに相違ないといふ人もある。しかしこれは假説で實驗することは不可能である。兎も角、男女の別が現在に於てあるといふことは、否定すべからざることである。然らばどの點に於て、相違するか。トムソンの實驗的研究によると、筋力が女よりも男が發達して居る。力・運動の速さ、疲勞の割合などに於て、男が明に有利である。しかし運動の精密といふ點は極めて僅か男が優つて居る。感覺の方面ではそれが極めて尠ない。知的方面では女は記憶は於て男に優り、聯想的速度が著しく早い。感情や情緒の方面の差は僅かで、社會意識の方面では男子が優り、宗教意識の點では女子が優りて居ると言つて居る。

ピヤソンは男女に就て、實驗はしなかつたが、男と女に就て、各人の意見を集めて、それを分

類して見た。その結果によると、男兒は女兒よりも運動家で噪がしくて、自己確認で、自我的で、道義心に鈍く、短氣であるが、しかし女兒ほどに陰氣でなく、知力も、書方も優れて居ないといふことである。ヘーマンとウイルスマと同様な方法で研究したが、女兒は男兒よりも一層活氣に富み、情緒的で、利他的であるといふ結果を得た。ソーンダイクによると、女は男に比べて、視的事物を細かく觀察することに秀で、色盲が少なく、書物や其の組立に興味が尠なく、しかし他人や感情に多くの興味を有し、生き物を逐つたり、捕へたり、いぢめたりすることを嫌つて、育てたり、慰めたり、元氣をつけてやることを好むと述べて居る。其の他、種々の人が意見を述べて居るが、要するに、性の差は存して居るが、世人の想像する程大なるものでなく、却つて男と男との差、女と女との差が大であるといふことである。

### (五) 種族の相違

本性の相違を來たす第三の要素は種族の差である。旅行家が野蠻人を一寸觀察して、種々珍しい相違を列擧して居るが、どの位信用の出来るものであるか不明である。中に最も正確な實驗

をしたのは、ウツドウォースが一九〇四年のセントルイの萬國博覽會に集まつた各國民に就て、心理的の實驗をしたことである。其の結果によると、感覺の鈍鈍や反應時間の遅速、簡單なる判斷等に就ては、何等著しい相違を見なかつたといふことである。白人と黒人、又は印度人との比較は大分行はれた。ペリングはフライデルフイヤの學校で、黒人の落第者數は白人の二倍で、後れた年數は、黒人は平均二年であるが、白人の子は一年半であつたと言つて居る。ポールドウインは、青年期の黒人の娘は白人の娘に比し、一定時間に六二・四% だけ多く作業を學び、其の代り二四五・三% だけ多くの誤りをしたといつて居る。メーヨーは紐育の中等學校の黒人の二九% だけが、白人の中間の點に達して居ると指摘して居る。ローウエは二百六十八人の印甸人の知能検査をした處が白人よりも劣りて、殊に高等の精神能力を要する問題に於て、著しく劣つたのを發見した。かやうに列擧してみると、種族的差異も著しいやうであるが、同種族の中にも、可なりに相違がある。而して黒人は一般に知能が低いといつても、白人と同等の教育や環境を與へたら、今よりもすつと進歩するかも知れない。只種族の相違は本性に影響するが、性の別と同じ



く一部分の要素であるといふことが出来る。

### (六) 本性の特質

吾人の本来の性質は家族と性と種族とに影響されることを述べたが、其の本性の特質は如何なるものであるか。凡そ本性といふと、従来一度も學習したことのない生來の傾向で、通常自働的又は生理的行爲と反射運動と本能と能力とに分けられる。自働的行爲といふのは心臓の鼓動を司る運動、消化作用等で、反對運動といふのは強い光が來ると、瞳孔が收縮するやうなもので、本能とは憤怒や恐怖や模倣のやうなもので、能力といふのは、それによりて、各人が話が上手になるとか、手先が器用になるとかいふやうな極めて粗笨的の傾向をさすのである。

處が、これ等の諸種の本性には共通の特質がある。

(一)は凡て機械的であることで、神經系統が全くの機械のやうに働き、經驗とか教育とかからは、全く獨立に働くのである。九ヶ月の子供の面前に光る物を置くと、その子の網膜に起つた刺戟が中樞に行つて、其の物を攫まうとする働をする。それは子供が欲するのでなく、無意識にさ

うさせられたのである。

(二)の特質は不變化である。一定の刺戟に對しては何時と同じ反應をするものである。しかし同じ刺戟を與へても、同じ反應をしない場合もあるが、それはよく調べて見ると、刺戟は同じでも其の時の境遇が相違するし、又境遇や刺戟は同じでも、子供の方、例へば榮養の障害とか、疲勞の有無とかの外に見えない害がある爲めに、同一の反應をしないこともある。例へば、同じ犬の吠ゆるのを聞いても、子供が一人で居る時と、母親の膝の上に居る時とで、異つた反應をする。又同じ様な場合に同じ事を言ひつけても、子供は喜んでする時と、中々お尻を擧げない時とがある。これ等はやはり刺戟は同一でも、境遇とか、本人の身體上の變化の爲めに、同一の反應を表はさないのである。

(三)の特質は遅れることである。凡ての本能的活動が生れた時から表はれないで、一定時を経過してから生ずるものがある。例へば三歳から四歳頃は非常に物に恐れる。八歳頃になると女の子なら人形が好きになる。九歳頃は物を蒐集する。十一歳頃には團體を作る。十四五歳から性的

本能が表はれるといふやうなものである。

(四)の特質は經過的で、永く止まらないことである。それは四圍の事情の變化、又は新しい習得の爲めに變化されるからである。しかしこれ等の本能もそれを發達せしむるやうにすると永く繼續するものであるから、性格、行爲、知力等に關係ある興味とか能力とかは、永くこれを保持せしむるやうにすることは、教育者の責務である。

(五)の特質は粗笨であることで、能く子供が小野蠻人と言はれる所以は、この點に存して居る。生來の性そのまゝでは、到底二十世紀の社會に適應しないことは勿論で、どうしてもそれを琢磨し、鍛鍊する必要がある。然らば如何にして本性を變化し得るかといふ問題が起つてくる。

### (七) 本性を變化せしむる方法

第一は刺戟によりて、これを變化せしむる。それには悪い反應を生ずるやうな刺戟を與へないやうにする方法、例へば子供に危険な誘惑的事物を與へないやうにする仕方と、他は幼稚園などで暗示的の道具を與へるやうに、善い反應を惹起すやうな刺戟を澤山與へることである。前者は

悪い刺戟を全然無にすることが出来ないのと、避くべからざる場合があるとの爲めに、正當の子供を訓練する完全なる方法とは云へない。只それは極めて幼いとか、病氣の時や或危念の際とかに必要である。

第二は反應によりて生じた快・不快によりて、これを抑制し、或は助長したりする方法である。即ち或行爲に對して、一方には賞讃・満足・快感・地方には罰・不満足、不快感とかを、子供の意識の中に密接に聯合せしめて置く必要がある。

第三は置換又は能化の方法である。即ち原始的反應と異つた反應の習慣を作りて、これを置換へるとか、或は善い方に方向を向け變へるやうにする。例へば子供が食事をする時に、單に詰め込むよりも食べるやうにし、又只食べるといふよりも、行儀よく食べるやうに教へられねばならぬし、又憤怒とか憎悪などは、極めて野蠻のものであるが、それが純化されると美の爲めに憤り、罪惡を惡むといふやうに、人生に於て最も貴重なものになるのである。

かやうに兒童の本能は如何なるものであるか、又如何にして變化し得るかを知らるといふことは、

吾人をして境遇や教養の力がどの點まで、及ぶかを知らしめ、種子を瘠地に蒔いて、其の發育を望んだり、又種子が蒔いてないのに、肥料をやつたりする迂愚を避けんが爲めである。

最後に、本性の出現が或一定の時間を要する理由に就て、種々の説をなすものがある。或人は個人の發達は種族の發達を反覆するもので、種族の發達上、遅く現はれたものが個人に於ても、遅く現はれると説明する。處が、或人は他の條件が同一であれば、生存上必要なものから、順次に先きに表はれる。故に、或本性の如きは、種族發達の順序と反して居るものがある。例へば直立して歩行することが木に攀ぶるよりも早く表はれると。しかしこれ等の諸説は皆一面の事實を強調した嫌があつて、これ等の複雑なる諸現象を一の原理の下に包容することは不可能であらう。

## 第二章 非社會性

### (一) 本能とは何か

心理學者多くは本能といふ語を用ふるが、ゼームス教授の定義によると、經驗したことがなく、或は結果を豫知することなくして、與へられた状態に對して動作する傾向が本能であるといつて居る。さすれば此の本能は吾人が前章に述べた「本來の性質」によりて生じた動作の傾向であるといふことになる。今この本能を大體上から分類して見ると、非社會的<sup>ひしゃくわてきほんのう</sup>本能と社會的<sup>しゃくわてきほんのう</sup>本能とすることが出来る。前者は物質界に自己を處置して行く際に生ずる本能である。而してこれ等二種に屬する行爲又は行動に對して、自己を處置して行く際に生ずる本能である。茲には極著しいものゝみを列擧しの傾向は極めて多數で、其の一々を列擧するに困難であるから、茲には極著しいものゝみを列擧して見ると、先づ非社會的<sup>ひしゃくわてきほんのう</sup>本能の中には、(一)一般の身體的活動、(二)食物を得ること及び狩獵、(三)からかふこと、(四)所有及び蒐集、(五)争鬭等の行爲を生ずる傾向である。今これ等の一々

に就て少しく詳しく説明して見よう。

## (二) 身體的活動

この中で最も著しいものは身體の運動である。生後二ヶ年の間は頭を直立させたり、坐つたり立つたり、歩いたり、走つたり、屈んだり、跳ねたり、又は跳下りたり、蹲つたり、横になつたり、轉びまはつたり、攀登つたり、ひらりと身をかはしたり、拾ひ上げようと身をかどめたり、平衡を保つたり、抱きついたり、手や足をつき出したり、腕を引いたり、物を投げたり、蹴つたり、攫んだりするやうに、各種の運動を絶えず行つて居る。而してこれ等の運動は生來的傾向の結果であるが、歩き方を教へるといふやうに、最初は未熟の運動として表はれるものもある。練習の機會を與へることや、其の練習の結果が快感を生ずるか、不快感を生ずるか等が、運動の效果に影響することは勿論で、これ等の條件を與へてやることは、教育者の義務である。しかし種々の型の身體的運動が現はれるか、或は缺けて居るかは、最初は神經系統の發達と關係して居るもので、教ふることは關係して居ない。故に、また發達して居ない子供に立つたり、歩かせたりす

ることを、無理に教へて誇りとする両親や乳母は子供を害ふものである。

### (三) 筋肉發達の順序

筋肉發達の順序を知るといふことは、教育上大切なことである。處が、其の發達の順序に就て、學者の意見が區々で、其の主なるものを擧げると四つになる。第一の見解は最初基本的筋肉、例へば胴・大なる關節・頸・背・臀・肩・膝・腕等の運動が表はれ、其の後從屬的筋肉、例へば手・舌・顔・發音器管の筋肉が發達するといふのである。これはホールの考で、動物發生の順序を吾人の幼兒は反覆するといふ考から來て居る。しかし此の基本的筋肉を定めるのに、單に其の大きさによる嫌がある。處が、第二の見解によると、存在に最も必要なるものを基本的筋肉とし、それが最初に表はれるとするので、ポルトンの唱ふる所である。第三の見解は筋肉運動の調整作用は大なる筋肉が最初で、漸次小なる筋肉に及んでゆく、ブライヤンの實驗によると六歳の子供では肩の筋肉は十分に發達して居るが、指の調整作用は極めて幼稚である。しかし九歳乃至十歳以後になると、指の筋肉運動の速さと精密の度が著しく増加するといふことである。第四の見解は、



エバードソンの唱ふる所で、筋肉の有意的合目的統制は種族の發達上、最も古いものから新しいものへと表はれてくるといふ考である。

以上の四見解の中で、第一の見解によると、生れて幾許もならない幼児が指でつかむ運動をしたり、足指を曲げたり、眼筋が光に對して調節したりするやうな事實を説明することが出来ない。第二の見解によると、手足の指の調節よりも、消化器や循環系統の發達が先きに表はれることの説明はつくが、生活に餘り必要でない諸種の運動が種々初期に表はるゝことの説明に困難を來たすのである。第三の見解は統制の順序が身體・肩・腕・前腕・手といふ順序に進むといふのであるが、しかし筋肉成熟の期が明確でなく、肩の筋肉の發達も、指のそれと同じく、漸次に成熟し行くもので、只速度に於て、後者の方が少しく遅いといふに過ぎない。處が、第四の見解は事實と一致して居る點が多い。即ち自發的筋肉運動では大なる筋肉の方が小なるものよりも早く成熟し、少しの努力で運動を行ふことが出来る。故に、本見解の結果として、幼兒には細かに調整作用を要する運動を後廻しにし、又有意的合目的の運動の前に自發的の自由なる運動を行はしめな

ければならぬことが分かる。即ち自由な遊戯の中に細かな調整作用を再三、再四練習して後、學校作業に聯絡を取るやうにしなければならぬ。従来、幼稚園や小學校の初年級に用ゐられた材料の中で、價値ありと認められた仕方は、此の原理に適合したものであつたやうである。

#### (四) 靜齋教育の可否

子供は寢てる時でも、起きてる時でも、仲々じつとして居ない。全く活動の權化で、後には精神活動に用ゐらるゝ神經の流ですら、今は運動を生ずる有様である。カーティスの觀察によると、幼兒は三十秒以上動かさずして坐つて居ることが出來ず、五歳より十歳までの子供は一分半以上靜かにして居ることは困難である。又他の觀察者は、子供の自發運動は大人のそれよりも、四倍乃至六倍であるといつて居る。故に、子供に向つて「靜かにしてお遊びなさい」と注文するのは不可能のことであるし。又これを強行することは、彼等の幼年時代の愉快を殺ぐ許りでなく、身體の發育を沮害するものである。即ち年寄りじみた子供を作ることとはよくない。この點は現時の幼稚園では、大分注意して居るが、小學校の一年生では閉却されて居るやうに思はれる。兒童の活

動性が教授の進行を妨ぐるといつて、單に靜かにせよと叱るのは策の得たものでない。彼の活動性を旨く利用して保育なり、教授なりを行ひ得る先生が、良教師といふべきである。

しかし活動を獎勵するといつて、例へば跳ね廻り乍ら、食事をさしても、差支ないといふやうに誤解してはならぬ。モンテツツリー女史は、幼稚園兒に靜肅の教育を採用した。即ち瞑目させたり、足音のしないやうに歩かせたり、耳語せしめたりした。これに就ては、兒童の活動性を無視するとの非難があり、又伊太利人のやうな激情の國民は、心をおちつける教育が必要であらうなど、批評する人もあるが、一日に二三回は靜肅の時間を置いて差支ないと思ふ。例へば、食事の前後一分間位瞑目靜座させることは、必らずしも兒童の活動性を殺ぐのではなく、却つて衛生に適つて居り、尙又後年の修養上にも一助となりはしないかと思はれる。併し餘り長い時間行つたり又は自然に反した方法で行ふのは、害ありて益がないといふべきである。

### (五) 發音運動

これは生來有して居る身體的運動の一であるが、初めは聲帯と口筋との運動に基づく各種の發

音をなし、それから言語が發達して来る。尤も各種の音は生後直ちに表はれるのでなく、初めの二週間位は分化しない叫聲で、それが漸次飢や苦痛や憤怒等を表はす特殊の泣聲に分化して行く。各種の音を出すことは子供にとりて一の遊戯で、それ等の音の練習と結果とからして言語が發達して行く、換言すれば子供に満足を與ふるやうな必要と賞與とに基づく音が、先づ子供の印象に残る。子供が普通の言語を話すか、或は嬰兒の音を出すかといふことは、其の周圍に於ける或人の發音如何によるもので、幼兒の言語の進歩は必要と賞與との二つの條件に基りて居る。或所に五歳になる女の子が全く話することが出来なかつたさうであるが、それはその姉が常に代りて話して居た爲めであるといふことである。

子供が最初習得する言語は文章語で、例へば「ウマウマ」といふと、それは場合によつて「おいしいものを下さい」ともなるし、「おいしいものをたべて居る」ともなることがある。主辭と賓辭とが一語で表はされ、又命令法でも、直接法でも、同一語で示される。それから漸次形容詞や動詞が表はれ、前置詞・代同詞・接續詞などは比較的後に表はれる。子供がどの位の語彙を有す

るかといふことは、其の周圍の事情によりて差があるもので、都會の子供は田舎の子供に比して遙かに語彙が多い。又教育ある家庭とか、或は富裕で、多くの使用人を有する家庭の子供と、無教育又は貧困の家庭の子供とは、其の語彙の數ばかりではなく、種類にも相違があることは勿論で、語彙の種類によりて、大凡その子供の家庭の狀況を察知することが出来る位である。

## (六) 手技の基礎

手技の基礎となる手指の運動も、最初は自發的無目的である。従つてそれ等の運動は破壊的でもなく、又構成的でもない。それが漸次練習を積んで算術や工藝に於ける技術とか熟練とかに發達するのである。手工に就て、以前は無用視して居たが、近來になりて、各國とも其の價値を認めて來た。手工に就て注意すべき原理の二三を列舉すると、

(一)粗大な運動を先にし、微妙な運動を後にすること。

(二)砂・粘土・木片・大きい紐等の材料を先づ用ゐ、剪刀・刷毛・白墨・鉛筆・縫ふ道具等を後に用ふることを。

(三)形式よりも内容を先きに行ふこと、例へば、何かを作らせる時に、先づそれが何かを意味するやうにする。形が其の物を表はして居なくてもよい。次に其の物を表はすやうにする。それからその表はし方を美しく完全にするやうにする。約言すれば、主旨を第一にして技巧を後にすること。

(四)各種の経験を積み、技術が旨くなつてから、創意的製作に従事せしむること等である。前記の(三)と(四)とは手工ばかりでなく、語學や作文教授にも適用される原理である。

## 七、食物攝取と狩獵

食物攝取は最も早く表はるゝ本能の一である。吸乳運動や、胸の處を探す頭の運動や、甘味や苦味を味ふ時の口や顔の筋肉の運動等は、最も早くから表はれる。一歳半頃になると、手當り次第に何でも口に入れるので、母親が非常に困る場合がある。しかしそれも社會上の作法の爲めに蔽はれて、其の影響を被るが、食物に對する興味は子供時代は殊に強烈で、恐らく一生涯を通じて、残存するものである。カークパトリックによると、其の興味の絶頂は六歳で、其の頃にな

ると、各種の食事に就ての經驗が得られて、食物に對する選擇や知識を得るやうになると云つて居る。

原始人に於ける食物攝取の本能と聯關したものは、狩獵本能である。この本能の特殊の必要は最早存在しないが、併し其の本來の傾向は尙存在して居る。例へば小さい動物が逃げてゆくのを見ると、吾人はそれを逐ひかける傾向がある。殊に空腹の時この傾向が著しい。其の物が近くに來れば満足する。攫まへられる位の處になると飛びかゝつて攫へ、それを失敗すると不快を感じる。若しそれを捕へるとこれを検査し、いぢくり、解體して見る。此の他鳥の巢を探したり、小さい穴に指を突込んで見たり、獵狗に行くことを好んだり、或は子供などが探偵や巡査の遊びを喜ぶやうなことは狩獵本能の特殊の發露と見るべきである。

### (八) からかふこと

この本能は前に述べた狩獵本能といぢくる本能とに聯關して居る。不同意でありながら反對することの出来ない動物や人に對して、この二種の本能が働くやうになると、それは殘酷の起源に

なつてくる。それが又返報の來ない他の者を、いぢつたり、引つぱつたり、抓つたりする時には、からかふと言はれる。この方法で、年少の子供は往々烈しく抵抗しない成人や飼馴らした動物をからかふのである。年長の子供はその犠牲者として他の子供を選ぶ。弱い者に對して、狩獵本能が働く場合には、普通「弱い者いぢめ」と言はれるから。からかふことが適度の時はからかはれる者もからかふ者も共に悪いとは思はないけれど、餘り不正當に或は習慣的に行ふと、弱い者いぢめに墮落する。それが尙悪くなると、殘忍的行爲・嘲笑・專制主義等に進んでゆく。故に教育者は此の本能を悪化しないやうに注意しなければならぬ。

### (九) 所有及蒐集本能

この二つの本能は密接に關聯して居る。何か變つた物があると、子供はそれが餘り大きい物でなければ持ち歸る傾向がある。少し年長になると、便利な場所にそれを集めて、列べたり、いぢつたりして楽しむ。それ等の者は單に自己が所有して居るといふ爲めに價値があるので、従つて家際には價値のない物までも、矢鱈に蒐集する傾向がある。此の所有本能と關聯して、好奇心。



競争心・手藝等の本能が生じてくる。クラインが所有本能を研究した結果によると、第一は飢餓を満足せしむるに役立つ物を集める。第二に身體的愉快を興ふるやうな前垂とか特殊の椅子等を集める。第三は運動具・衣裳又は遊戯に用ゐらるゝもの等を集めるといふことである。而して人生に於ける何れの物も、各年齢相當に要求し、「私の物」としたがるのである。私の家・私の家族・私の朋友・私の名譽・私の利害・私の事業・私の町・私の國といふやうに、漸次擴大してゆくが、其の根源はやはり所有本能に基づいて居ることはいふまでもない。

故に、所有本能は適當に指導しないと、極めて狭いものになり、同情とか、親切とかの社會的  
本能と全く相反するやうになる。一市民としての價値は其の者が物質ばかりでなく、知識でも、  
道徳でも所有して居るからである。しかしそれが他人に對して價値があるに至つて、個人  
の價値も亦發揮してくる。故に所有の本能は、凡ての人に價値ある物を所有することに、基礎を置くこ  
とが必要である。小は家庭や學校に於て、大は國家又は社會に於て、價値ある物を所有するやう  
に、兒童を教育しなければならぬ。即ち反社會的  
本能と社會的  
本能との間の調整が必要で、其の

調整は經驗と教育とによつて初めて、到達することが出来る。最初の粗糲なる本能をして、漸次に物質界より知識界へ、知識界より精神界へと向けるやうにし、純粹に個人的より社會的の所有に變化せしめなければならぬ。

全く價値のない物を蒐集する傾向は可なり子供時代に烈しい。バルクの觀察によると、此の本能は六歳頃より十七歳頃まで繼續し、殊に九歳と十歳頃が著しく、蒐集數が平均一人の子供に就て四・四である。蒐集する物も其の周圍によつて相違する。而して此の本能は最初は單に物を集めることであるが、次の階段になると、蒐集した數を競争するやうになる。それからは排列とか順序とか、注意の焦點になる。しかし此の本能は自然科學や郷土地理を教へる際とか、或は單語を教へる時とか、文學・歴史・藝術・科學を研究する時とか、此の本能を利用することは極めて必要なことである。

### (十) 爭鬭本能

この本能は他の本能例へば好奇・蒐集・狩獵・性慾等の本能が妨げらるゝ時に起ることが多

い。兒童のこの本能に對する大人の態度は、多く消極的で、争ひ好きの子供は罰せられ、溫和の子供は賞讃される。處が、餘り溫和過ぎる子供は身體が弱いか、又は意氣地のないものが多い。國家に於ても、反抗心の尠ない國民は何時も他國の支配を受けて居るやうである。社會の本能はあの程度まで、非社會的個人的本能に俟つて居るもので、協同とか團體的精神も、其の發達階段に於て争鬭本能の如き粗硬な本能に助けられて居る場合がある。故に子供の争鬭本能を無闇に抑壓するのはよくない。適當な發露を與へて、純化するやうにしなければならぬ。教室に於て單に靜かにすることを命じ、且つ懲罰を以て、これを威嚇して居るが如きは策を得たものでなく、却つて其の反動が烈しく表はれてくる。故に出来るだけ其の勢力を善用して、これを抑止しないやうにしなければならぬ。

## 第三章 社會的本能

社會的本能を生ずる刺戟はいふまでもなく、他人の存在又は行動である。従つて種々の社會的本能が生ずるのであるが、その中で最も著しいものは、(一)母らしき行動、それに加へて親切と同情、(二)群居、(三)承認及び誇示に對する欲望、(四)競争、(五)模倣、(六)性的行動等である。

### (一) 母らしき行動

吾人には一方に粗雑な烈しい利己的傾向があるが、他方に親切や同情を伴ふ母らしい本能がある。後者は實に人情・利他・四海同胞主義の根源となるもので、これによつて、吾人は人生に於て滋味と軟味とを感ずることが出来る。この母らしい本能は男女共に存するが、殊に婦人に於て著しく強い。又其の本能が子供に對して表はるゝ場合に、男女その方法を異にする。即ち婦人ならば抱きしめたり、接吻したりして、食べても足りない位にし、何か子供に不愉快や苦痛などが

生ずると、積極的にこれを除かうと努力する。處が、男子になると、それ程までせず、只子供のすることを眺めて喜び、彼等の苦痛を保護する位である。尤もこれは一般的話で、男親の中にも女親以上に可愛がる者もある。

處が、この母らしき本能は、狭い範圍に限られることが多く、それに所有本能が加はると、即ち自分の子供に對する親の愛情となり、往々にして他人の子供を省みる餘裕がないやうになる。子供の爲めには如何なる犠牲をも敢てするやうになり、他人が見ると、全く馬鹿のやうである。而してこの親たるの愛情は極幼少の時から其の萌芽を有するもので、男の兒でも、女の兒でも、人形を可愛がり、又弟や妹の面倒を見てやるものである。故に、これ等母らしい本能の發育を正しく指導して行くことは教育者の注意すべきことである。

## (二) 親 切

親切と同情とは混淆して居て、はつきり區別することが出来ない。これ等の心情の起源は、第一に他人に注意を向け、其の者の飢餓や苦痛を除去してやらうといふ傾向で、第二に他人が幸福

な状態にあるを見て満足し喜ぶといふ傾向である。母らしき本能は性々狭くなつて、利己的になる傾があるが、これに親切と同情が附加されると、一般の幸福とか満足とかを考へるやうになる。他人を幸福にしたいとか、他人の幸福なるを見て喜ぶといふことは人間特有の本能で、吾人が萬物の靈長たる所以の一は即ちこれあるが爲である。しかし吾人の注意すべきは、これ等の社會的の本能は他の個人的傾向や、利己を目的とする社會的傾向の中に發達するからして、容易に狭められ、悪化されるといふことである。故に教育家たるものは須らくこの本能の悪化をさけ、身體的方面よりも、精神的方面の社會的の本能へ移りゆくやうにする義務がある。

### (三) 同 情

初期の同情は單に反射的模倣で、例へば母が笑顔をすると嬰兒も笑ひ、之に反して澁面を作ると子供も泣くといふやうな場合である。それが漸時發達してくると、大分同情に近いものになつてくる。子供が滿一年より四年頃になると、人形や汽罐車などが怪我をすると悲しい顔をする。これを擬人的同情と云はれて居るが、これは此の時代の子供には、未だ自分といふことが明確に

なつて居らず、自分の衣物や玩具、其の他好きな物は凡て自我の一部となり、従つてそれ等のものゝ損傷は自分の損傷のやうに感ずるのである。この擬人的同情は又親や乳母によりて教へられることもある。例へば「そんなにひどくお人形を扱ふと、お人形が痛い」といひますよ」などと言つて聞かせるのである。

擬人的同情は極めて急速に子供の心の中に發達し、又これを利用して自然現象、例へば花・鳥風・月等を觀察せしむるといふ利益がある。只この際誤つた觀念に捉はれて迷信に陥らないやうにしなければならぬ。この過渡期を終ると、今度は眞の同情なるものが表はれてくる。眞の同情には、先づ苦しんで居る者の状態を十分に理解する必要があり、又其の者の地位に自己を置いて見なければならぬ。故にそれに對する經驗が無いと其の状態を理解することが出来ず、想像力が缺けて居ると、其の状態に自分を置いて見ることが出来ない。子供がよく動物を虐めるのは即ち經驗と想像とに乏しいからである。併し同情は單に經驗や想像ばかりで出来るものでない。他人のことに興味を懷くことゝ、それに親切といふ本能が加はらなければ、眞の同情は起つて來ない。

故に、子供をして社會の進歩に貢獻せしめ、人らしき生活を行はしむるには、彼等の經驗を擴げ、想像力を發達せしめ、他人に對する興味と親切とを喚起するやうに教育しなければならぬ。

#### (四) 群居本能

人間は本來群居を好み、離群索居が不安、不快、恐怖の念を惹起することは、吾人の能く知る所である。この本能は嬰兒時代から表はれ、一室に一人残されると泣き出し、大きくなると遊び友達を熱求する。この群居本能は人類發達史上大切なものであつたに相違ない。敵の襲撃に對しても、亦食物を獲るにも群居生活が極めて重寶であつたに相違なく、今日のやうに分業的になつた社會に於ては尙更のことで、互に相扶け助けられて生活し、一日として索居することは不可能である。

子供に於ても、この本能が強く表はれ、同年輩位の友達を熱求する。かの一人子として永い間家庭に育つた子供が、非社會的で、利己的で、往々神經質であるといふことは、吾人の常に目撃する所であるが、それ等に對しては、早くから幼稚園や學校にやつて、その缺點を補ふがよい。十



歳乃至十五歳頃になると、この本能は仲間又は結社を作るやうになつてくる。シエルドンの調査によると、男兒千百三十九名の中で九百三十四の異つた結社を有し、女兒千百四十五名の中で九百十一の結社を有して居たといふことであるし、バツファーは男兒四人の中二人は必らず徒黨に屬して居ると言つて居る。故に、この本能を抑壓するのは却つて、害を招くもので、健全なる俱樂部や團體を作り、學校作業と適當に聯絡を保つて行くやうにしなければならぬ。かやうな發露を與へないと、彼等は秘密結社を造り、やがては不良少年や不良少女の集團に惡化するものである。

### (五) 承認及誇示の欲望

吾人は本來同等のもの又はそれ以上のものから、承認されたり、自分より以下の者から賞讃されること、満足の感を生ずるものである。これに反して、叱られたり、不承認の顔をされたり、嘲弄されたりすると、非常に不愉快を感じる。而してこの承認を求める本能と聯絡して、見せびらかすといふ傾向がある。子供が褒められると、尙ほ同じやうなことを繰り返して、お褒めに預らうとするばかりでなく、他の人がくると、それを行つて見せようとする傾向がある。綺麗な衣物

や珍らしい玩具を貰ふと、直ぐ下女や友達の所に飛んで行つて、「高いんだよ」などいつて自慢する。ほんたうに立派ですわね」と合楯でも打たうものなら、大いに得意になる。

家庭に居る間は、母の承認が子にとりて最も大切であるが、小學校にゆくやうになると、教師の賞讃が極めて重大になつてくる。而して其の他の賞讃でも、正當なもので、偏頗な賞讃でないものを望むやうになる。それが大きくなると、輿論に耳を傾けるやうになる。しかし一歩進んでくると、輿論によりて餘儀なくされた行爲と、理想に基いた義務的行爲とを區別するやうになるが、子供を教育するには、この階段まで進めるやうにすべきで、徒らに盲目的に他人の意見に附和雷同するやうにならないやうにしなければならぬ。

## 六 競争の本能

競争も亦吾人が學習しないで得た傾向の一であるが、これは他の本能的行動に伴つて表はれるものである。物を獵るとか、集めるとかいふ時に、同じ事を他人がして居るのを見ると、其の者に負けると不満足を感じ、勝つと愉快を感じる。遊戯でも勝負事でも、尙進んでは知的道德的行

爲に於ても、競争心は表はれるもので、寺や教會に於ける寄附金や、慈善的行爲に於てすら、尙競争は免れない。併しこの同僚を凌駕しようといふ競争心があるからして、一方に吾人は絶えず向上せんと努めて居る。殊に子供はこの負けぬ氣を起す爲めに勉強もし、努力をするもので、何等競争の念慮のないものは、其の進歩が極めて遅々たるものである。一人で作業せしむると、教室で一所に作業せしむるのと比較すると、後方の方が遙かに多くの作業をすることは、實驗的に證明されて居る。しかし餘り競争心を烈くすると、親切とか、同情とかの情を失ひ、自分さへよければ、他人はどうなつても構はないといふ極端な利己主義になる怖れがあるから、教育者は餘程注意しなければならぬ。故に、或人は兒童をして個人的競争をさせて、團體的競争をとるやうにすべきである。例へば甲の學級全體と乙の學級全體と競争するやうにした方がよい。これは個人的競争に比して大分緩和されて、個人をして適度に努力せしめたり、利己心を強くしたりすることが尠ない。併し幼兒を観察して見ると、幼稚園や小學校の初年級に於ては十分に團體的競争をする程、發達して居ない。何れかといふと、個人的競争に適して居る。故に、吾人は兒童精神の

發達に鑒みて、競争の範圍を擴げて行くやうにしなければならぬ。即ち個人より團體へ、低い狭い團體より、高い廣い團體の競争に移るやうに指導すべきである。

### (七) 模倣の本能

模倣といふことは、從來一個人が、他の個人の行動や運動を複寫する傾向であると定義された。併し近頃の考では、模倣は斯様に一般的なものではなく、特殊のものであるとせられて居る。即ち模倣の本能的基礎は反射的模倣以外には存して居ない。他人が笑つたり、泣いたり、走つたり、顔をしかめたりすると、それを直ちに模倣するのは、それ等が本能的傾向であるからである。自發的に且つ有意的に模倣することは、習慣の結果で、他の習慣と等しく學習して初めて獲られるものである。

模倣の一般的本能たることを拒む理由が三つある。第一はかやうな本能を生ずるやうに神経系統が配列されて居るか否かを知ることが出来ない。第二に猿のやうな高等動物ですら、かやうな一般的傾向に缺けて居る。第三に子供を精細に觀察すると、模倣の一般的傾向を認めることが出

來ないといふのである。若し此の考<sup>かんがへ</sup>が正當であるとすれば、模倣<sup>もまね</sup>は大部分習慣<sup>しゅうくわん</sup>で、従つて教育家は大きいにこれの統制<sup>とうせい</sup>をしなければならぬ。蓋し模倣は練習並に其の効果<sup>こうか</sup>の法則<sup>はつそく</sup>、即ち學習の法則に支配<sup>しはい</sup>さるべきものであるからである。子供が他人の行爲<sup>かぎゐ</sup>を模倣するのは、これによつて満足を感じる爲めで、これを禁<sup>きん</sup>ぜんとするも能はざる爲めでない。風習<sup>ふうじゆ</sup>や傳統<sup>でんとう</sup>も習慣的模倣<sup>じゆんじゆくもまね</sup>で、これを破ると、嘲笑<sup>ちやうじやう</sup>と批評<sup>ひひひやう</sup>とを招<sup>まね</sup>くので、不快に感ずる。政治界<sup>せいぢがい</sup>でも、教育界<sup>きやうじかい</sup>でも、宗教界<sup>しゆぢかい</sup>でも、亦この傾向に支配<sup>しはい</sup>されて居る。しかしかやうな習慣が烈しくなると、常に舊習<sup>きゆじゆ</sup>を墨守<sup>ぼくしゆ</sup>して、何等の進歩も認められなくなる弊<sup>へい</sup>がある。

しかし又一方はこの保守的傾向<sup>ほしゆてきけいこう</sup>がある爲めに、各年代に於ける文化・發明・理想<sup>はつめい</sup>が、次の時代に傳はつて行く。試行<sup>しきぎやう</sup>と錯誤<sup>さくご</sup>との長い練習によつて得た結果<sup>けつこ</sup>を、直ちに子供が習得<sup>じゆく</sup>することの出来るのも、模倣の習慣<sup>じゆんじゆく</sup>がある爲めである。即ち子供は父親が長時間かゝつて習得したものを短時間で習得<sup>じゆく</sup>することが出来るのである。而して又各種の經驗<sup>けいけん</sup>を模倣によつて容易に習得<sup>じゆく</sup>するからして、それ等の材料<sup>ざいりやう</sup>から新機軸<sup>しんきじく</sup>を出すやうになる。かくして模倣は進歩の基礎<sup>きそ</sup>を與へるものといふ

べきである。蓋し如何に忠實に模倣するとしても、尙模倣者の氣分とか、技倆が附加されて、原型と全く同一のものが生ずることは極めて尠ない。即ち其處に新機軸とか進歩とかゞ見られる。これは藝術や文學に於て、殊に然りである。故に、教育者は子供をして、反射的模倣より各種の習慣的模倣へと向上せしめ、原型と方法及選擇に關聯して、判斷力と分析力とを發達せしめ、其の結果と原型とを比較對照するやうにし、種々の原型を模倣する結果として、其の原型と異つた獨創的の物を案出するやうに仕向けなければならぬ。

## (八) 性の本能

性の本能は本能中最も烈しいものゝ一であるが、其の發達の度が個人によりて相違し、且つ何時頃からそれが表はれるかを的確に知ることが困難である。普通は身體的特徴を見て、成熟期に達したか否かを定めるが、しかしそれとても當にならない。ベルの擧げた實例によると、八歳の少女で已でに乳房が膨大し、陰毛を生じて居る者があるのに、十九歳で、まだ乳房も小さく、陰毛も生ぜず、局部も子供のやうであつたといふことである。

性の衝動は普通七歳頃より始まり、其の後は間歇的に表はれて十五歳頃で大成する。病的になると、五歳頃から表はれる者もあり、又二十歳頃にならなければ、大成しないものもある。この衝動の表出としては、同性又は異性の者に對する戀慕として表はれ、接觸、接吻、抱擁等の行動を示すものである。尙烈しくなると、愛人の所有物に觸れることすら満足を感じる位に一種の咒物崇拜に陥り、愛者に關する夢を見るやうなことがある。

しかし社會上の風習や制裁の爲めに、性の衝動が其の發露を阻止されると、往々にして色情倒錯の行動によりて、これを満足するやうになる。例へば手淫や對手を苦しめて満足するマソヒズム等に陥る。或はヒステリーに罹かる者もある。故に、教育者は常に注意して居て子供の性の本能が働き出すのを見ると、直ちにそれに對する適當の方法を講じなければならぬ。

### (九) 性の教育

性の教育に就て先づ取扱ふべきことは、次の三つの問題に歸することが出来る。(一) 正常の發達をせしむるには如何なる手段を取るべきか。(二) 如何なる知識を何時誰れによりて子供に與ふ

べきか。(三)此の本能に關して教師が子供に對する義務は如何といふことである。

第一の問題たる早熟に對する豫防法としては、先づ身體的方面では、十分に戶外運動を奨勵して、夜も寢床に入るとすぐ眠るやうにし、局部を刺戟するやうな密着した着物をさけ、餘り暖かくせずして寢させる。又、馬や自轉車に乗せたりすることは、局部を刺戟する恐れがあるから避けた方がよい。精神的方面では性に關することは眞面目なことで、決して不思議なことも、秘密なことでもないことを教へ、淫靡な讀物や劇を見せないやうにしなければならぬ。早熟が子供の環境に支配せらるゝことは識者の一致した意見であるから、環境を純なものにしなければならぬ。

第二に如何なることを教ふるかといふに、子供の知識相應にその内容を示すべきである。所謂眠つた子を起すやうに、未だ十分に性の知識のないものに、詳細な説明をすると、知らないことまで知るやうになり、彼等の好奇心の爲めに、却つて悪い方面に向ふやうになる。又性の教育といふと、常に惡結果のみを誇大的に教ふる傾向があるが、それは子供によりて、一種の恐怖症を



起す者があり、甚しくなると、結婚を忌避するやうな精神病者に變ずる者がある。それかと言つて、青春の血湧く時代に、戀愛の神聖なることを過度に注入することが、亦弊害がある。場合場合に應じて、適度の注射を施すべきである。而して誰れがこの教育をする方が適當かといふに、やはり両親がよい。しかし親の口からいふのは如何にも耻しい氣がするので、大抵の親はこれを敢てしないが、其の時は學校の教師、家庭教師に委託する方がよい。

第三の教師の義務といふのは、他の本能と同じくこれを純化するやうにすることである。両親や保護者と相談して、適當の處置を取り、早熟を防ぎ、他の本能に順應させ、其の本能の發露を他に求めるやうにすべきである。近頃大いに發達した精神分析法によりて、其の本能を純化せしむることも一方法である。蓋し精神分析學者によると、古來有名な文學者、音樂家、畫家或は著名の外科醫、土木家等の經歷を調べてみると、それは此の本能を純化した結果であることが分かるといふことである。(精神分析法に就ては拙著「精神分析法」中文館發行を参照されたい)

## 第四章 感情狀態

### (一) 満足の感の生理的基礎

吾人は朝から晩まで、毎日孜々として衣食の爲めとか、名譽の爲めとか、子供の爲めとか、人道の爲めとか等に働いて居るが、その間に或狀態に對して満足を感じ、或狀態に對しては、苦惱を感じる。處が、この満足とか、苦惱とかは如何なる場合に生ずるかを的確に説明することは困難である。その際快とか苦とかの感を伴ふけれど、快と苦とは全然同一のものでない。或人によると、吾人の活動が滑かに行はれて何等の妨害を被らない時に満足の感が生じ、これに反する時に、苦惱を感じると述べて居る。或人はこれを少しく變へて「基本的行爲の系列が働き初めて首尾よく行はれると、其の活動は満足し、それを生じた状態に満足して居る。これに反すると苦惱を感じる」と言つて居る。

併しこれ等の行動による満足や苦惱の外に、尙獨立して常に苦惱や満足を與ふるものがある。

例へば身體的苦痛・苦味・惡臭・獨居・不評判、烈しき感官刺戟等は常に苦惱を與へ、甘味・豊富・程よく輝ける光・搖籃で搖られること・律動的認識や運動・他人が来てくれて満足さうな顔付をして居るのを見る時などは満足を感じる。

満足や苦惱の感と神經作用との關係はどうであるかといふに、或人は神經原はシナップスと機能的に接觸して一の連鎖を形作りて居るが、それが働き出さんと用意して居る時に働きを喚起されると満足を感じ、折角準備して居るのに働きを妨げられたり、或は準備して居ないのに無理に働かせられたりすると苦惱を感じるのである。例へば一列に數人が並んで、天狗取をして品物を運ぶ時に品物のくるのを待つて居る際に、品物がくると、すん／＼仕事が進ぶが、待つて居ても次の人から品物が渡つて來ない時、又は未だ來ないと思ふ時に不意にやつて來る時には、運搬作業に障害を來たすと同じである。而して或神經纖維の聯絡は常に準備をし、或纖維の聯絡は準備して居ない。かの獨立して常的に吾人に満足を與へたり、苦惱を與へたりする物があるのは、即ちこの爲めであると説明する。

この説明は事實で、例へば何か身體的作業をしようとする時に坐らなければならなかつたり、質問を許され無かつたり、心的活動をする機會を與へられなかつたりする時、或は疲れ切つた時に身體的又は精神的に何かしなければならぬ時等には、苦惱を生じ、これに反する時は満足を感じず。これ等の本能的傾向の中に興味や動機や欲求等の根柢が横はりて居る、吾人の人生、活動、教育等を支配して居る。満足の状態を獲得し保持して、苦惱状態を避けん爲めに、吾人は學習に努力するのである。満足を多く與ふる本能が強力で、且つそれに対する興味も強大である。しかし本能の力は時々變化し、經過したり、遲滞したりするので、それに伴ふ満足の感も變化する。例へば六歳頃の子供は常に身體的活動をするだけで満足し、十歳頃の男兒は狩獵や團體をすることに満足を感ずるが、漸く長ずるに従つて、これ等の傾向は他の方面に注がれて、さまで満足を感じなくなるものである。

## (二) 如何にして感情教育に利用すべきか

感情の教育に就て最も大切なことは、粗笨な原始的興味に高尚な理想的興味を接穂することである。

ある。即ち個人的承認に對する兒童の興味をして團體の承認を得んとする興味に進ましめ、更に自己の良心の承認に訴ふるやうに進ましむべきである。兒童の道德的感情をして、單に他人の賞讃を博せんとの興味の爲めに或行爲をするのでなく、正しき行爲をなして満足を得るやうにし、社會的興味が非社會的興味に打勝つやうに陶冶すべきは教育者の責任で、かくなりてこそ、吾人は動物的標準を脱して人間の位置に進むのである。

併しこの點に教育上の危険が伴つてくる。即ちこれ等の基本的興味によりて生ずる夥しき勢力を無視し、或はこれを抑壓し、又は其の動機を利用せずして、人工的の大人の動機をその代りに持つて來ようとする者がある。例へば幼稚園の子供は、それは後日必要であるからと言つて、作業をさせたり、社會が要求するからと言つて身まわりを小さつばりにさせたり、正しき行であるからと言つて眞實を言ふやうに奨励したりする者がある。しかしこれ等は他の本能的興味の爲めに妨げられたり、或はそれ等の要求を理解するだけに精神が發達して居ないので、何れも其の効果を得ることは困難である。それは寧ろ園児の望む玩具を作るに利用し得るやうな作業を行ふや

うにし、他人から可愛がられることが出来るので綺麗にするやうにし、正しいことを樂しむやうにして、眞實を語らしむるやうに獎勵する方が、彼等の毎日行つて居る動機に合し、彼等の本能的活動の基礎を置くことになるのである。要するに彼等の本能的興味に訴へて作業を行ひ、清潔にし、眞實をいふやうにすべきで、成人に於けるやうな動機を子供に強ゆるのは、子供をして自らを欺く人間に仕立てることになる。子供は子供の標準線に於て、何等恐れることなく活動せしめ、彼等の發達と同時に漸次に高尚なる理想に向ふやうにしなければならぬ。

### (三) 美的感情とその養成

美的感情の根原は光や色又は認識や運動に於ける律動に基づく運動の感であるやうである。この粗硬な感情が漸次發達して、自然・美術・詩・舞踏・音楽等の翫賞に進んで行く。如何なる種類のものが美的感情に伴ふ満足之感を惹起すかといふことは、主として各個人の教育と環境とに因るものである。

幼児が彩色箱や簡単な音楽で満足之感を生ずるのは、教育ある大人が北齋の繪やベートベンの

絃樂によりて美的感情を生ずると少しも變りはない。粗硬な基礎的の觀賞から複雑な藝術的觀賞に子供をして向上するやうにしなければならぬ、それには子供の發達に應じたものから始むべきで、それ以上のものから始めると、却て美的觀賞を殺ぐやうになる。強い而も善い色が子供に與ふべき繪の特質とすべきで、それ等を彼等の室に懸けて置くことは大切である。繪は勿論美的觀賞以外の目的の爲めに用ふることがある。お話の聯想の爲めに用ゐらるゝ繪は、直接美的觀賞を目的とする必要はないが、それ等の繪の理解から漸次に色彩の調和とか遠近法の美等を樂しむやうにすべきである。音楽・詩・歌等も最初は明快な簡單なる律動を用ゐ、其の他の質の如きは二次的にする。後年になりて、形式や協和に力を用ふべきである。要するに美的感情を涵養するのは、漸進主義によらなければならぬ。

創作に伴ふ快感と美的觀賞に伴ふ満足の間と同一でないといふことは勿論である。前者は活動に伴ふ満足で、動的である。後者はこれに反して瞑想的満足で、多少靜的である。しかし二者は互に相聯關し、一方が他方を喚起す條件となることがある。即ち美的製作をしたる後美的瞑想に

耽りて喜ぶこともあるし、美的翫賞が創作的興味を刺衝することもある。併し二者の態度は全く異りて、一方の教育と發達とが必らずしも他方の教育や發達となるとは限らない。而して大多數の者は受動的の翫賞力を有して、創作的才能に缺けて居るから、子供の教育にも其の點を考へなければならぬ。

現時の學校教育を見ると兒童の翫賞力養成が大に粗略にされて居る。例へば遠足をするに直ぐに教師は自然研究にこれ結びつけて、自然の美的翫賞を疎かにする。博物館にゆくと直ぐに美的見地を脱して歴史的又は人類學的見地から説明するに忙殺されて居る。繪畫、音樂、彫刻等の藝術品に接しても翫賞といふよりは、批評に移りて行く。かくして兒童は益々知的に傾いて美的翫賞から離れて行くのである。

#### (四) 原始的情緒

原始的情緒は吾人が本來具備して居るもので、感情生活の一部を構成して居るものである。或人は情緒は本能の意識的の方面で、或種の情緒の興起はそれに特有なる本能によりて規定される



と言つて居る。原始的本能の情的方面は一定の情緒に密接に聯關して、例へば遁逃の本能は恐怖の情緒に、争鬪の本能は憤怒の情緒に結び付いて居る。これ等は共に本來の性質にその根柢を有して、互に密接の關係はあるが、しかし一方が必ず他方を惹起すやうに、両者が互に對應して居るものでない。例へば子供が争つて居る時には、怒つたり、恐れたり、勝利を喜んで居る種々の情緒を表はすのである。又、憤怒の情は争鬪本能の表はれない時に起ることもあるのである。各種の情緒は夫々如何なる状態に於て起るものであるかを、明かに定めることは困難である。ネールが恐怖の原因を調べた處によると、約三十種の事物の形状、約二十の特殊の行爲・同数の衣裳の模様・多數の習慣・自由の制限・豫期や目的の阻止・矛盾・自我の抑壓・自尊心を傷けること・不正・嫉妬の原因・特殊の事情等であつた。ゲセルの調べた嫉妬の原因も殆んど同數位である。その他悲哀や哄笑の心理を研究した人の結果も、其の根本的起因が種々あつて、的確にかゝる原因から、かゝる情緒が誘發されるといふことが出来ない。これは今後の研究に俟つより外はなし。

## (五) 情緒統制の一般的方法

子供の情緒は大人のそれよりも強烈であるが、しかし繼續することが短かい。彼等の情緒は統制さるべきもので、これを除去すべきでない。蓋し情緒は勢力を喚起すに極めて貴重なものであるから、これを保存し陶冶しなければならぬ。即ち彼等の最初表はれるや、身體的、物質的であるが、それを知的精神的に向上せしむるやうにすべきである。欲求する目的も向上させ、例へば自分の成功を喜ぶ如くに、他人の成功をも喜ぶやうにし、同情や親切も友人や未知人にも及ぼし、物質的のみならず、精神的同情をも起すやうにしなければならぬ。

或人は感情を抑制するには、先づそれに伴つて、生ずる表情運動を抑制するに限る。例へば憤怒の情が起ると、憤怒の結果何も利する所がなく、却つて損をするものなることを意識して、憤怒に一步も譲らないやうに抑止するとよいといふものがある。しかしそれは大人の制法なら兎も角、子供には餘り効果が遅い。蓋し利害關係を意識せしむるに長い時間を要するからである。怒り易い性質の者には、なるだけその勢力を他の烈しき身體的運動に轉向せしむるやうにする方

がよい。球を投げたり、木を伐つたり、長く歩かせたりすることは、人のよく知つて居る極めて安全な統制法である。

此の他、對手の駄洒落や滑稽は態度が急に怒る者を哄笑に變ぜしむることもある。又身體的緊張を弛緩せしむることも有效な方法である。四歳になる男兒がよく怒りて蹴つたり暴ばれたりする癖があつたが、其の父は煖爐の前に連れて行つた。處が、火の中に落ち込む恐れからして、暴行を止めた。それから初めて自己抑制の方法を體得するに至つたと言はれて居る。或る親は子供が怒ると浴室につれて行つて、顔と手に冷水をかけてやる者もあり、或は冷水中に投げ込むものもあり、或は冷水を飲ませて三歳から六歳までの子供の怒りを鎮めた者もある。或は烈しく發作の起らない時にお囀を聞かせたり、唱歌を語はせたりしても、効果があると言はれて居る。尤も年長の子供になると、意識的に情緒を自制するやうに、漸次教養すべきは勿論のことである。

### (六) 恐怖の情とその統制

恐怖は生來の傾向で、經過的と遲滯との法則（第一章本性の特質参照）に従ふものである。心

理學者の中には、或種類の恐怖は、兒童の發達に於ける一定の時期に表はれ、その後無くなると言つて居る。例へば暗がりに對する恐怖は、三歳乃至四歳の時、最も烈しく、それから漸次減少する。然るに二歳の頃から爬蟲類を恐れるといふことである。これ等の恐怖が表はれるのを豫知して、これに反對する習慣を養ふことは恐怖統制に都合のよい方法である。早くから暗がりに一人寝せて置くとか、動物に馴れしめて置くと、それ等に對する恐怖が餘程軽減されるか、或ひは全く表はれないで終ることもある。處が、世の中の無智の親は、表はれないで済むやうな恐怖、例へばお化けに對する恐怖を作り出すやうなことをするのである。

恐怖の情を抑制するに、最も重要な方法が三つある。第一は例を示して恐怖の傾向を禁止する。第二は恐怖を惹起す状態に、或満足の情を惹起すべきものを聯合させて、恐怖の反應を弱らしめるのである。第三は子供の理性か知識に訴へて、恐怖を生ずる要素を除去するやうにすることである。これ等の方法の價値は大部分子供の年齢と經驗とによるもので、就中、第一は常に有效であるが、第三の方法は其の事實が子供に取りて大切なことであれば効果がある。

粗朴なる形式にある恐怖は、餘り必要のない情緒であるが、その變化したものは、社會を維持する上に極めて大切である。恐怖は早くから身體的苦痛と聯合して居り、大人が子供を統御するに最も普通に用ゐらるゝ武器の一つである、罰即ち身體的苦痛に對する恐怖は子供を育てる間にどうしても免るゝことの出來ないものである。蓋しこれは幼年時代に於て理解し得らるゝ唯一の方法であるからである。しかし他の本能や能力が發達するに従つて、恐怖の統制の手段も、漸次衰へて行かなければならぬ。友達の不承認を恐れたり、身體的又は精神的活動を満足せしむる手段を奪はれることを恐れたり、他人より追ひ越されるのを恐れたり、團體の嘲笑の的となるのを恐れたりすることからして、漸次向上して、自己の理想を曲げなければならぬことや、良心に背くに至ることを恐れるやうに變化さすべきである。

### (七) 嫉妬の情とその統制

嫉妬は恐怖や憤怒と同じく、根柢深き本能的情緒で、或觀察者は幼兒の第一年に於て、已に表はれると言つて居る。學校に行くやうになると、賞與・譏辭が主として嫉妬を惹起す原因となり、

衣服・辨當・學用品等に就て、嫉妬を起すものもある。幼児に於ける嫉妬の表出は泣いたり、蹴飛ばしたり、争つたり、足を踏み鳴らしたりするが、六歳より十二歳頃になると、濫面を作つたり、悪口したり、威嚇したりする。

嫉妬の情は全然排斥すべきであるか、或はこれを保存するだけの價値があるかといふことに就ては、極めて困難な問題である。蓋し嫉妬は自己を他人と同一程度に高めることが出来ないので、他人を屈せしめて同一たらし、或は他人をけなして自己を高く上げようとするものである。故に、不公平や不平等に對する豫防として必要であると説くものがあるが、しかし一般に不必要な、否寧ろ、心身に對して有害な結果を將來するものである。

子供に於ける嫉妬の取扱方に就ては、嫉妬が傷けられたる自我の象徴とも見るべきである以上、彼等を慰め、保證を與へ、自我を回復するやうにすることである。小さい子供に於ては、兩親の愛の保證、凡ての子供に平等の愛を濺ぐことが、唯一の救済策である。年長の子供に對しては、自己が何であるか、又何を所有して居るかに就て、自己を尊敬することを教ふる方がよい。

價值ある性質に對する正常の自尊心を發達させることが、病的嫉妬を治療する最上の方法である。これに反して極度の屈辱や卑下の心を其の子に強ゆる親は不知不識の間に、嫉妬の心を助長しつゝあるといふべきである。

この他尙、幾多の原始的情緒があるが、それ等の方面の研究は、未だ十分でなく、大に今後の研究に待つ所が多い。それでそれ等の紹介は茲に省いて置くことにする。

## 第五章 注 意

### (一) 注意作用は本來の性向

吾人には先天的に或状態に於ける印象を、一層強く保持しようとして、その状態に自己をふり向け、その状態を長く維持しようとする傾向がある。こんな風に吾人が反應する所の状態といふのは、本來吾人に興味のあるもので、その状態に對する吾人の態度を稱へて注意の態度と名づける。而して吾人が本能的に興味と注意とを喚起する状態は、暴風雨や烈しき痛みのような強烈なる刺戟、靜穩の處にけたまゝしい聲のやうな急激なる變化を生ずる不意の刺戟、不思議なる刺戟、單調よりも寧ろ律動的又は音調的刺戟、動くもの、強度は弱くても、隠れたり、見えたりするもの等で、又有機的必要の前兆となるやうな刺戟や、驚愕・反撥・遊戯のやうな行動を生ずる状態も、亦吾人の本來の注意を喚起するものである。しかし種々の一般的注意は本來の賜でなく、兒童の年齢や性別によりて相違する。而してこの相違を知るとは父兄や教育家に取りて最も大切



なことである。

先づ成人と子供との注意作用が相違して居る點は、その擴がりである。成人は一瞥で四個乃至五個の聯絡なき事物を捕捉することが出来るけれど、子供に至りては、それ程出来ない。この差異は生長といふことと、習練にいふこととに歸することが出来るが、その中で、前者が後者よりも、一層重大なる要素をなして居る。

## (二) 子供の注意は一局部

或一瞬間に於ける注意の焦點は、一個の事物の思想或は一個の概念的系統に限られるとは、心理學上の法則で、凡ての年齢を通じて然りであるが、成人になると、一個の事物と云つても、一の全き系統たることが出来る。而してそれに聯絡した大切な條件や關係等は、凡て注意の周縁の所にあるが、子供になると、これ等の聯絡したものが無く、一事物に注意するならば、その事物きりである。即ち何等の修飾もない裸の一事物、一事實、一條件に注意するに過ぎない。故に博物などで色と形と同時に注意させるやうにしても、彼等はそれらの一つ一つに注意する。地

理科に於て、氣候や土地の形状等からして、都市の發達などを考へさせると、彼等は一つ一つの條件に就て考へ、全體を綜合して考へることは困難である。一つの時に、一つの事を教へよとは、教授上の箴言であるが、これは子供が幼少であればある程然りである。故に、教師は自己の取扱ふ子供の注意の範圍は、どの位のものかといふことを一方に考へ、教へる材料の複雑なる程度を他方に吟味しなければならぬ。

### (三) 習慣上の相違

子供の注意の擴がりが狭いといふことは、又機械的慣習の缺如にも基いて居る。成人になると機械を運轉せしむる爲めに、目や手や足を働かせながら、煙草も飲むし、談話もし、批評もすることが出来る。樂譜と歌詞とを讀みながら、その意味を解し、手と足を動かしてピアノを弾じ、聽衆が耳を傾けて居るや、否やにも注意することが出来る。かやうに成人になると、同時に多くの事が出来るのは、その仕事の中で、特殊の注意が入らない位機械的習慣になつて居るので、外見上、注意の範圍が廣くなつて居る。處が、幼児に於ては、吾人成人が別に注意しないで、容

易に出来る事でも、特殊の注意と努力とを要するもので、一の時に、一つ以上の事をする事は極めて稀である。讀方の時各語の發音とか抑揚とかに注意したり、或は本の持方に注意したりとその意味を會得しない。これに反して意味の方を注意すると、その他の事は凡て犠牲に供せられる。又、綴方の作業に於て、字を綺麗に書くやうに注意させると、内容の方が御留守になる傾がある。算術などでも數の結合とか、運算の形式に重きを置くと、問題の解決の方が疎かになることがある。何か手で仕事をして居る時、話をさせると、手の方は怠り勝ちになる。

かやうに注意は一つの時に、一つの事に限つて居るが、機械的作業になると、同時に幾つか出来る。しかし思考を要するものは、一つに限られて居る。各種の作業が機械的になることは、吾人の進歩の上に、又精神的並に身體的經濟の上に大切であるが、教師たるものは、如何にして機械的になつたかといふことに注意しなければならぬ。蓋し多くの注意・訓練・實習・無限の單調によりて、初めて機械的になつたものであるが、成人になると、其の道程を忘れて仕舞ふからである。

#### (四) 集注力が弱い

精神を集注する力が、大人と子供とに於て相違する。一般に子供は大人程或事物に深く注意を拂はない。注意の波が子供に於ては、大人程に垂直でなく、其の頂上も大人に比べて、遙かに低く、降下する程度も遙かに浅い。而して各種の障碍物によりて妨げられ易い。どんなに熱心に遊び、又は仕事に熱注して居ても、耳と目とは何時も開かれて居るやうなもので、一言、一語一動作、能く彼等の注意を妨げることが出来る。勿論、これは常に然りといふことは出来ない。子供でも、可なり自分の氣に入つた遊戯に熱注して、他を忘れることもあるが、大人が自己の興味あることの爲めに食事をも忘れ、約束をも忘れるのとは、全く比較にならない。子供は平均の我人の有して居る注意の集注力に比して、遙かに劣つて居ることは、疑ひもないことである。

#### (五) 注意繼續の時間が短い

集注力の缺如と密接に連關して居ることは、注意力の繼續する時間が、子供に於ては、短いと云ふことである。別に妨害を受けなくても、子供は直ぐ一つの事に厭きて仕舞ふ。極一瞬間注意

が駐まるだけで、一事物より他事物へと轉々變化してゆく。かやうに集注力に缺け、注意期間の短いことの主要なる原因は、精神内容の貧弱といふ點に存して居る。元來、注意は同一事物の上には、數秒以上止まることが出来ない。故に、事物が變るか、思想の方向が變らなければ、長く注意を持續せしむることが出来ない。處が、子供は經驗と知識とに乏しいから、或る一の狀態に連關した聯想も無く、思想轉換の方法も知らず、爲めに注意を永く持續せしむるだけの狀態に於て居るのである。極めて良好の條件にあつても、其の深さに缺けて居るので、集注することが出来ず、又直ちに材料が盡きるので、長い間注意をつゞけることも出来ない。これは年が若ければ若い程然りである。

知識が増してくるに従つて、他の條件さへ同一であれば、注意の深さも、注意の期間も増加して行く。これは子供が勉強して居るのを見ると、明白に分かることである。即ち或る本を讀ませると置くと、一回か二回か讀んで、それ切りにする。蓋し彼等の見る限りでは、それ以上變つた材料をも見出さないので、注意を持續する方法も、お仕舞になつてしまふ。この時一二の暗示や

質問を發すると、尙暫らくは彼等の興味を持續することが出来る。

學校教育上の注意の持續を顧慮すべき最も主要なる點は、生徒の年齢が若ければ若いだけ、授業する時間の區分を短くしなければならぬといふことである。又、生徒の経験しない新事項を授くる時も、時間を短くすべきである。故に、各科の授業時間は、幼稚園の十五分から、中學校の四十五分授業に至るまで、子供の年齢によりて、増減する計りでなく、科目の性質や、新奇の點によりても、長短にすべきである。

知識と經驗が増加するに従つて、注意の集注力と長さが増加する計りでなく、練習によりても増加するものである。十五分乃至二十分以上、注意することに慣れない子供は、凡ての必然的條件が存在するに係はらず、それ以上注意を持續することが困難である。成人になると、習慣によつて一時間乃至二時間半位つゞけて仕事をする。しかしその後になると、神經過敏になり、注意は散漫し、最良の作業期が過ぎて居る。若し注意力を急速に進歩せしめようと思へば、注意力を長くする習慣を、學習法則の適用によりて形成すべきである。

## (六) 注意の型

子供の注意は最初感官的型式に屬し、成人の注意は知的型式を示して居る。即ち感官的印象や運動が子供の注意を惹くもので、知的注意は最初感官注意に連關して、二次的に生じてくるに過ぎない。試みに、成人と子供と一緒に散歩して御覽なさい。子供は見ることに、聞くこと、種々の運動・味・嗅等の感官的刺戟に注意し、大人はこれ等感官的印象を惹起した關係・心象・聯想・記憶等に注意する。其の他實際上の出來事に就て觀察しても、此の差異は明白である。最初に注意の習慣を得るのは感官世界のもので、概念や抽象的に注意の向ふやうになるのは、經驗が知覺的形式を取るやうになつてからである。而してその發達は極めて徐々たるものである。

## (七) 有意注意の發達

子供時代の注意と成人の注意との間の最も重大なる差異は、注意作用に伴ふ努力の有無である。尤も或種類の事物に對する注意は自發的である。例へば注意せらるゝ事物そのものが何か價值があるとか、それによつて満足を感じるとかであれば、注意が自然にその方に向いて行く。處

が、これに反すると、吾人は強ひて注意するやうに努力しなければならぬ。例へば、自己直接の必要に基かないで、義務・社會的強迫・理想に基くやうな事物に對しては努力的注意を要する。處が、子供に於ては、この努力的注意に缺けてゐる。それは身體の方面が、未だ十分に發達して居ないので、練習が積んで居ない爲めとである。注意の子供らしい自然の形式は自發的無爲注意で努力的有意注意は年齢と陶冶とによりて生ずるものである。

有意注意と自發的注意と何れが教育上、價値があるかに就ては、議論のある所である。蓋し自發的注意になると、自己の興味の湧いた時に起るのであるから、集注力も強く、且つその繼續することも長い。これに反して努力的注意は努力して居る間は、可なり強い注意を働かすけれど、長つゞきがしない。従つて傑作が出来ない。世界を驚かすやうな仕事、新原理の發見、吾人の感情や意志や、或は良心に深く刻まるゝやうな作品は皆自發的注意の賜である。しかし又一方から考へると、所謂自發的注意は子供時代の特質で、自己の本能と極めて密接な關係を有し従つて、利己的で粗笨である。故に、今日の進歩した社會には不適當である。自發的注意をして、感覺的、



個人的、且つ往々利己的なる標準から、知的、社會的、理想的なる努力的注意の標準に、向上せしむることが、究極に達する必要なる手段である。茲に於て、自發的注意は本能的標準にあらずして、最高最上の理想の標準にあるやうになる。故に、目的は自發的注意を得るにあるが、それに達する手段として努力的注意が必要である。

處が、教育上大なる誤謬を來たすことは、前記の關係に注意しないことである。昔時の教育家は努力そのものに價値ありとして、困難なことを要求しさへすれば、それで陶冶が出来たと考へた。これに反して、現代の軟教育者は、兒童を喜ばすものゝみが効果を奏し、少しでも無理なことは兒童を害ひて、効果がないと考へる。處が、眞理は兩者の中間に存して居る。即ち水に浮ぶ舟を作らんと、熱心に欲する子供は、嫌ひな計算を知る必要を感じる。好きなお友達に上げようと思へば、如何に面倒でも、細かく縫つてやらなければ、みつともないと感ずる。かやうにして子供は初めて努力的注意の價値を知るやうになり、鞏固な性格を作る習慣を養ふやうになるものである。

## (八) 誘發せられたる注意作用

かやうに價値のある自發的注意は他の手段により誘發することが出来る。乗算九々を暗誦することは、何等自發的注意を喚起しないが、その能力で學習作業の效績が分かるといふ場合には、自發的注意を生ずる。本を讀むことそれ自身は無興味の作業であるが、隣人を、打負かさうと努むる時には、興味が湧いてくる。如何なる種類の活動も、根源的満足之感と聯合したり、或はこれを伴生する時は價値を生ずるやうになる。即ち興味がその方へ移りてゆくやうになる。かくして生じた興味は自發的注意を包含して居る。時としては、その誘導物が取去られても、伴生した興味は繼續する。實に或種の誘導は人生を通じて大切である。成人が或事物に自發的注意を與へて居るのを調べて見ると、其の事物それ自らに價値あるが爲でなく、それに連關した或る他の價値の爲めに、自發的注意をして居るものが多い。故に、吾人の性格を作り上げるには、此の種の誘導物は必要である。然らば如何なる誘導物が子供に適して居るかと云ふに、(一)子供の發達程度に相當したものを選ぶこと。(二)注意を要求する中に最も自然的のものを選ぶこと。(三)大多數

の人に向くやうなものを選ぶこと。(四)學校や人生の舞臺に發見されるやうな永久的のものを選ぶこと。(五)最高の働をなすやうなものを選ぶことである。

誘導すると言つても、何でもさうしなければならぬと誤解してはならぬ。それは子供の本質と社會の要求とが一致しない時に必要である。若しも教師が子供の豊富なる本能的興味を利用することが出来て、それを形式的人爲的要求や誘導物に代置するやうなことをしないで済ますことが出来たならば、子供の本性を傷けられず、教育も速かに進歩するものである。個人や種族の要求を最もよく満足せしむるやうな事業に對して、集注的永續的自發的注意をするやうにし、價値ある目的を有する事柄に全力を注ぐやうに訓練し、根本的に重大なる事物そのものに價値を見出して本能的興味をそれを利用するやうになることは、可なり後年の教育を俟つて、初めて出來ることである。

## 第六章 感官知覺

### (一) 知覺の發達

目や耳などの感官に於ける刺激が中樞に傳はりて行くと、色とか音とかの知覺を生ずるが、知覺は出生の當初から完全に生ずるものでなく、吾々大人の有する知覺は、漸次發達して來たものである。しかも出生當時は感官によりて、その知覺の程度が同一でない。味覺や觸覺を司る器官は可なりよく働くが、耳・目・鼻は全く不完全である。その二三年の間に、これ等の器官は發達してくるが、それ等の知覺は未だ混沌たるもので、分化して居ない。恰も吾人が睡眠や感覺脱失症から徐々に覺醒して來て居る時の状態に似て居る。従つて事物の性質や關係などの意識は、全く缺けて居る。

かやうに混沌たる状態から、どうして吾々に見るやうな明白なる知覺が發達するかといふに、先づ第一は種々の感官を度々使用することゝ、異なりたる感官が種々と組み合はされて働くこと

によつて生ずるのである。例へば幼兒が、ガラ／＼を手にしたとする。彼は手と腕とに觸覺と筋覺とを生ずる。それを打振れば聽覺を生じ、眼界に入りてくれば、視覺を起し、若しそれで身體の一部を打つ時は、その部分に於ける觸覺を生ずる。それを口の方に持つてくると、觸覺の外に、往々味覺をも生ずる。他人がそれを打振る時は、又前記の感覺の多くが反覆される。次にがらがら鳴らないものを振るときは、ガラ／＼と異つた感覺を生ずる。かやうにして同一感官によりて無數の異つた性質の感覺を生じ、或は異つた感官によつて、種々の異つた刺戟が傳へられる。故に、感官知覺の發達は經驗の多少に由ることが大である。

第二は注意の改良に基づくもので、注意が漸次に明晰と確固との度を増すに従つて、感官知覺も改良されるものである。注意が不確實に動搖常ない時は、事物の知覺も極めて皮相的で不完全たるを免れない。第三の條件としては、事物やその性質に注意する練習、事物間の類似點と相違點とを辨別することに、熟練することが知覺の發達に影響する。故に、かやうな辨別作用を必要とし、或は獎勵するやうな境遇にある子供の知覺は、然らざる境遇にある子供のそれに比して、

遙かに内容が豊富である。例へば都會の子供と田舎の子供とを比較し、知識階級の子供と無學の家庭の子供とを比較し、家庭教師や大人を相手にして、遊ぶ子供と子供同志遊ぶものとを比較して見ると、前者の觀念内容が後者のそれよりも極めて豊富である。

## (二) 大人と子供との差異

大人と子供との知覺の相違は、發達の相違といふ一言につきて居る。一般に子供の感官知覺は貧弱で、不確實で、且つ精細でない。生後四五年の中に驚くべき進歩をするが、學齡に達した子供の觀念内容を各國の學者が調査した所によると、極めて有りふれた事物を知らなかつたり、又、觀察の不十分を示すことが往々ある。私が嘗て日本橋の某小學校で検査した結果によると、二年でお墓の繪が分からないものがあつた。知力検査では決して低能では無いが、その男兒は一度もお墓に行つたことが無いので知らないのである。能く調らべて見ると、その兩親は地方より出て、東京で可なりに成功し、一人も死んだ者もなく、親類や知人も尠ない所から、子供を連れて墓に一度も行つたことがないといふことが分つた。教育者が口を極めて自然物に接せしめて、あらゆる

る事物を觀察せしめよと絶叫するのは至當のことである。

大人と子供の知覺の他の差異は、觀念を喚起するに必要な刺戟の分量の相違である。子供が幼少であればある程、刺戟の量を多くしないと知覺することが出来ない。幼兒は母親が異つた衣物を着て、見馴れない所に居ると、それを自分の母親と認めることが出来ない。後姿を見ただけで、或は足音を聞いたただけ位で、母親たるを認識するには、餘程年が長じて來なければならぬ。小學校の生徒などに本を讀ませて見ると、幼少の者ほど一字一字を辿りて凡て讀まなければ其の意味を捕捉することが出来ない。

大人と子供との知覺作用に於ける第三の差異は、知覺する刹那々々の氣分の相違である。次の瞬間に何を思考するかといふことは、其の時の心の状態に影響するもので、先行する氣分は其の人の見地を決定する有力なる要素である。吾人は凡て吾人の豫期するものを見たり、聞いたりする傾向がある。處が、子供はこの經過する心の状態の影響を被ることが大人よりも烈しい。従つて、教育上、二個の重要な點が生じてくる。第一は作業の目的を明かに子供に知らしむること、

彼等は何の爲に作業して居るか、何を目的として居るかを知らさなければ、彼等は益々盲目的な必要な行爲をするやうになる。第二は新しい材料は成るべく彼等が新しい作業に順應するまで與へてはならぬといふことである。彼等の思想が算術から全く脱して居ないのに、直ちに讀方とか地理とかの教授に移るのは彼等の觀念を益々混亂せしむるものである。新材料が提供せらるゝ前には、必ずそれに對する準備を子供の中に起して置くやうにすべきである。

經過的精神内容の力が強大である爲めに、子供は大人よりも錯覺に陥り易い。三越のやうな人込の多い百貨店へ三四歳の子供をつれて行くと、一寸母親と似た婦人の方へ「チャーチヤン」といつて走つて行く。父親の歸りを待たせて居ると、洋服姿などが一寸似て居ると、お父さんが今電車から降りたなどゝいつて、幾人も幾人も父と間違へる。齒醫者に連れて行くと、器械がまだ齒に觸れないのに、痛いと呼ぶことが往々ある。勢力ある人、例へば父なり先生なりから、かくかくのものが見えるだらうとか、聞えるだらうなどゝいふと、本當にそれが見えたり聞えたりする。子供の暗示性を研究をして見ると、如何に彼等が有力者の暗示に容易に影響さるゝかが分



る。何か誤つて怪我などした場合に、こんな風にして怪我したに相違ない。さうでなければ、こんな傷は出来ない筈だと強いふと、實際はさうでなくてもさう考へるやうになつて仕舞ふ。犯罪者の證人に子供を用ふることがあるが、それは當になるやうで仲々當にならない。かやうかやうだらうと肯定的に問へば肯定的の答をし、そんな筈がなからうと、否定的訊問をすると、否定的の答をするのが、子供の常で、それが年少であればある程、烈しいのである。しかし其の時の心の状態によつて、影響されること、而してその状態は一方に暗示によりて左右され易いといふことが、父兄や教師の教育力が子供に行はれ得る所以の一である。

### 三 特殊の知覺の發達

特殊の知覺の發達する有様を詳細に知ることは、困難であるが、大體のことは明かになつて居る。眼は生後暫らくの間は何の働きもせず、二週間の後、漸く光つた者について行く。しかし六ヶ月位たゝないと明暗を識別することは出来ない。色の區別に至りては大に後れ、六ヶ月以後に於て、赤と黄とが區別出来るやうになる。處が、青色の區別は最も困難であるといはれて居る。

色と光度との識別作用は十六歳乃至十七歳まで發達する。多數の觀察者の言によると、女兒と婦人とは一般に男兒や男子よりも、此の能力が優れて居るといふことである。空間知覺に關しては人によりて意見が極めて區々である。或人は距離の判斷は七八歳にならないと出來ない。幼兒は往々月を擲まうとするといつて居る。處が、他の研究者は、五六歳になると可なり精密に、距離の判斷が出來ると言つて居る。要するに近距離の空間知覺は最初手と目で助けられ、後には身體を動かすことによりて、著しく發達する。従つて色の知覺よりも尙早く、且つ良好に發達するやうに思はれる。勿論、大人が數里をも距つ空間のことを思考する際の空間的概念は後年にならなければ發達しない。

重さの知覺は年齢の増加と共に、餘り變化がない。練習すると幾分發達するが、それ程辨別力の發達を來さない。皮膚の感受性は一般に子供の方が大人よりも鋭敏で、練習すれば、著しく發達すると言はれて居る。その實驗的證據としては、觸覺と辨別作用の微妙を要する工場では、子供が非常に熱望されるといふことである。盲人の指端の感覺は鋭敏で、彼等の眼は手先について

居ると言はれて居るが、それ等は凡て不斷の練習に基づくものである。かの山岡中佐の如きも、點字を習ひ始めた當時は、元が軍人育ち丈に指端が粗硬で困つたが、漸次練習を積むに至りて、觸感が鋭敏になつて來たといふ話である。

音の知覺は最初の二三年間は、餘まり發達しない。只音の高低を辨別するだけで、調律の如きは、直接の模倣或は記憶によつて出來る位である。而して音の強度・聲量・方向・性質等には、少しも注意しない。ムンローが米國での調査によると、六歳以下の子供の殆んど四〇％は記憶によりて、調律を言ふといふことである。音の高低の區別は個人によりて相違するが、練習と年齢とによりて、改良されるものである。但し十歳乃至十五歳頃になると、其の感受性の進歩は止まつて仕舞ふといふことである。

韻律の知覺は極めて不完全であるが、當歳の子供にもあるやうである。二乃至四脚の韻は通常三脚の韻よりも再生するに容易である。音楽・詩・散文等に於ける長い韻は青年期に達して、その種類に興味を有するに至つて初めて分かるものである。しかし子供は幼少の頃から律動的音や

運動を好むもので、烈しく泣いて居ても、面白い簡単な音楽を聞かせ、それに應じて揺つてやると泣き止まないことは殆んど無い位である。従つて幼児教育上、律動を利用することは、極めて當を得たことで、且つ身心の活動を盛ならしむるにも利益がある。

時間の知覚は最初は極めて徐々に發達するもので、四歳頃の子供には、昨日とか明日とかを理解しない。彼等にそれを理解せしむるには、昨日起つた事件を説明して、その時が昨日といふのだと言つて聞かせる。しかしそれとても四五歳まで、理解しない子供が多い。従つて此の時代の子供には、明日とか、昨日とかの語を誤用したり、過去や未來の動詞の使ひ分けを誤つたりして大人を笑はせることが往々ある。七歳乃至八歳頃の子供では一日といふことは日出より日没までを意味して、何時間などいふやうに精密に考へては居ない。九歳頃までは一年といふと、只永い期間といふだけで、明確なる觀念を有して居る子供は稀である。

#### (四) 感官に於ける諸種の缺陷

吾人の知識は最初主として外界から來たものであるが、子供時代は特に然りで、彼等は感官世

界に住んで居ると言つてよい位で、凡ての知識はこれ等感官を通じて入つて来る。従つて五官の完全不完全は、子供の教育上、重大の影響を與ふるものである。故に、學校に入る時、或は其の後でも絶えず五官の検査をして缺陷の有無を明かにし、矯正治療の出来るものは、其の方法を講ずる必要がある。

子供に於ける感官の缺陷は先づ眼が最も多い。英國・露西亞・日本並に合衆國に於ける統計からして、ラスクは學童の一〇%から三〇%は、眼鏡を用ゐて視力の不完全を補つて居ると結論して居る。その中で、最も普通なのは、近視で、それに次ぐのは遠視と亂視とである。これ等は先天的のものもあるが、後天的に父母の注意が行届かない爲めに、起ることがある。而してこれ等の缺點を氣付かずして、放任して置くと、永い間には精力を消耗して神經衰弱になる恐がある。有名な醫學博士で目下東京に開業して居らるゝ人の自由によると、青年期頃から神經衰弱に罹り、長時間本を読むことが出来なかつた。獨逸に留學した後某大醫の診斷を受けた所が、それは近視が原因で、それに應ずる眼鏡を用ゐた所が神經衰弱が治つたといふ誠に嘘のやうな話がある。醫

者ですら、自分の缺點に氣づかないで居ることが往々ある。況して素人の者は、尙更注意を要すべきことである。この他、色盲、色盲、蕪視などもある。強度の色盲は分かるが、軽度の者は年長の子供ほど發見し難い。例へば赤の色盲でも、圖畫を描けると、花の所には、赤鉛筆を用ゐる。即ちそれは感官から區別せずして、先生から教へられた通り、記憶で區別するのである。色盲者は合衆國の男學童では四％位であり、女兒は一％位男兒よりも尠ないといふことである。色盲の最も多いのは、赤と綠色とで、それが兩眼にあることもあり、一方の眼だけの色盲もあるのである。色盲は先天的の者であるから、それ等は光度の差異によりて、色を識別せしむるより外なく、又彼等の職業を選擇せしむるに當りて、特に注意すべきは勿論のことである。

耳の缺陷も往々看過され易い。低能兒と目されて居た子供が、耳が遠いので、教師の説明が分らないのに基因し、教師の近くに席を移した所が、成績がよくなつた例がある。學童中二〇％位は耳に故障があるといふことである。耳の遠い者は發音も不完全で、時々嘔と間違へられることがあり、或は扁桃腺やアデノイドの手術をして耳が聞えるやうになつた例もある。しかし不治の

嚙かに至りては、又特殊とくしゆの教育を施すべきは言ふまでもなく、一人も國家こくかとして不經濟ふけいぎの人間を作らないやうに努むべきである。

### (五) 智覺を陶冶する方法

凡ての心的材料を供給する感官の修練は、あらゆる機會を捕へて、子供の感官を使用せしむるやうに仕向しむけなければならぬ。それには先づ第一に注意を目的觀念もくてきかんねんに向けるやうにし、次にそれを明瞭めいれうに且つ精確せいかくに觀察するやうにし、かくして得た材料を記憶中に確乎と把住はじゆせしめ、それ等を分類又は分析するやうに助けてやらなければならぬ。従來の教育家が感官の陶冶たうやとか、直觀教授とかを強調して居るけれど、只目や耳の修練に限ることが多く、觸覺や筋肉運動に訴へることが少い。處が、幼兒ようじになればなる程、後者の働が旺盛わうせいである。伊太利のモンテツソリーがこの點に着眼ちやくがんして、感官知覺とか辨別べんべつとかの陶冶を主張する中に、特に眼の判斷を補ふやうな觸覺や運動しよくかくを採用したのは、誠に卓見たくけんといふべきである。

而して感官を修練するに用ふる材料は、學校であれ、市街しがいであれ、家庭であれ、世界せかいに於ける

凡ての活事物に接觸せしむべきである。古來幾多の教育學者が自然に接せしめよと絶叫して居るが、それは田舎に於ける有りのまゝの自然現象計りでなく、都會に於ける商工業の狀態、交通機關、人類の勞働、發見等凡てを觀察直觀せしむべきである。而して兒童をしてこれ等の人生の諸現象に對する明瞭で、正確で、合法的な知覺を發達せしめ、而も出来るだけ多數で、豊富な觀念を與へるやうに指導するのが教師の義務である。



## 第七章 智能

### (一) 智能検査法

吾人々間は先天的に智的動物である。人間が動物の中で、最も智能が秀で居る事實は、人間の先天的組織に由るもので、恰も下等動物の中にも、或る種族は他の種族よりも、其の先天的組織によりて、智能が優れて居ると同一である。鼠は蛙よりも智能が優れ、犬は鼠より、猿は犬より、人は猿より智能が優れて居るのは、彼等の先天的組織が相違して居る爲めである。

しかし同一種族に屬するものでも、各個體によりて、智能に相違があることは、其の力量・身長・活力等に相違があると同一である。或る犬は他の犬よりも、智能が秀で居ることは、人間に於ても同様である。然らば同一種族に屬する各個體間に智能の相違するのは、遺傳によるのであるか、或は境遇によるのであるか、これに對する疑問は心理學者が、智能を測定する方法を述べた後に答へることが便利である。蓋しこの測定法の分析よりして、吾人は「智能」といふ術語

の下に如何なることが包含されて居るかを知らざるからである。

一九〇四年に巴里市が、教育當局者が學童中の低能者は、それが不注意・惡戯・道徳性の缺陷或ひは先天的に學習に不適當なることから來て居るかを知らんと欲して、その時代の一流の心理學者ビネーに、その調査を委託した。數年ならずして出來上つたが、後に不完全の所を發見して一九一一年に改訂法を公にした。それが現時行はれて居るビネー式精神検査法である。

この改訂の趣旨は一方に學校で習つた知識を検査することを止め、普通の人生の經驗に於て、年長者なり遊び友達等から、自づと知り得るに至る知識や熟練等を検査しようと努めた。他方にビネーは能智といふ廣い事項を、單一の検査で測定しないで、多數の簡單なる検査法を採用して子供をしてその學んだ所や、なすことの出來ることを示し得る機會を多くした。しかしビネーの検査法は決して新しいものでなく、在來の心理學者が行つて居たものであるが、それ等の幾つかを組合せて、一般智能を検査するに至つたのは、氏が最初である。

この方法は實際これを使用した者から、非常に効果があると賞讃され、主なる文明國に傳はり

て、夫々國情に適應するやうに改訂された。著者も亦この方法を採用し、我國兒童の検査に適合するやう、再度の改訂増補を行つて、所謂大正十一年法を作り上げた。これは二歳兒より十四歳兒まで検査し得るやうに、各歳毎に四種又は六種の問題と一種の補題とがある。(詳細は兒童研究所紀要第五卷、中文館發行を見られたし)今一例として一二の検査法を示すことにする。

二歳兒検査法 (一)家族の名をいふこと(三つ)、(二)自己又は他人の耳・目・鼻・口を指示し得ること(自己及び他人に就て各二種)、(三)繪畫を示して其の名を尋ねる(八個の繪中四個の名を知れば合格)、(四)一種の命令を與へて實行せしむる。

六歳兒検査法 (一)繪畫を示して叙述せしむる(四種の繪の中少くとも三種の繪の叙述を要す)(二)日常事物(お膳・椅子・火鉢・馬・母)をその用途によりて定義せしむる(全部の正答を要す)(三)長三角形のカード二個を用ゐて長方形を作らしむる、(四)菱形を模寫せしむる、(五)三種の命令を同時に與へてこれを實行せしむる、(六)未成の繪を示して、その不足せる部分を指摘せしむる(十種の繪中五種の正答)。

以上の例を見て讀者は、次のやうな疑問を懷かるゝであらう。四問中三問の正答を要するとか十種の中五種の合格を要するとかいふ如くに、その標準が任意になつては居ないかと。これは多數の兒童を検査した結果、歸納的に定めた標準で、その歳の普通兒が合格し得る數を標準としたのである。

## (二) 智能の高下を示す方法

智能の高下を示す方法に二種ある。一は精神年齢で、他は智能指數である。精神年齢といへば、例へば普通兒の八歳六ヶ月の者は八歳六ヶ月の精神年齢を有すといふ意味である。故に、智能が普通兒よりも劣つて居れば、その兒童の生活年齢(生れ落ちてからこの世に生存して居る期間)は如何に多くとも、精神年齢によりて判定する。例へば茲に十二歳の低能兒があつて、普通兒ならば十歳兒の多數が合格する問題、即ち十歳兒検査法に漸く合格して、それ以上の検査法に合格しないとすれば、その子供の精神年齢は十歳で、普通兒より二歳だけ精神年齢が後れて居ると判定する。これと反對に生活年齢十歳兒で十二歳兒検査法に合格すれば、その子供は二歳だけ精神

年齢が進んで居て、優良兒であると判定を下すのである。かやうに兒童の精神年齢が生活年齢と同一であれば、普通兒であり、これに反して、生活年齢よりも精神年齢が多い場合には優良兒であり、又、生活年齢よりも精神年齢が少ない場合には劣等兒となるのである。而してその優良や劣等の程度は、精神年齢と生活年齢との差によりて示される。

第二の方法たる智能指數といふのは、生活年齢で精神年齢を除したる商をいふのである。而して其の商が小數を取らないやうに通常百を乗ずる。従つて生活年齢が精神年齢と同一であれば百になる。百が普通兒である。優良兒は精神年齢が生活年齢に超過するから、指數は百以上になり劣等兒はこれに反して百以下になる。今、著者が得た結果から兒童を分類すると、次の如くである。

智能指數七五以下

低能兒童

同 七六——九〇

劣等兒童

同 九一——一二〇

普通兒童

### 三 作業検査法

ビネーの検査法は主として言語を用ふるものであるから、聾啞兒童や、言語障礙の子供、又は外國生れの子供に適用することは困難である。又、或る子供はビネー検査法にあるやうな抽象的觀念を取扱ふには不得手であるが、具體的事物を取扱ふに長所を有するものがある。凡てかやうな場合には出来るだけ言語を用ゐず、具體的事物を用ゐて検査する所謂作業検査法が必要になつてくる。

この検査法の一好例は木型盤である。種々の單純なる形の木片を盤に於けるそれに相當する型の所に挿入する。而して挿入に要する時間と誤謬(異つた型の所に嵌込む場合)との回数とを計算する。これは大人に取りては、餘りに簡單過ぎるが、幼兒には可なり困難である。殊に精神缺陷の者ほど多くの困難を感じる。型に相當する木片を發見するといふ主要の事項を知らない。

他の例は、繪畫完成法である。繪畫を幾つかに分割して子供に與へ、それを意味ある統一し

た元の繪に組立てしむるのである。中には必要なる部分以外の片まで加へて、その中から適當のものを選出して、繪畫を完成せしむるやうに、困難になつて居るものもある。即ちこの作業に於ては、その繪の示す内容を十分に理解して居れば居る程、その選擇作業も良好になるのである。或は又「智慧の輪」と通常稱へられるものに、類似したものを使用することもある。又、通常「秘密箱」と言はれるやうなもの、蓋や戸を開かしむる作業もある。或は迷圖を與へて、一方の入口から他方の出口へ出るやうに試ましむる方法もある。

余の選定した前記の検査法には多數の作業検査法を採用して居る。

#### (四) 團體検査法

前に述べた検査法によると、各個人を一人づゝ検査しなければならぬ。従つて多數の時間と非常の努力とを要する。それで一度に多數の人を検査する必要がある場合には、團體的に検査し得る方法がなければならぬ。これは印刷した命令を理解し得るものには、容易に行ひ得る。尤もその検査法を定めるには、多數の人に就てこれを試み、適當の方法を選択したり、又その方法による智

能の標準を定めるといふやうな非常の勞力を要する。外國人・無筆者・幼兒等に團體検査を行ふことは、可なり困難である。しかしこれも命令や言葉や手眞似で傳へて實行したものが多數ある。多數の人に團體検査を試みた最初の企は歐洲大戰の際、米國にて試みられた陸軍検査である。米國心理學會の委員が團體検査法を準備し、且つ標準化して、これを陸軍當局に提出して、兵營に於ける軍人に試みられんことを求めた。處が、この用法を採用することになり、下は兵士として不適當なる低き智能の者から、上は士官として養成し得る程の優良者に至るまで、この方法によりて選擇した。處が、その結果は實に顯著なものであつた。

この結果に鑑みて、當時の委員の中五人は、平時に於ける小學兒童三年より八年までを検査し得る方法を作らんと計企し、それがA式とB式との二種類の検査法として公にされた。所謂國民知能検査法とはそれである。余はこれを我國兒童に適合するやうに改訂を加へて、東京市立の兒童相談部その他で採用して居る。A式には五種の検査法があつて、數學の應用問題や、文章を完成する方法や、論理的に選擇する方法や、語彙の検査や、符號を數字に置換へる方法がある。B



式にも計算力や、常識や、類推作用、又は注意作用を検査する方法がある。(詳細は、中文館發行兒童研究所紀要第六巻を見られたし)これは三年生で、零點を取るものなく、中學五年生でも滿點を取る者が不在位に、可なり上下に検査が出来るやうになつて居る。

### (五) 検査法の二三の結果

智能検査法が最初低能兒の鑑別の爲めに作られた爲めに、この方面に最もよく利用されて居る。學級編制とか、低能兒學級を置く爲めに、これを使用して、何れもその効果を表はして居る。中には學業の成績が悪くとして、教師から低能兒扱されたものが、検査の結果、智能が普通なることが分かり、その低能の原因が、その子供に對し學科が餘りに容易の爲めに興味を失つた事實等も發見された。

家庭の貧富や職業の相違によりて、智能に高下あることも發見され、又、私生兒、孤兒等は一般に智能が低いとされて居る。不良少年を調査すると、低能がその主原因となつたものが多々ある。米國カリフォルニア州での調査によると、不良兒の三七%は低能兒で、三一%は劣等兒で、

その残りの三二%が普通兒であつたといふことである。

團體検査法は一方に中等學校や専門學校の入學試験に適用されて、それら、効果を表はして居る。予の國民知能検査法によると、次のやうな標準點を得て居る。

	三學年	四學年	五學年	六學年
A 式	男	三九	六五	八四
	女	三五	六一	七七
B 式	男	四五	六三	八三
	女	四二	六一	七五
				八九

即ちA式の検査をして三九點を得る男兒は尋常三學年相當の智能を有することになる。前例を見ると、女兒の方が男兒よりも劣つて居る。外國の例でも同様の現象が見える。但しピネット式の個人検査では、外國では、男女の差が殆んど無いと言つて居るが、我國の女兒は少しく劣つて居るやうである。尤もこれは男女夫々平均した得點の上からの議論で、個人々々を見ると、女兒の

最高點者が男兒の最高點を抜いて居る學年もある。

この他職業指導に智能検査法を利用して、適材を適所に向けるやうにすることが近來行はれて來た。

(六) 検査法に對する注意

智能検査法 未だ完全な域に達して居ない。知の方面や筋肉作業の方面の検査は可なり精確な點まで検査が出来るが、情意の方向、即ち氣質とか、性向とか、努力の有無とか、道德性の良否とかを、十分に知ることが出来ない。従つて智能検査法で、その兒童の精神状態全部を知り盡したと考へるのは早計である。又、方法が容易のやうに見える爲めに、兒童の精神發達に對する知識に缺けて居る素人が無暗に検査して、誤つた結論を下す恐がある。又、専門家でも一回の診斷で、十分にその子供の將來を洞察することは困難で、これは何回も反覆して、初めて眞に近い結果を得ることに注意しなければならぬ。

しかし一部の學者には、精神検査法の結果を疑ひ、その結果によりて、兒童に一般普通教育を

制限して、特殊教育を施すのは、運命論に墮するのであると、批評するものがある。餘りに早急に、その子に運命づけることは、勿論失當であるが、しかし「無い袖は振れぬ」譬に洩れず、能力のないものを、何時までも鞭撻して普通教育、さては高等教育を受けしめようとする者も、眞に子を思ふ親でもなく、眞の教育者でもない。若し適當の検査法で、その子の能力が分れば、その能力相當に教育して、彼等の内心の満足と繁榮とを計るのが良策である。

### (七) 知能とは何ぞや

前に述べ來つた各種の検査法よりして智能とは、如何なるものかが粗々推定がつく。即ち吾人の精神活動を行ふ上に、必要な能力の總稱であるやうに思へる。或人は智能を以て判断作用と同一視したり、注意作用と考へたり、或は學習能力と定義したりして居る。判断や注意や學習能力が人生の活動に、最も重要な役目をして居るのは、勿論であるが、これだけの検査をして、智能の高下の判定は出来ない。機械記憶の検査も、感官知覺の検査も必要である。これによると智能検査法は吾人人生に於けるあらゆる活動をなさしむる諸能力の検査といふことになる。それで

近時は一層廣汎なる術語を用ゐるやうになり、精神検査法といふものが増加して來た。

然らば此の智能は先天的か、後天的かといふ問題が未だ殘されて居る。智能は通常先天的能力と考へられて居る。それは(一)この種の検査法を用ゐて得た智能指數が年齢の増加と共に餘り變化しないといふ點である。多少の動搖はあつても、低能兒が優秀の少年となることなく、又、優秀兒が白痴兒となることも尠い。世上往々幼年時は神童で、二十過ぐれば、並の人になるとか、小學時代の鈍物が後に史上の英傑となる例を擧げるが、それは極めて例外のもので、或は完全なる精神検査法が、それ等に適用されなかつた爲めに、十分に先天的能力が外の人に分らなかつたかも知れない。

(二)次に双子の研究をすると、精神能力が非常によく似て居る。兄弟姉妹の類似がこれに次ぎ、更に父母への類似がこれに次ぐといふやうに、明かに遺傳的傾向のあることが分かる。尤も身體的形質例へば身長・體質・頭髮が、多くは遺傳するが、時として例外がある如くに、精神諸能力の中にも、時として遺傳しない場合もある。父は數學家であるが、子供は數學に對して全く興味

のないといふことはある。しかし精神諸能力を分析して比較して見ると、その間に類似が発見される。

(三)同一境遇に生育した兒童、例へば養育院に出生時より同一年間生育された兒童に、智能検査を施して見ると、一樣の能力を示さないで、各種各様なること、恰もその顔の相違するが如くである。かやうに環境や境遇を殆んど同一にして居るに拘らず、その能力の上に非常の差等があることは、どうしてもこれを先天的の相違に歸しなければならぬ。

かやうに論じてくると、教育や環境は何等の勢力を有しないかといふに、さうでない。玉麿かざれば光なしの譬で、吾人の先天的能力も教育や環境によりて發達して行くもので、これを放任して、よくその光を放つものでない、智能は先天的能力であるからと言つて、父母や教師が子女の教育を、疎かにする如きは謬見も甚しいものである。

## 第八章 記 憶

### (一) 子供の記憶と大人の記憶

普通記憶がいゝとかわるいとかいふ言葉に二つの意味があるやうである。即ち一は何か見聞したことをすぐに再生する場合、即ち直接記憶の良否をいふ時と、(二)一度見聞したことを長い間記憶して居る場合、即ち把任力の良否をいふ場合とがある。世間ではよく子供の記憶は大人よりも良いと言はれて居るが、實驗的に研究してみると、この直接記憶の方は遙に子供の方が劣つて居る。しかしこの能力は年を加ふると共に良くなつて、十二歳頃までその進歩が著しく、十四歳以後は進歩が極めて鈍い。或人は十歳より十二歳乃至十三歳が特に記憶力の良い時期であるといつてゐるが、多くの人は此の説に同意しないやうである。

長時間記憶して居るといふ點は、通俗の考へ通りに、子供の力が大人よりも良い。尤もこの把任力は生後四歳頃までは弱いけれど、それから十二三歳頃まで漸次發達し、それ以後は把任す

る力も、正確の度も、餘まり進歩しない。子供は直接記憶が大人よりも良くない爲めに、忘れる分量も多いが、その代り一旦把住されると、大人よりも遙に長く把住される。今十歳になる子供と三十歳になる大人とに、或事物を暗誦させて、直ぐにどの位記憶して居るかを尋ねると、子供の記憶は到底大人のそれに比較し難い程尠ない。處が、次の日又は次の週といふ風に一定時間を經過するに従つて、子供の忘却する割合が、大人の忘却する率よりも遙かに尠ない。これは實際の経験からでも明かで、子供時代に経験したことは、他の時代に経験したことよりも、永く記憶に残つて居る。病氣したり、老衰したりして記憶が減退するに當りて、その忘却する順序は年取つてから経験したもので、漸次年少の記憶へと沂り、幼時の記憶は最後まで残るものである。近時、フロイドといふ精神分析法を主唱する醫學者があるが、この學派の人々の研究によると、幼時の記憶は一見忘れられたやうでも、潜在意識に残つて居て、機會があると現はれてくると言はれて居る。殊に或感情、例へば驚愕とか、憤怒とかを伴つた記憶は、何時までも残るもので、子供の頃おどかされたり、縁側から落ちたり、友達に笑はれて口惜しかつたりしたことは、仲々忘れ



ない、ストラットンといふ人は、桑港の地震の事や自働車の災厄等に就ての記憶を多數の人から集めたが、何れも烈しい感情を起した事件程、明確微細な記憶を有して居ることを、統計的に示して居る。

教育上、子供の記憶に就て暗示すべきことは、前述のやうに、子供時代の記憶は長く把住されるから、若し記憶を要するやうなことは、幼時これを行ふやうにした方がよい。昔時、格言や詩を暗記させたり、漢書を暗誦するまで素讀を反覆させたのは、その材料の適否は別として、兒童心理をよく解したものと云ふべきである。しかし子供は直接記憶が良くないから、一度暗誦が出来たと思つて放任すると、その大部分を忘れて仕舞ふ。それで少くとも一回位完全に反覆するやうに命じなければならぬ。

## (二) 材料の相違と子供の記憶

記憶せらるゝ材料の相違によりて、或年齢の子供には、よく把住されたり、把住されなかつたりし、又、男兒の方が女兒よりも、良く記憶されたりする。聽官に訴ふる記憶は十四歳まで急

速に發達し、その後は徐々に發達するが、視覺に訴ふる記憶は十五歳乃至十六歳まで發達する。又、十二歳以前は抽象語よりも具體的の言語がよく記憶され、言葉や數の記憶よりも、見た事物の方がよく記憶される。歐米に於ける研究によると、女兒は十一歳より十四歳までの間は男兒よりも、内寄を再生することが多く、只順序正しく再生する點が劣つて居る。此の時代の男兒の記憶の良否の順序は、事物・視的内容の語・聽的内容の語・音・觸覺又は筋覺に關する言葉・數・抽象概念・情緒を示す語であるが、女兒は視的内容の語・事物・音・數・抽象概念・聽的内容の語・觸覺又は筋覺に關する言葉・情緒を示す語といふ順序に記憶する。かやうに記憶の順序が相違するが、しかし男女共通して情緒に關する語例へば喜悅・悲哀・希望・注意の言葉を記憶することは、十四歳以下では困難であると言はれて居る。これは恐らく情緒に關する言葉は、抽象語であるから記憶に困難を來すのであらう。

事物を記憶するに當りて、條件となるものは二つある。第一は印象の深さで、第二は聯合の數である。第一に基づく記憶は孤立的記憶ともいふべく、第二に基づくものは論理的記憶ともいふ

べきである。事物の内容や關係によりて、聯合を多くして記憶する論理的記憶は、大人に見らるる所であるが、孤立的に事物を記憶する機械的の記憶は、子供の得意とする所である。外國語・數學の公式・地名・人名・物理や化學に於ける記號等の記憶は、大人になつてからは非常に困難である。或人が外國語の單語を暗記させる實驗をした處が、十五歳兒は四週間かゝつたのに、十二歳兒は一週間で出來たといふことである。殊に十歳より十二歳頃までは、隱語に興味を有するものであるから、尙更外國語を覺えることが早いのである。しかし論理的記憶も漸次に發達するやう教育しなければならぬ。蓋し論理的記憶は最も能率の多い方法で、且つ子供の思考力の發達に資するからである。

### (三) 學習法と把住との關係

早く覺えたものは、早く忘れると一般に言はれて居るが、實驗的に研究して見ると、直接記憶でも永久記憶でも早く覺える者が、平均して遅く覺えるものよりも、結果がよいといはれて居る。處が、學校では往々餘り早く覺えた者は、實際によく覺えたか知らんと疑はれて、再三再四反復

を命ぜられることがある。これはその事柄に就て嫌悪や無頓着の情を生ずるに至るばかりでなく、學校に於ける凡ての作業をも嫌ふやうになり、果ては作業に對してのらくらする態度を養成するものである。即ち全力を注いで勉強し、全速力で學習しようとするやうに努めなくなる。蓋しそんなに骨折つても、それだけ認められないからである。頭がよくて敏捷な記憶を有する子供は、餘程注意しないと、注意を分つて、半分氣を入れる習慣を作るやうになる。それかと言つて回想し得る域に達する一寸前で記憶作業を止めてはならぬ。回想し得る域を少し通り越す位の處で中止しなすと、今まで骨折つて覺えたことは、全然無効になる場合がある。

又、長くつゞけて學習せしむるよりも、間を置いて學習せしむることが、幼い子供には特に必要である。初學年頃の兒童には、一度に學習せしむるよりも、その時間を二つに割つて、一日に二回學習せしめた方がよい。高學年の子供でも、一週三回三時間學習せしむるよりも、毎日十分宛課した方が効果がある。中等學校の生徒ですら一週一回二時間課するよりも、一週二回に行つた方が經濟的である。蓋し同一作業を永く行ふことは、興味を殺ぎ、疲勞を増し、永く注意を

集注することが出来ず、従つて長時間行つても、その半分は作業しないと同一たるばかりでなく、却て心身を阻害するやうになるのである。而してその阻害する程度が年少であればある程烈しいのである。又短時間に課業を仕切つても、前後の課業が同種類のものならず、仕切つた効能がない。即ち精神作業をやつた後には、手工とか、音楽とか、體操とかを點綴して、心身の轉換を計るべきである。それかと言つて、餘り短時間で、科目を變へてはよくない。折角子供の心の態度が、その科目に向き始めたと思ふ頃、中止されると、新しい科目の爲めに冷されて仕舞ひ、今度再び前の科目に取りかゝるに當りて、再び温め直さなければならぬ。故に、新規な作業は最初は少し長くやり、漸次、その時間を短縮すべきである。例へば月曜日に四十分を費すと、火曜はその三分の二、水曜日は二分の一、金曜日は三分の一位にし、次の月曜日は四分の一、木曜と金曜とは簡単に概括する位にすべきである。

(四) 反覆と集注と再生と

子供に何かを銘記せしめようとするには、幾度もこれを反覆せしむることが、普通の仕方であ

る。子供は機械的に幾度も反覆する。しかし二三回反覆すると、後は彼等の注意は何處か外の方に向つて居る。此の際注意を集注するやうに命じても無効である。最初からその作業に對する動機を喚起するやうにしなければならぬ。それは教師の方で、場合場合に應じて適當に工夫すべきである。反覆の回数を制限して、その間に覺えて仕舞ふやうに命ずることも、彼等の集注を衝起する。或は競争心に訴へても効果がある。

何れにしても、反覆のみを強ゆるのは最も拙劣な記憶法である。學校作業の多くは材料の意味を得ることで、機械的の記憶でない。而して反覆と集注とは單に系列的連絡を強調するから、意味の單位にそれを分割する機會がなく、縦横に聯合が出来上つてゐない。それで何か必要に應じてこれを再生しようとしても、仲々間に合はなくなる。例へば歴史を暗記するに當りて、前記の方法を取ると、眼の感覺神經と、その文章によりて生じた或聯合神經との連絡が出来て居るだけである。従つて教室で刺戟が耳から來ると、即ち教師が質問を發すると、その部分だけが系列的聯合から切り放されることが困難で、彼の答は躊躇し、或は知つては居るが、答へることが出來

ないといふ有様になる。

故に、如何にして記憶し學習するかの方法を子供に教へて、人生に於ける如何なる刺激に對しても、立所に答へ得るやうな聯合を作つて置くやうにしなければならぬ。即ち彼等は集注することを習ふばかりでなく、彼等の勉強中に内部から回想し、その教科に就て自問自答をし、材料を切り放す習慣を作らなければならぬ。子供に或る間に對する答を考へさせたり、問題を作らせて見たり、最も必要な文章・事實・語を見出させたりすることは、其の一方法である。

### (五) 全體法と部分法と折衷法

記憶の仕方、例へば一文章を暗誦するに當りて、その全部を読み通して暗記する方法と、一部分一部分暗記して行つて、最後まで暗記し終る方法とがある。即ちこの全體法と部分法とは、孰れが子供に適して居るかといふことに就て、二三の學者が實驗的に研究して居る。カルビン氏は、全體法の缺點を述べていふに、第一に、一定の時間に全體を暗記させるといふことは、その時間の終りて於て、記憶して居ることが尠ないのに失望せしむる恐がある。第二に、材料の中に

記憶し易い所と困難な所があるのに、それ等の區別なく反覆しなければならぬ缺點がある。第三に、全體の再生を實習するに、年少であれば、ある程困難である。故に、子供の年齢相當に文章を分割すると、第一と第二との缺點が除去されるし、第二の缺點を除去するには、全體法と部分法とを折衷する方がよいと言つて居る。

要するに、子供の年齢と時間の長さとを考へて、適當の長さの材料を選び、最初は材料の一般的性質が分かるまで、徐々に、且つ注意深く全體法を用ひ、それから漸次速度を速める。大體の暗記が出来れば、今度は困難な部分に力を注ぎ、所謂部分法を採用する。かくして弱き聯合の所を強め、然る後又全體法に移り、十分に再生し得るやうにすることが、實驗の結果から見ても効果があるやうである。

材料提出の仕方によりて、子供の記憶作業に相違することが二三の人によりて、研究されて居る。即ち一個の感官に訴ふるよりも、多くの感官に訴へた方が、効果が多いといふのである。その効果の順序からいふと、聴官と視官と發音との併用、聴覺と視覺、聴覺と視覺と手の運動、



視覚か聴覚か（年齢によりて相違する）を用ふるといふ順になつて居る。これによると、書寫は必ずしも記憶に補助を與ふるとは言へない。或人は六年級までは却て妨害になり、その後になつて初めて助けになると言つて居る。これによると、幼兒には聞かせ・見せ・言はせる方が、最も有効で、書取らせることは、無用のやうである。又、律動が學習作用に大に補助を與へると言はれて居る。子供は律動に興味を有し、律動的に反應するのであるから、記憶作業にも、律動を利用することは有効で、今後は今少しくこれを利用すべきである。

### (六) 學校に於ける記憶作業

現時の學校では、記憶作業は古風の仕方とか、非教育的であるとか言つて、餘りその價値を認められない。處が、その結果、中等學校の上級頃になつて、非常な支障を生じて來る。記憶は凡ての學習に必要なことで、構成的想像や思考作用には、缺くべからざるものである。複雑にして創見的なる凡ての精神作業の基礎をなすものは、感官知覺と記憶とである。故に、これ等の孰れかゞ不完全であると累を後に及ぼすやうになる。

記憶作業が今日の如く信用を失ひ、輕んぜらるるに至つた理由は二つある。即ち從來無制限に行はれたのに對する制限と、餘り形式に流れた方法に對する反動とである。推理を要することまでも、單に記憶を命ずることは、子供をして能率ある人生活動をなさしめんとする準備にならぬ。しかしその他の極端なる、少しも記憶を命ぜぬことも正鵠を失つて居る。思想の獨立・信念の創見・行爲の自由を尊重する現代の教育は、往々過去の成果を無視する似而非なる創造を喜び、確證や自律的調整より離れた不定の行爲に満足せしむる弊に陥つて居る。吾人は昔時の所謂鍛鍊といふことを恐るゝと共に、單に子供を喜ばせることを以て能事終れりとするにも、反對するものである。苟も子供の獨立的作業に何等かの進歩を來たすものは、これを採用すべきである。而して記憶作業の如きは、實にその一に加ふべきものである。只こゝに注意すべきは、記憶の種類とそれに用ふる材料と方法を選択して行はないと、所謂昔時の暗誦主義の弊を繰返すやうになるものである。

而してこの三者は凡て實驗的兒童心理學の立場から決定すべきである。即ち論理的と然らざる

記憶、意味や關係の記憶と機械的記憶は、夫々その價值に應じて採用すべく、記憶に用ふる材料は、陶冶の轉移を生ずるやうなもの、子供の現在の必要や教育の最後の目的に適合するやうなものを選び、記憶の方法は、記憶と思考との關係、各年齢に於ける子供の本能と興味とに適合するやうにしなければならぬ。殊に、子供は各種の記憶の改良を望むやうに促すべきで、その改善の度を示すべき標準を示して奨励するも、一良法である。要するに子供は記憶の鍛錬を必要とするばかりでなく、各種の記憶、最も有効なる記憶の習練を必要とするものである。

(七) 記憶に及ぼすその他の影響

子供の記憶に於ける一般的特質は、兒童の供述に關する研究の結果から、最も具體的に示される。これは子供に或る話を聞かせ、又は繪を示し、或は出來事を見せて後、直に又は一定の間、例へば一日とか一週間とか経過した後、先に見聞したことを言はせる研究であるが、その結果によると、存外子供の報告が當てにならぬことが發見された。これは記憶の不完全であるばかりでなく、已に述べた注意や知覺の不正確や、想像作用の不適當や、見聞したことを言語にて發

表する能力の不十分等に基因する。

ホキツプルの研究の結果によると、子供の供述は大人のそれに比し、非常に劣つて居る。その範圍は小さく、不正確が大である。これは間違ないといふ、確認が強いから、彼等の保證や確認に對する信頼の度が低くなる。七歳から十八歳までの間に知つて居る範圍の増加は五〇%といふ位に大きいが、正確度は二〇%位増加するものである。報告の能力は連續的に發達しない。青春期に於て著しき變化を被る。供述の上に最も重大なる影響の一は、子供が暗示に感じ易いこととで、これは青春期に入る前が殊に甚しいと。

記憶が明確でない子供に向つて、「かうだつたらう」とか、「そんなことがあつたに相違ない」とかの強い暗示的訊問をすると、子供はつい「そんなことがありました」と答へる。シユテルンの如き、訊問の仕方を五種に分ちて、子供の暗示性を検査して居るが、暗示の強い訊問の仕方ほど子供の答の正確度が減じて居る。かやうな研究の結果から、法廷に於ては子供の證言によほど注意を要する。又、よく學校の出來事を父兄が子供から聞いて、校長や教員に怒鳴り込むことが

ある。これも餘程その真相を確めた上でないと飛んだ誤謬を生ずる。又學校の方で、家庭の狀況調査をする際に子供の言葉を参考とする如きも大に警戒しなければならぬ。

## 第九章 想 像

### (一) 子供は視的心像が多い

子供と大人との想像作用に於ける相違は、大別して、三種の方面から見られる。第一は心像の種類、第二は心像の明瞭度、第三は心像の數に於ける相違である。

先づ心像の種類の相違から述べると、子供時代には他の時代に比し、視的心像の割合が遙かに多い。以前は吾々の認識作用や記憶作用や想像作用などに於て、幾つかの型式があると考へた。

例へば或者は視的事物が聽的事物より遙かに記憶し易いとか、想像し易いとかで、其の人を視覺型に屬する人と名づけ、同様に聽覺型の人、筋覺型の人といふやうに分類した。處が、現時の實驗的研究の結果によると、提出する材料によつて異つてくる。例へば同一人でも櫻の花といへばこれを視覺化し、香水といへば嗅覺化し、音譜をいへばこれを聽覺化するといふ有様で、如何なる刺激に對しても、常に視覺化する視覺型の人、或は常に聽覺化する聽覺型の人といふものは、

極めて少ない。大多數の人は混合型に属することが明白になつた。これは子供にも同様で、大多數の子供は混合型で、只大人に比し視覚化する割合が多いといふだけである。

又、材料を受取る際の吾人の態度でも異つてくる。例へば舞踊を稽古する時は、筋肉運動によりて學習し、視覚や聽覺の方は二次的になる。音楽を暗記しようとする時は、聽覺心像を用ふるやうにする。處が、以前は教師に向つて、生徒の心像の型を分類し、その型に應じて教授すべしと言つて居た。即ち視覺型の子供には視的事物を用ゐ、聽覺型の子供には、聽的事物を用ゐよと言つた。しかしそれは前記の理由から、根據が誤つて居ることが分かる。要するに、學習者の方面を考へて、各種の心像を喚び起して、善く記憶し、反應が精密であるやうにすべきである。時としては、子供の誤る傾向からして、如何なる方面の心像の缺けて居るかを知ることが出来る。例へば瓜を瓜と誤るのは、視覺心像の缺陷に基き、ガクカウをガクゴと書くのは、聽覺心像の不充分に基づくものであるから、教師はその方面の注意を要することが分かる。

## (二) 具體的心像が多い

子供と大人との他の相違は、前者が具體的事物の心像に富み、後者は言語心像に富むといふ點である。子供が犬とか馬とかを考へる時には、犬や馬の具體的の像に就て考へ、君が代とか金太郎の歌を考へる時には、その調律か調子が心に浮んで來る。これに反して、大人がこれ等のものに就て考ふる時には、言葉として表はれて來る傾向がある。而して實際の事物そのもの、心像は生じて來ない。これは吾人の精神的經濟から起つたもので、言語心像は具體心像に比して、時間とエナジーの經濟であり、又、確實なる點、把住される點に於ても經濟的である。勿論、この言語心像は抽象的事項を取扱ふ時に利益があり、又は藝術や文學その他種々の構成作業に最も有效である。

これを以て、教師の仕事の結果の尠ない事物人像に代ふるに、漸次有益なる言語心像を子供に生ぜしむるやうに仕向けることである。しかし事物心像は根本として、必要のものであるから、これを與へないで、即ち何等の内容のない言語心像を子供に生ずるやうにしてはならない。蓋し事物心像は基礎として必要なる計りでなく、言語心像は不確實の事物心像から内容を傳えないで、



必ずや直接の認識的經驗から得るやうにすべきであるからである。而してそれには、感官的經驗を擴大し、それと直接に聯合する言葉を多くし、言語を以て考へることを、漸次に訓練して行かなければならぬ。子供の思考能力は言語心像を用ふる力によりて規定されるもので、その力は徐々と發達して行くものである。かやうに年齢が補助をするけれども、一方に陶冶も必要で、言語心像に意味を與へ、思考用の語彙を増加し、その操縦に統制を與ふることを、習練すべきである。一時は實驗心理學者の間に、心像のない思考があると言はれて、烈しい議論を生じたが、それは思考作用が極めて迅速に行はれて、殆んど心像を伴はないやうに見えるからである。これを見ると、後には言語心像のみならず、其の他の心像も極度に尠くすることが思考上經濟であるといふことが分かる。従つて子供は漸次言語心像を伴はない、思考をするやうに訓練すべきで、例へば本を讀ませても、所々を一寸見ただけで全體の意味が通ずるやうにすれば、時間に於ても、勢力消費に於ても、經濟的である。或教師は算術の問題を解くに當りて、その運算をする前に其の答を豫想させて見る者がある。この方法が果して子供に適するか否かは別として、この方法は確か

に前記の經濟的方法に準據して居るといふべきである。但し子供に豫想を獎勵すると、往々いゝ可減に當てることのみを腐心して、眞面目に思考を進めて行くことを嫌ふやうになる。その點は教師の特に注意を要する所である。

### (三) 想像の年齢に伴ふ變化

子供の心像は再生的で、大人の心像は創作的であると、區別するものがあるが、それは確固たる結論とは云へない。勿論、再生的心像は根本的で、早期のもので、三歳以下の子供が、創作的心像を有するとは考へられない。又、幼稚園や小學校の初年級頃の子供の遊戯でも、大部分は再生的模倣的である。しかし三歳頃から七八歳の子供に創作的想像のあることは明かである。即ちお伽噺にあるやうな要素を有して、可能性に就ては少しも顧みる所がない。全く架空的で、その空想の奔逸する具合は、大人の夜の夢と似て居る。少しく年を取つて、十歳乃至十三歳頃になると、事實に近よつて來て、彼等の創作的想像は架空的性質を失つて、漸次可能性の法則によつて束縛されてくる。此の時代の子供の想像は、漸次實際的となり、結果の價値といふものを考に入れ

るやうになる。従つて一層有目的のものになり、主觀的よりも寧ろ客觀的となり、空想的よりも寧ろ現實的になつてくる。

青春期になると、新しい要素が其の時期の情的生活の強度に加はつてくる。而して想像は再び初期の形を取つて来る。尤もそれは内容が異つて、お伽噺的のものであり、青年男女の行爲・大望・計企・成功等に關するものである。而して非常に主觀的で、これ等の青年男女は常にその空想中の中心人物となつて居る。空想の要素や想像その者を喜ぶ點は中間期よりも寧ろ、初期のそれに似て居る。但し、青年期の空想は初期のやうな不思議のものよりも、寧ろ人間や人類の關係が主となつて居る爲めに理想的想像ともいふべきである。青年期が経過すると、振子は又元に戻つて、空想的情緒的想像よりして、實際的の方面に歸つてくる。

#### (四) 創作的想像の教育

創作的想像の價值が如何に大なるかは、茲に詳述する必要はない。飛行機や潛航艇の發明・藝術的作品・哲學上の新説・醫學上の新發見等、凡ての進歩發達は、この古いものを新しく改進

する作用に俟たなければならぬ。故に、この貴重なる能力を、吾人は幼少の時より教養する必要がある。處が、現時の教育は動もすれば、再生的想像に餘り力を用ひ過ぎる爲めに、創作的想像作用を弱める傾向がある。この創作的想像の發達を計るには、これを發達せしむる機會と、それを養ふべき材料とを供給しなければならぬ。而して他の作用と等しく、それを刺戟し、指導しなければならぬ。然らざれば、決して満足なる收獲を得ることは出来ない。

四歳より八歳頃までは、創作的想像を働かす材料として、物語やお伽噺や神話などを提供する。これ等の物はその時代の子供の要求を満たすもので、必らず與へなければならぬ。物理的法則とか、世界の現象に就て知識の缺けて居ることや、擬人視する傾向の爲めに、神話やお伽噺は凡て喜ばれ、且つ發達上必要である。しかし餘り空想に耽るやうになるならば、その時期相應の感官知覺や觀察を陶冶することによつて、矯正すべきである。七歳乃至八歳頃になると、彼等の想像から作り上げた噺をするやうになる。これは大に獎勵すべきである。蓋し、空想界に於て創作的思考力を發達する機會を得るばかりでなく、言語や文章の使用法を練習する機會を與ふるから

である。

その後の數年間は、學校に於て、事實に力を注ぎ、子供の方でも、記憶力が最高に達し、暗示性が以前よりも減じて來るので、空想的要素は實際化して來る。此の時期は手工や地理科と聯絡を取つて、構成的想像を鼓舞する時であり、尙又、簡單なる幾何學・藝術的構造・物理等を教ふる機會である。子供は計畫を立て、その計畫を實際に行つて見ることを喜び、且又、漸次忍耐と力を生じて、可なり立派な結果を得るやうになる。故に、それは出来るだけ獎勵すべきである

### (五) 青年期に於ける危機

青年期に於ける想像作用は最危機に臨むもので、従つてその取扱方も困難である。青年期の想像は他の時機よりも一層心を奪ふもので、思想と勢力とを消費する。而して彼等の生活せる現實的環境よりも、尙一層活々して居る。故に、此の際は戸外の興味や身體的練習や友達等によりて、病的に向はないやうにし、或は此の時期の身體的發達を意識の表面に保持すべきこと、此の時期の想像は理想の動機となり、美術・文學・音樂等の美を領解する基礎となることを、十分に

教へ込むやうにしなければならぬ。しかし性の本能が一方に烈しく起つてくるので、往々にして健全なる方向を取ることが困難になつてくる。此の時想像作用が禁止された方面に働き出し、欲望を生じ、遂にはそれを實際に行ふやうになる。故に、此の際最も大切なことは、想像を培ふ材料として健全で適當なものを選ぶことである。青年期に讀む本は想像を指導するに、偉大な力を有するもので、この際、無味乾燥な科學的材料を與へることは、無効であり、不要である。青年期の人々にはロマンズや愛の物語、探險談や改造物語、或は詩を讀ましむべきで、但しそれ等は健全で、善良なものでなければならぬ。茲に善良と云つても、兩親や教師の必要の立場からではなく、青年の必要の立場から見て善良でなければならぬ。

此の時期の危険は二重生活をして居る點である。即ち教師や兩親の熟知せる外面に表はれた生活と、それと全く異つた内面の生活とである。これは必ずしも悪ではないが、利己的で、情緒的で、且つ想像的で、青年期の感傷的性質によつて、尙烈しくなり、若しそれが外部に表はれたら、嘲笑を買ひはしないかと恐れて、益々これを秘密にするものである。故に、若し賢き教師が

ありて、能くこれを領解し、これに同情を興ふる時は、この不定で、強烈なる情緒的想像的生活が健全なる發達を遂げるやうになるものである。信頼する人の同情と理解程、此の時期の青年を指導し得る力を有するものはない。

### (六) 大人と子供の想像の第二の相違點

心像の種類が大人と子供との間に相違することは、已に述べた所であるが、その心像の明瞭度も、亦互に相違して居る。子供の心像が極めて明瞭鮮活に働き、時としては記憶心像と想像心像とを區別することが出来なくなり、或は知覺と心像とを混同する。これは子供の聯合の種類と數とが尠ない爲めに、一を他と混同するものである。子供は想像によりて生じたことゝ、實際に起つたことゝを區別する標準に缺けて居る計りでなく、錯覺や暗示に陥り易く、又妄信し易い爲めに空想をも、實在的に考ふるのである。

従つて、子供は誤つたことを言ふことが往々ある。これを虚言として取扱ふことは、兒童の心理を解せざるもので、彼等は何等の惡意がなく、自己の惱像上作り上げたことを、後には實際の

經驗のやうに信じて話すのである。勿論、中には觀察の誤りから來た虚偽の報告もあり、又質問者の暗示の爲めに、誤つた答をすることもある。七歳の女兒が園をしてある牧場を通つて居た時に、溫和な風をした一匹の牝牛が頭をもたげて子供を見た。不意であつたので、多少吃驚した。處が、後に其の子供は澤山の牝牛が垣根の所へやつて來たと話し、その後には、怒號して居たと述べ、その後には、石を投げた處が、牡牛と牝牛とが、彼を逐ひかけて來たと話し、遂には牧場で牡牛に逐ひかけられ、垣根を越えて逃れる時分には五十頭位になり、石を投げてこれを撃退したと報告したといふ例がノースワシーの本に出て居る。故に、此の種の子供には、事實と想像、知覺と心像との區別をするやうに、教育して行かねばならぬ。

想像上の所産として、子供時代に表はるゝ一の面白い現象は、想像上の友達である。これは實際の友達が少ない子供や、幼稚園・學校等に行く前に家庭で、一人で遊ぶ子供に多いと言はれて居る。而して想像の友達には、善良で常に其の子供に親切を盡す者もあれば、悪戯で亂暴で、其の子供の遊びを邪魔する者もある。大抵は遅くて青年期に入る前位で無くなつて仕舞ふ。故に、



想像的友達は餘り弊害はないが、時にはその爲めに内心の煩悶を生ずる例が無いでもないから、その場合は現實の友達を選んで遊ぶやうに仕向けなければならぬ。この他、暗がりや夜などに、物を恐れることも想像力の烈しい子供時代に見る所で、これ等は多く物語とか嚇かされたりしたことが、彼等に深き印象を與へ、實在したものゝやうに考へるのである。故に、父母は恐怖を惹起しさうな話や觀せ物を子供に見せないやうに注意すべきは、勿論である。

### (七) 心像の分量に於ける相違

子供と大人との想像に於ける第三の相違は、心像の分量に關するそれである。子供の有する心像は、成人に比し、具體的であることは已に述べた所であるが、又、その有する心像の量が大人に比して多いと云はれて居る。心的状態の高尙なる型式や、思考に大切なる意味等は、心像よりも後に、發達する。大人の思考は關係の感・意味・判斷等によりて充されて居るが、幼兒の思考は殆んど心像で充されて居る。具體的心像の豊富なることは思考作用に不利益であるから、漸次の階級を脱するやうに仕向けることは、教育者の任務である。

# 第十章 思 考

## (一) 思考作用の發達

思考作用は必ずしも、成人の特質と限つたものでなく、觀念が自由に表はれるやうになるや否や、思考作用も生じてくる。思考作用とは事實や人生の出來事によりて暗示された結論を追求し検査する作用であると、デューキー教授は定義して居るが、かやうな行爲は幼兒に於ても表はれるものである。人を前から見る時と後から見る時とは、非常に異なるけれど、尙同一人を意味することに、氣が付いたり、又物に顔を隠して、パーと云つて顔を出すと喜んだり、衣物を幾度も取換へると不思議さうにして、其の人の顔を見たりするやうな、幾多の日常の經驗は、一年以下の子供に向つては、關係の感といふ意味で、思考に刺戟を與へるものである。言語の習得と同時に、意味の感が明かになり、簡單なる判斷が言表はされる。三歳以下の子供で、仲々立派な推理作用をする例が數多ある。其の後遊戯や想像の生活、事物や人民に對する興味、種々の品物を作り、

又は集める傾向、社會的本能の其の働等が思考作用を刺戟し、且つ必要なものである。子供と大人とに於ける思考作用の相違は、一方に存して、他方に存しないと云ふやうなものでなく、只程度の差で、兩者とも思考する力を有する者である。蓋し思考能力は生來的性質の一で、凡ての人類にその根源は存在するからである。

## (二) 思考する量が少ない

一日の中で、子供が思考する分量は、大人の思考する分量に比して少ないとか、子供は大人程思考する度数が多くないとは、従來言はれて居るが、それは一般的にいふと眞である。しかし大人の中にも、毎日慣習や傳統によりて、仕事をして居るやうな者や、臺所で働いて居る婦人や、事務所できまりきつた仕事をする者や、少しの思考作用を要求せずして結論を観察するやうに、餘儀なくされた大學の學生を見ると、殆んど思考力を働かして居ない。六歳乃至七歳の穎才兒は普通の大人が思考力を働かすよりも、數倍の分量の思考を働かすといふことも、疑を容るゝことの出來ないやうである。即ち同一年齡の小兒の間に、相違があると同じ位に、大人と小兒との間の

差異はあるといふことが出来る。

しかし前述の通りに、一般に平均して言ふと子供は大人程多く思考しないと云ふことが出来る。それには三つの理由がある。

第一は幼児に必要な適應作用の性質が、主として機械的であるといふ點である。幼児は身體の各部を統制し、談話し、普通の道具を使用することを學ばなければならぬ。而して彼等の神精生活は大部分感官世界に限られ、行爲は本能によりて。支配されて居る。想像の世界でも、自發的無統制的想像が幅を利かしてゐる。子供は思考する以前に多量の自由觀念・知覺・心像・行爲の反應を所有しなければならぬ。蓋し思考作用はこれ等の反應を統制し、検査することから、成り立つて居るからである。それは勿論、子供時代の早期には思考作用が存しないといふ意味でない。既に述べた通りに、三歳の子供でも思考することが出来、思考するものであるが、只子供時代の勢力と時間とは、主として思考に必要な心的材料を獲得するに、提供されなければならぬ。子供は問題が提出されて、思考を必要とする前に、一定量の經驗を有し、一定度の適應に達して

居なければならぬ。嬰兒時代からして、思考作用は身體的力と精神的力の發達と結合して表れ、個人が成熟するに従つて、無反省的意識は減少し行き、思考の準備が多くなつてくる。かうに子供は高等の思考作用に對する材料を得る爲めに、機械的過程に時間を費す必要があることが、一原因となつて、子供は一般に大人よりも、少く思考することである。

子供が大人よりも少く思考するといふ第二の理由は、思考するといふ傾向が、環境によつて刺戟されない點で、往々却つて禁止されることがある。これは教育上、極めて重大な點である。

質問が子供の世界から起ることを許されない。若し許されたにしろ、其の解決は困難であらうといふ大人の老婆心から直ちに解答を與へてやる。玩具が失くなつたり、こわれたりすると、大人の氣分や能力に従つて、そのままに捨て置くか或は修繕を加へられる。而して時々起る問題を子供自身に解決することを許し、又は補助することは、極めて少ない。子供は何をなすべきか、又如何になすべきかを教へられる。餘り保護し過ぎて、模倣と遵奉とを強ひ、爲めに思考の自然的自發的傾向は全く役に立たなくなつてしまふ。早い時代から、子供に思考する力と傾向とが存在

するといふことは、彼等を大人の手から離して獨りで遊ばせて見ると分かる。他の子供の刺戟により、或は自己の想像により、種々の問題を發見し、且つそれを相當に解決して行くことは、實に、大人の想像するよりも遙かに多い。かやうに幼児になればなる程、大人は彼等に彼等自身で考案する機會を與へてやらないので、子供は大人に比し少く考ふるといふことが出来る。

子供に思考作用の尠ない第三の理由は、その傾向を示す爲めに、却つて不愉快を伴つてくることである。これは一寸不合理のやうであるが、實際、この場合が多い。四歳位の子供の健全で正當な幾百の質問は、大人の方で、返答が出来ないか、又は面倒な爲めに、一喝の下に閉塞させてその後の質問を止めさせて仕舞ふ。否質問を發すること計りでなく、問題を考へることすらも止めるやうにする。尤も中には、答を豫期もせず、要求もせず、只大人の注意を惹く爲めに、質問を發する場合もあるが、それは極めて稀である。子供の質問に答へることは、極めて難事であるが、それよりも子供を刺戟するやうな答をするのは、尙一層困難である。しかしさうしないと、將來思考に富んだ男子や婦人に發達せしむるに、最も必要な事項の一を禁止することになるもの

である。子供は妙なことを考へたり、變な質問をすると「どうしてそんな馬鹿なことをいふの、變な兒だね」などと、言つて笑話にすることがある。大人のかやうな態度は、感じの強い子供には、非常に危険で、失望と自棄を生じ、少し六かしいことになる。「僕知らない」と、何等の思考をも試みないで答へるやうになつて仕舞ふか、或は何でも他人の解答に依頼するやうな者になつて仕舞ふ。

子供が少しく成長すると、事物に就て實驗を試みるやうになる。その實驗の仕方が間違つたり、又、その結果が子供自身にすら豫期しないものになつたりする。その爲めに「馬鹿だ」とか「いたづら兒」だと、罵倒される。寒い日に水を外に撒いて、水の凍るのを見たり、時計を解體して見たり、時としては鶏の解剖をするといつて、殺して見たりするやうな子供がある。考のない大人はこれを悪意のあるいたづらとして罰することが多い。又學校でも、妙な質問をしたり、變つた方法を取つたりする子供は、教師から賞讃されず、月並の仕方をし、教師の言ふなりに忠實に行ふ子供は、善良な子供として賞讃される。かやうな教育を施した後、創作力がない國民が多い

と慥くのは、不合理も甚しく、模倣の上手な受働的な國民になるのは、理の當然である。

### (三) 思考が不確實

子供の思考は、大人に比して誤りが多く、不正の結論に到達し易い。その理由としては、多くある。先づ第一に事實の供給が適當でないことである。子供は経験に乏しく、大人程多くの知識を有しない。故に、思考する際に、その過程は、假令完全であつても、結論に於て誤ることがある。母親の頭髮をかき亂して、小言をいはれた子供が「少しもお人形に傷をつけない」と言つたやうな例は、人間と人形との區別を知らないからである。事實と経験とが無ければ、思考は不可能で、材料の分量が多くなればなるに従つて、思考の可能性は大になつてくる。

第二の原因は、子供の有する材料が不精密の傾向がある點である。既に知覺の章下で述べた通りに、子供の觀察は不注意の所があり、不精密の所がある。故に、子供が推理を始むる前提に於て、既に誤謬の點があるからして、それより出た斷定に正鵠を失することは勿論である。又、彼等の有する経験や知識の形式が不正確な結論に導くのである。即ち子供は最初發達するのは、主



として情的状態・粗朴なる感覺・知覺・再生的事物心像・僅かの客觀的關係の感等で、思考作用を完全に行はしむるには不充分である。思考には、無數の感官的經驗の代表たる概念・原因・結果・共在・從屬等の論理的關係の感、現在の結果や將來の結果を、豫見する權成的言語的心像・信賴し難い心像に代ふるに、一層恒久的なる明確なる判斷作用等が、正確なる思考と結論とを得るに必要であるが、子供にはこれ等の諸作用が未發達、不完全である。従つて思考も不正確を免れない。

第三に、子供の注意作用の性質上、正確なる思考をなすに、困難ならしむるのである。思考には、先づ問題を明かに心の中に保持し、その問題に一致する材料を取り入れ、否らざるものを拒むことが必要である。而してこの選擇作用には集中持續の注意を要求する。處が、前章に述べた通りに、子供の注意は集中する力に缺け、容易に分散する傾向があるし、その傾向は、知覺的事物の場合よりも、觀念に對する場合に於て、極めて著しい。子供は問題を解決するに、必要な材料を有し、且つ必要な形式を有して居ても、問題を解決するだけ、十分明白に且つ長く、問題に

注意を向けることが出来ない爲めに、不正の結論に達することがある。

第四の原因としては、子供の精神生活には、系統化といふことが缺けて居る點である。大人に於ては、或る觀念が提出されると、それを論理的關係によりて、連結し、系統を作らうとする傾向がある。處が、子供はそんなことをしない。この系統化といふことは、經驗と陶冶された思考作用の結果として生ずるものであるが、此の必要條件が子供に缺けて居る。子供の精神生活は混沌たる状態にありて、只表面的類似や言語上の類似位で、觀念が連合されることがある。例へば横濱港はどうして良い港ですかと尋ねると、澤山船が入つてくるからと言ふものもあり、外國人が多く住んで居るから等と、極一部分を捉へて答へ、横濱の良港たる條件や必要事項を、組織的に述べない。

第五の理由は子供の聯合作用が、下等動物のそれと相似て、全體的聯合をなして、分析的に細かくなつて居ない點である。教師が鉛筆を眞直に立て、「垂直」といふことを教へたので、父親が鉛筆をその位置に持つ時にのみ、垂直といふことを解する子供の例をゼームス教授は述べて居

る。故に、子供は尋ねやうによりて、例へば全體の状態に就て答へ得るやうな問を發すると、立派な答をするが、少し分析を要するやうな答を要求すると、答へることが出来ない。子供の精神活動は意味よりも其の意味の所有者、要素よりも其の要素を含む状態、關係よりも其の關係を有する事物の方へ、反應するものである。而してこれ等が凡て思考作用をして不精密ならしむることは言ふまでもない。

第六の理由は、子供に批評的態度の缺けて居るといふ點である。この批評の缺如は二様に働く。即ち子供は小さい不必要な要素を極めて大切な要素と考へ、又、その結果を吟味して見ることとをしない。子供の經驗が不充分である爲めに、提出された多數の材料中、何れが主要なる條件であるかを知らない爲めと、又その材料に對して批評的態度を取らない爲めに、不必要な材料を重大のものとして取扱ふやうになる。又その結果をも批評し、吟味することをしない爲めに間違つた結論を得て、平氣で居るものである。

かやうに子供の思考を、不正確ならしむる六ツの理由は、多くの場合に相重り合つて働いて居

る。即ち一種の缺點は、他種の缺點を伴ふものであるが、しかしその一々の缺點は、多少獨立して居るので、陶冶の場合にはその一々を取りて、矯正するやうにすべきである。

#### (四) 問題になる材料の相違

子供と大人との思考作用に於ける他の相違點は、使用される材料の相違である。即ち成人の思考には、個人・家族・公共等の福祉に關することが問題になる。例へば商賣上の問題、政治や宗教或は社會狀態に關する問題に就て、或人は思考する。處が、子供の思考は大部分彼等の遊戲に關係し、往々大人には氣付かれない事が問題になり、又知られても一些事と見做されることが多い。例へばどうしたら玩具の電車が早く走るやうになるか、どうしたら魚がよく釣れるか、友達を負かすやうな成績を示すには、どうすればよい等と考へる。これ等は大人の目から見ると、下らないやうでも、子供に取りては重大で、又彼等の思考を鍊る上からも、大切なものである。子供時代は無反省の時期で、十三歳乃至十四歳頃、即ち青年期に入ると、思考力や推理作用が急激に發達するといふやうに言ふものもある。これは恐らく青年期の者の取扱ふ問題が、成人の

取扱ふそれと相似て居る爲めに生じた説で、實驗的研究をして見ると、何等その證據が無い。却つて思考作用は幼い頃から、漸次に發達して來て、成熟期まで續いて居るといふことが明白である。尤もその發達は規則正しいとは、必らずしも言へないが、連続的であるといふことは言へるのである。青年期に思考が急に發達するといふ考を起さしむる他の理由は、又此の時期は進擊的であり、且つ多くの自由が許されるので、諸種の問題を提出する機會が、他の時機よりも多いといふこともあらう。

### (五) 思考陶冶の必要

思考陶冶の必要は言ふまでも無いことである。現時の如何なる教育書の中にもこの必要程強調したものは無い位であるし、教師は凡ての方面に於て、兒童を思考せしむるやうに勧められて居る。それにも拘らず、未だ其の要求の萬分の一も進歩せず、人生の諸問題に遭遇してそれを満足に解決するだけの能力に發達して居ないやうに見える。恐らくこの方面の進歩は種々の理由からして、遅々たるに相違ない。即ち子供の天賦の能力が十分でないことや、教師の側に非常の熟練

を要することや、學校の組織の不完全等が、この種の發達を阻害することが多い。故に、子供の能力を十分に知り、各年齢に於ける思考の量や正確度を知りて、それに應じて教育を施すべきである。又子供の知識慾に同情をもち、彼等の質問に對して明快なる答を與へて、彼等の思考を刺戟するやうにする。而して思考の陶冶法としては、前に列擧した諸種の缺點を除去するやうに努むべきである。

## 第十一章 習 慣

### (一) 習慣は極めて大切

兒童心理學の中で、習慣構成に關すること程、大切なものは多くない。人生に於ける凡ての活動は習慣に依存し、凡ての進歩はこれによりて規定されて居る。凡ての文化の根柢となり、社會を安定にし、個人の品性の要素を形造つて居るものは、凡て習慣の力である。殊に品性の如きは反應の形式が習慣的になつたものと、定義しても差支ない位に、習慣と密接の關係をもつてゐる。故に、教師の根本的義務は、子供の習慣構成にあるといふことが出来る。この良習慣が基礎になりて、子供は將來自立的な獨創的の活動をなすことが出来るのである。而してその習慣を構成せしむるには、餘り數が多過ぎてもよくないが、又、餘りに少なくてよくない。思想・感情・行爲のあらゆる方面に於て、能率の多い良習慣を出来るだけ多く子供に作つてやることが、父母たり、教師たる者の責務といふべきである。習慣が餘り少く出来上つて居ると、行爲や思想や感

情に於ける統制が不充分であつたり、材料が不足になつたり、従つて小天地に踟躇するやうになつたりするものである。

## (二) 習慣構成の生理的基礎

前述のやうに、重大な習慣の基礎は何であるかといふに、それは状態と反應との間の特殊の結合で、その連鎖を計るものは、神経系統中のシナツプに相違ない。かやうに新しい關係が出来上るといふことからして、吾人の神経系統に一の特質を假定しなければならぬ。即ちそれは一般に可型性と言はれて居るが、此の可型性があるので、神経系統は或る出来事を感じて、恒久的にその通りに變化されて仕舞ふのである。即ち吾人が動物と區別される程、各種の事項を學習することが出来るのである。

然らば、この可型性は何れの機關にも一樣であるか、換言すれば、何れの連鎖も同格に變化し得るか。又、その變化の可能性は凡ての年齢を通じて同一であるか、又は或種の連鎖は特に或る年齢に於て、變化を被り易いか等の疑問が生じて来る。處が、神経系統の連鎖は變化され易いも



のと否らざるものがある。生理的活動や本能活動は、殆んど變化しないもので、食物攝取や恐怖等に關係した反應は變化を被らない。これに比して、發音や手技や注意作用の如きは、遂に變化を被り易い。又、變化の持續も種々ありて、感官と筋肉との連鎖が、感官と聯想過程や、聯想と聯想との連鎖よりも、一層恒久的である。例へば琴を弾いたり、裁縫をしたりすることが、歴史的事實や詩等を記憶するよりも、一層永久的である。

可型性は又年齢によりて相違し、兒童期はその最も強い時期である。歐米では一般に習慣をつけることは、二十五歳以前にすべきで、三十五歳以後に、習慣を作ることとは、奇蹟であると謂はれて居る。しかし實驗的研究の結果は、條件さへよければ、あながち老年だからとて、習慣が全く出來上らないとは、言へないことが證明された。尤も或種の神経系統は、年齢によりて、その可型性に強弱のあることは勿論である。手先きの熟練を要するものや、發音に關するものは、幼い時が最も容易に、新習慣を獲得する。又、機械的記憶の如きは、十歳乃至十二歳頃が最もよいと云はれて居る。しかしこれも個人的相違のあることは勿論である。

### (三) 習慣構成の最良時期

前述のやうに、子供時代は可塑性に富むから、習慣構成には最良時期である。假令両親がこれを知らないにしても、又、教師がこれに氣付かないにしても、神経系統の本質上から、學習を必要としてゐる。日々に起つて來ることが、彼等に印象を貽すもので、幼兒の環境は彼等の模倣性と可塑性の爲めに、非常な影響を子供に與へるものである。子供の性癖は極めて早い時代から出來上るもので、勿論、それは彼自身には無意識で、只神経系統の可塑性に基つてゐる。西洋の古い諺に「六歳まで子供を走らせて置けば、もう逐ひつことが出來ない」といつたのは、至言で、道徳とか、習慣とか嫉とかは、極めて早い時代に出來上るのが多い。殊に、食事や睡眠等に關する衛生的習慣、清潔を好むこと、姿勢を正しくして居ること等は、早くから習慣をつけて置かなければならぬ。良習慣を形作つて置くと、後年に於てどの位利益を被ることが出來るかは、實に豫想外で、しかもこの良習慣の構成は幼少時には、悪習慣構成と餘り大差ない位、易々たるものである。

併し兒童に良習慣を作らしむるには、世の父母や教師たるものは、先づ習慣構成に就ての心理的法則を知る必要がある。習慣構成の法則は大別して、練習の法則と結果の法則とにすることがある。この二つは無意識的の子供時代の習慣構成は勿論、後年に於ける有目的の習慣構成に至るまで、凡ての場合を網羅して居る。練習の中には、反應の強度と繼續と、並にこれ等が時間に関連して居る仕方等を包含し、結果は状態や反應に對する注意の程度によりて、變化され、又連鎖構成の新しいか、舊いか等によりても、相違して來る。

#### (四) 習慣構成上大切な方法

前記の二つの法則からして、二つの實際的方法を云爲することが出来る。第一は、子供に利用されるやうな習慣を作ること、善き衝動には賞與をすることである。行爲上の習慣や正しき發音の習慣を形作る際に、單に訓戒を與へるだけではよくない。母親が「そんな亂暴では困ります」などと言つて、娘の躰がよくなることを豫期したり、教師が十二に三を加ふることが出来るので、三に十二を足すことも出来る、生徒に豫期するのは間違つて居る。子供は如何なる風に

お辭儀をしたり、挨拶をしたり、筆を持つたり、文章を作つたりするかを、練習しなければならぬ。而して機會さへあれば、これを反覆するやうにすべきである。只その習慣を作るには、人生に最も必要なものを選ぶべきで、普通の音讀や計算は云ふまでもなく、默讀の仕方・暗算・藝術の鑑賞の練習をなさしめ、又系列的習慣例へば乗算・除算の九々表・動詞の變化等の如きものも練習されなければならぬ。

併し單に反覆を多くしたからとて、所期の習慣が出来上るとは限らない。それは満足なる結果を得て、反覆しなければならぬ。不快を伴つたり、或は快でも不快でもない、中性の感情を伴ふやうな結果は、習慣を構成するに都合が悪い。例へば九々を暗記するに當りて、それをよく暗誦んじた時が、よく暗誦んじない時よりも、何等かの異つた意識を生じなければ、幾度反覆しても、完全な暗記は不可能である。凡ての練習は満足の感が伴はなければ、理想の方向に向ふことが出来ない。故に、善良なる衝動は明かに賞與を得べきもので、好ましからぬ衝動は満足を得ることが出来ないことを、子供に知らしめることが必要であるが、これも極度に行ふと弊害が多い。例

へば作文や音楽などで、悪い所を正す爲めに、悪い所のみを強く摘出すると、却つて正しき形式を忘れしむるやうになるし、又、善い所のみを推賞して居ると、餘り得意になり過ぎて、自己の缺點に氣が付かなくなるやうになつて仕舞ふ。

次に、賞與は子供が幼ければ幼い程、外部から與ふるやうにしなければならぬが、後には子供の活動の結果からして、賞與が自然と生ずるやうにしなければならぬ。而して賞與に値する習慣は、年齢によりて相違するもので、例へば五歳の子供が善い發音をしたとか、七歳の子供が筆を正しく持つたとかで何も賞與を與ふるに當らない。

### (五) 習慣構成に關する法則

習慣構成に最も大切なることは、最初に大に注意することである。その習慣が筋肉に關することでも、又知的に關するものでも、將た情緒に關するものでも、最初の一步を誤らないやうにしなければならぬ。東と西と互に數千里を距つる行程も、初は一步から始まると同様に、習慣構成の第一日を重視しなければならぬ。處が、家庭でも、學校でも、これを疎かにするのが普通で

ある。夏などに、一日晝寝をするひるねと翌日から、その時刻になると、毎日眠むくなるし、音讀おんどくをする習慣の者は仲々黙讀もくどくが困難になり、一字一句に拘泥するやうに教えると、文章全體の意味を捕捉するに、餘程困難を感じるやうになる。従つてこれを最初の法則として、心理學者によつて列擧れいぎょされて居る次第である。

第二の法則はその構成こうせいせんとして居る習慣が何であるかを知ることである。注意ちゅういの集注しゅうちゅうと陶冶たうやとが、必要であると、バグレーは述べて居る、がその陶冶の目的が分らなければ、何に注意を集注すべきかは分らなくなり、従つてその効果も薄弱はげじやくになつてくる。

かやうに目的が確立かくりつすると、ゼームスが言つたやうに、少しの例外れいがいをも許さないやうにしなければならぬ。而して凡ての機會を利用して、習慣養成に努めなければならぬ。中には道德的行爲たうとくていきやうゐのやうに、部分的ぶぶんてき或は基礎的きそてきの良習慣を作り、それからして、大成することもあるから、與へられたる機會毎に習慣養成に心掛ければならぬ。

しかし習慣を構成することのみが、教育の事業でない。習慣をして最最能率さいさいかのりを有する程度に、

改善して行くやうにしなければならぬ。若しも教師が習慣の改良といふことを、念頭に置かないで居たならば、折角改善し得べき習慣も、低級の所で終りを告ぐるであらう。實驗的に研究しても、又實際生活の經驗から見ても、凡ての作業は改善し得るものである。例へば加算の練習を六十分間行ふと、従來は一時間に三十一の加算問題を計算し得るものが五十に増加し、正確度も二十七より三十七に進歩する。又、暗算を一日に三題づゝ二十日つゞけて練習すると、百分の改善をするといふことである。處が、大多數の人は最極度まで練習をしないで、大抵の所で中止して仕舞ふもので、ソーングイクの如きは、實驗の結果、紐育市の百貨店に於ける店員は、彼等の實際有する速度の三分の二しか表はして居ないし、且つ正確度も、彼等の實際なし能うよりも、半減して居ると、斷言し得ると述べて居る。

#### (六) 實驗室の結果は何故に良好か

學校に於ける練習の結果と實驗室に於ける實驗の結果とを比較すると、後者の方が遙かに能率が高い。それは何故であるかといふことを列擧することは、教師が學校作業を課する際の注意に

なることと思ふ。

第一に、實驗室に於ける作業は分析的になつて居て、その一々の要素を練習するやうになつて居る。處が、學校作業では、一般に數學とか、習字とか言つて、全體の練習を課するので、練習すべき目的が明確に區別されてない。従つてどの點を改良すべきかも、漠然として居るので、練習の効が尠いのである。

第二に、練習の結果が實驗室の方が明瞭に分かる。一々の進歩が精細に被験者に知られるので、従つて勵みが出来て、益々改良を企てようとするのである。之に反して、學校作業の成果は一般的評語によりて示されるので、各要素に於ける一々の進歩が分らない。従つて結果に伴ふ満足感も明確にならぬ。

第三に、改良せんとする欲求が實驗室の方が烈しい。練習の目的が分かり、結果が明かであるから、尙一層進歩しようとするの念が起るが、學校作業では、左まで烈しく起らない。改良せんとする意志は、心身兩面に於ける凡ての改善に、最も基礎的意義を有して居ると、モイマンが言



つたのは、即ちこれをさして居る。

第四は、興味が學校作業には勘ない。實驗室では進歩の度が明かである爲めに、作業に對し一自然と興味が湧いてくる。従つて作業の氣乗りがして、結果が尙一層よくなつてくるといふ有様である。この他又、實驗が珍らしくて興味を惹くこともあり、或はどの位自分の能力はあるか知らんと、試して見たいこともあり、或は他人を負かしてやることを喜んだり、或はどの種の改善が、實際上他の作業の進歩を促すことを知りて、興味を懐くものもあらう。兎も角も、學校作業に比して興味を惹くことが多いので、進歩も亦早く且つ多いのである。

### (七) 練習曲線に就て

練習の結果を曲線で示したものが、練習曲線であるが、これに就て、教育上注意すべき點が二つある。第一は、急速なる進歩が練習の最初に表はれること、第二は、一定の練習がつむと暫時の間は、殆んど進歩しないで、現状を維持し、尙練習をつゞけると、再びその進歩が表はれてくる現象（曲線の形からしてこれを高原期と名づける）とである。

練習の最初は、先づ材料やその取扱方に馴れて居ないので結果が悪いが、それは比較的早く習熟するので、最初進歩が著しい。しかし其の後同一作業を反覆して居ると、倦厭の情を生じたり、又方法も漸次に系統的に改善しようとし、最初に於けるやうな自働的に、作業するといふやうなことが無くなつてくる等の爲めに、前記の高原期が表はれて、練習効果は一時停滞する。それで若し練習が高原期に達した所で中止すると、低い標準に止まるのであるから、尙一層の進歩を計るには、高原期が表はれた後も、練習を繼續しなければならぬ。尤もそれには高原期の表はれた原因を精査して、例へば興味の喪失から來たとすれば、興味の恢復に努め、自働運動の缺乏から來たとすれば、種々の方法を行つて見て、在來の方法を研究して見るやうにしなければならぬ。

主として筋肉に訴ふる作業、例へば流暢に話したり、本を讀んだり、或はベースボール、遊泳等のやうに遊戯や體操に於ても、只兒童自身の練習に委しても、進歩しないことは無い。只盲目的に試みて、恰も動物のやうに試行と成功の法則に委しても、結局は進歩するけれども、それよりは意識的にその方法を吟味させ、假令一時はその爲めに進歩が遅れても、後日の進歩の爲めに

盲目的に反覆せしむることを避けなければならぬ。即ち最初は方法の穿鑿に、教師は手傳ふべきであるが、併し一定の進歩をした後には、他人の助言は餘り價値が無くなり、各自にその方法を工夫して獨特の方法を案出することが、効果が多いものである。

## 第十二章 遊 戲

子供時代は人生に於ける遊戯の時期である。若しも事情が許すならば、すべての時と勢力とを遊戯に費消しようとする。實に遊戯は食物や睡眠と等しく本性の一部を形作つて居る。然らば何故に兒童は遊戯に耽るか。これに就て古來幾多の説が主張されて居る。

### (一) 過 剩 說

この説によると、腦の中樞に於ける勢力の過剩が、遊戯的活動を解發するといふのである。即ち遊戯をする子供は勢力が過剩であるので、これを費消する爲めに、遊戯をするといふのである。休養した後や、健康なる兒童が、疲勞したり又は病弱の子供よりも、一層よく遊戯することは疑もないことである。しかし病弱の子供でも、動物でも、全く遊戯をしないといふことはなく、往々疲態するまで、遊戯をつゞけることは、吾人の目撃する所で、この際勢力が過剩であるとは考へられない、尙七、八歳の頃には、架空的遊びを好み、九歳より十一歳までは、競走遊

戲を好み、十二歳頃には謎のやうなものが興味を惹き、それより十七八歳までは、技術を要する競技を好むことは、一般によく知られて居る所であるが、これ等は勢力過剰で説明することは困難で、それは何等かの理由によりて、一定の順序を踏むやうに思へる。

## (二) 準備説

これは子供の遊戯を以て、將來の生活に於ける仕事の準備と見る説である。或る場合、殊に原始民族の生活を考へて見ると、準備説に合した遊戯があるやうに思へる。しかし一方には、何等の準備の痕跡を有しないやうな遊戯も可なりある。例へば子供が走つたり、捕へたりする競技は野蠻民族には、將來の生存に必要な體力を練る點に於て、準備と見て差支ない。處が、文明人にはそれが果して準備になるであらうか。恐らく電車を逐ひかけて飛び乗りをしたり、自動車から飛び降りるなどに役立つかも知れない。故に、將來の準備といふことは、極めて廣い意味にとりて、どの遊戯がどの仕事の準備であると、一々に就て説明することは出来ないやうに見える。殊に、この説の致命傷ともいふべきは、成人の方で必要を感じて、訓練を施すに拘らず、そ

れに無頓著な反應をする點で、これは或る他の説明によるより外はない。

### (三) 反 覆 説

この説によると、種族が過去に於て、習得した習慣や精神が、今日まで残存再現したもので、恰も身體の諸機關の中にも、今日に於ては、不必要であるが、尙昔時の遺物があると同様であるといふのである。故に、未だ學んだことも模倣したこともない、本能的な子供の遊戯を見ると、過去に於ける大人の行動が如何なるものであつたか分かるのである。種族の活動は全部ではないが、簡約された形に於て、凡ての子供の行爲の中に反覆再現されるといふのが、この説の考である。しかし理論上科學者は吾人の性質が、經過した文化の狀態に應じて、かく著しき變化を被つたとは信じない。又實際上からも、子供が游泳と穴居とを同時に好むことや、弓矢を遊ぶ前に、汽車や電車を持つて遊ぶことや、九歳以下の女の子が、人形遊びを喜ぶことなどは、反覆説で説明することは困難である。勿論、野蠻人の遊戯の中に、共通一貫した要素のあることは明白であるが、しかしそれを反覆説で説明することは、恐らく不可能のことであらう。

#### (四) 競争説

遊戲的活動の主要素は、競争の動機に存して居ると考ふる説である。吾人自身が競技する場合に、殆んど缺くことなく、又他人と協力して競技し得る動機は、相手に勝たうとする欲求である。而してこの動機は、單に競技の時ばかりでなく、人生の最も眞面目な活動に於てすら、吾人の熱心を喚起するに必要である。しかしこの動機が入つてくると、活動が遊戲的性質を帯ぶるやうになるといふ説である。處が、子供の遊戲を見ると、想像的遊戲、人形遊び、幼兒の遊び等には、この動機に缺けて居る。尙又、相手と競走して白熱戦をなす場合には、それ等の活動は決して遊戲的氣分を有して居ない。故に、競争心の有無によりて、一方は眞面目の作業、一方は遊戲と區別することは、眞實でない。従つて此の説は一面の眞理を含むが、全部の説明には困難である。

#### (五) 生理學的説明

遊戲は身體の構造に基づくもので、生長する身體には必要であり、且つその必要を満たすものであるといふ説明である。幼兒に於ては、頭や腕の筋肉が最も強いから、この部分の遊戲をなし、

これと同時に、感覺に關する神經系統や腦の發達を伴ふものである。光や音の如き感覺、珠をなげることは、子供の心的玩具で、従つて快感を生ずる。その後筋肉が一層強くなり、一層強力で、且つ複雑な運動を行ふ場合に、或は腦髓が一層發達して、知覺や理解が出来るやうになる場合には、全身の活動を要求し、且つ想像・執意・模倣が玩具になつてくる。従つて彼等はお嘲を聞きたがるやうになり、尙進むと演劇的表現に變りて行くといふのが、この説の主張である。

この最後の説は、前の四説に比して長所があるやうに思へる。吾人の行爲・感情・思想の本能的傾向は、神經系統に於ける一定の聯絡が發達して、後生するもので、その發達は常に同一の順序を取るものである。又神經系統が働き出すことは、それが發達して居るといふ許りでなく、周圍の事情、個人の狀態、直前の經驗によるものである。又實際生活に於ては、多數の反應が同時に解發しようとして居るし、反應を惹起した事情も、一つが一つを解發するといふやうに單純なものでなく、或時はこの本能が反應し、他の時は他の本能が反應するといふやうに複雑なもの



である。故に、遊戯も漸次成熟してくる本能と、又それを解發する外界の事情や個人的状態によりて、多少の變化を示すことは當然である。

## (六) 遊戯の意義

従つて、神經系統に同一の要素が存して居ても、環境が異ると、それに對する行爲の反應も異り、遊戯と言へない場合を生じてくる。一歳乃至三歳位の幼兒が數千年以前の未開時代に住んで居たならば、彼等が斷えず小さな品物をあさることは、彼等の父親の狩獵に役立つたのであらう。處が、現時の子供は兩親の保護を受け、複雑な社會に棲息して居るから、彼等の反應は直接必要であるとは言へない。で、吾人はそれを遊戯と名づけて居る。例へば十歳の子供が將菜をしたり、土いぢりや橋を架けたりする時は、遊戯といふが、實際に敵意を以つて戦つたり、洪水の危険の際に、これが防禦に努むる時は作業と名づける。

尙又、態度の上に少しく相違すると、反應の上に大なる差異を將來することもある。空腹の子供に牛乳罐を示すと、飲まんとする反應を生ずるが、同一の子供に満腹した時、これを見せると

いちつたり鳴らしたりするやうな反應を生ずる。而して吾人は後者を以て遊戯と名づけ、前者は遊戯とは言はない。同一の刺激に對して、子供は一方は遊戯に、他方は眞面目な反應をする。而してその差異は單に子供の生理的條件の相違から來て居る。

子供の遊戯本能は又一定の状態には必らず一定の反應をすると限つては居ない。多くは多數の本能が同時に喚起される。而してそれは準備の出來上つて居ること、練習・結果等の法則によつて規定される。即ち準備の法則は、各時期に於ける遊戯に變化を與へる。例へば二歳未滿の子供は、走つたり、逐ひかけたりする遊戯をせず、三歳以下の子供は、演劇的遊戯をしない。又嬰兒はガラ／＼を喜ぶが、大きくなると、これを願みないし、二三歳の子供が玩具の犬や車を引張つて、通りを歩いて居たものが、八九歳になると、赤坊じみて居るとしてこれをしない。又練習の法則も亦經驗や學習の爲めに、最初の遊戯に變化を與へ、結果の法則も亦遊戯の時間を規定する。即ちスケートや獨樂廻し等に於ける如く、熟練を得るまで、これを續けて行ふ。しかしそれ等は尙作業でなく遊戯である。

## (七) 遊戯と作業との相違點

遊戯と仕事又は作業とは區別があるやうに見えて、實際はこれを區別するに困難な場合がある。しかしこれ等の區別をその種類で分けるよりも、それに對する態度によつて分ける方が確實である。音楽を聴くこと、算術の問題を解くこと、裁縫・圖畫・招待會に出席すること・散歩・耕作等は、人によつては、最も困難な作業にもなり、或は極めて楽しい遊戯にもなる。此の態度に於ける相違は、活動の特質に於ける相違に基いて居る。或活動が作業として考へられる時には、活動そのものゝ爲めに働くのでなく、その活動によりて、獲得される結果を目的として働いて居る。即ち作業者の目は活動以外の結果の方に向けられて居る。處が、活動が遊戯と考へられる時は、活動その者を考へて、それで満足して居る。勿論、この場合にも、作業と同一の結果を得るかも知れないが、その結果を得ることを眼中に置いてない。

或理由の爲めに、或活動がその人の能力に適應しない時には、作業は一變して苦役になる。例へば吾人が最初熱心に作業し始むるが、やがて疲勞してくると、それは苦役に變ずる。又音楽・

繪畫・手技の如きものは、生來不得手の爲めに、或子供にとりては、苦しき作業となつて居る。大人の考で、工夫して子供の發達程度を無視した作業を兒童に命ずる時も、亦無益の苦役を子供に課することになる。

要するに、遊戯と作業と苦役との區別は活動の種類によるよりも、態度によりて決定される。遊戯とは自由の感を意味し、その目的は意識することもあり、或は無意識のこともあるが、活動そのものに愉快を感じるものである。作業はそれに反して、自己又は他人によりて、指定された行爲を意味し、活動の愉快はあつても、無くても、その結果を得ることを目的として居る。處が、他人より課せられた作業で、その目的を忘れ、或は忘れて居なくても、それを行ふ動機を生じない位遠くになれば、全くの苦役に變化する。尤もこの三種の區別は、最も著しき場合を分類したもので、これ等の中間に位するものは可なり多い。

### (八) 遊戯的氣分の必要

遊戯は教育中、最も重要なる要素の一である。現時、教育家は出来るだけ、遊戯的精神を教室

内に取り入れようと企て居る。蓋し遊戯の氣分を取り入れると、著しく効果が表はれるからである。尤も學校には一定の組織があつて、文明的理想の下に作業、時として苦役をも、幼兒に課することも必要であるが、結果を教育的に價値あらしむるには、遊戯の氣分を出来るだけ喚起しなければならぬ。蓋し遊戯的氣分は、活動が兒童の能力や發達程度に適合し、活動そのものから満足を感じる際に表はれるからである。しかし遊戯的氣分を教育中に導き入れるに際して、特に注意すべき二つの事項がある。第一は遊戯的精神は決して兒童の身體的自由活動と同一義でないことである。遊戯的精神は極めて廣い範圍に行はれ、如何なる行動にも、如何なる年齢にも行はれ、又、身體的・知的反應の特質である。遊戯には想像・觀察・判斷・推理等が行はれ、身體的・知的・情的成分を含んで居る。構成的美的藝術も、往々遊戯的氣分を帯びて居る。吾人が遊戯のことを考へる時は、單に身體的活動のみを考へて、最も大切な方面を看過して居る。

第二に、注意すべきことは、遊戯は何等の目的もない娛樂と同一義でないことである。遊戯に耽つて居る子供を見ると、如何にも熱心に、注意を集中して、その目的を達する。大人に於ける

科學上の發見、實業界の活動を見ても、凡て遊戲的精神に満ちた人士の所産である。他人から命令されたり、注意の集注が不十分であつたり、その目的も遠隔にある場合に、大なる結果を望むことは不可能である。

### (九) 遊戲的興味の年齢による相違

子供の遊戲は本能と能力との發達に應じて變化することは、既に述べた處であるが、その發達の順序は身體的感官的活動によりて、漸次知的要素を含む活動に進歩して行き、個人的遊戲より社會的競争的遊戲に變つて行く。又、年齢が増加してくると、生來的傾向も複雑になるから、遊戲も一層複雑になることは勿論である。かやうに遊戲の發達には、幾多の要素が働くから、年齢に於ける遊戲の種類も、精密に分類することは困難である。しかし大體に就て、これを區別して見ると、次の如くである。

幼児の時代には、感官的知覺的遊戲が主で、一般の身體的運動・手技・發音の遊戲が行はれる。反應は粗雑で、最初の間は殆んど出鱈目の運動をする。七歳以前は競技よりも遊戲に従事し、想像

の模倣が新に入り來り、玩具時代を形作つて居る。七歳より十歳までは、孤獨が漸次減じて、競争的遊戯が増し、競争・跳躍・投げること・攀上ること等の身體的運動や團體的の演劇化・蒐集・一層落付いた手技等を行ふやうになる。十歳より十二歳までは、種々の競技が行はれ、心的活動も一層複雑に且つ廣汎のものとなり、読み物・當て事・勝負・言語等に關する興味が表示はれてくる。球戯・水泳・繩飛び・人形の衣裳などの競争によりて、能力が著しく發達するが、又一方にブランコのやうな受働的の運動をも喜ぶやうになる。青年期に入る前には、團體的精神が生じ、冒險的行動を歓迎する。青年期になると、男兒は女兒よりも、競争を好み、遊戯も分化し、組織立つやうになり、又知的競技を多く行ふやうになる。要するに、幼兒に於ける感官的身體的個人的無目的無組織の遊戯は、年齢の増加と共に知的情緒的社會的有目的組織的遊戯に進歩して行く。而してこの進歩は極めて漸進的で、その間の區劃を定めることは出来ない。

### (十) 教育的價值と指導の必要

遊戯に於て子供は、迅速なる觀察・判斷・價値の評價・主要點を捕へること・細心の注意を習

得し、協同の價值・自他の權利を知るやうになり、規則による自由・活動の價值・成功の愉快等を學ぶものである。故に、子供にして、遊戯をなす機會を與へられなければ、子供時代の喜びを失ふばかりでなく、満足なる發達を遂げることが出来ない。蓋し價值ある本能を使用し發達せしむる機會がないからである。

子供をして十分に遊戯せしむるは、彼等の活動の出来る範圍の運動場や、遊具の思慮ある選擇を要することは勿論であるが、又、彼等の運動を適當に指導することも、極めて大切である。しかし大人の指導には、往々餘り干渉し過ぎて、子供自身の發案になる遊戯を抑止し、従つて受動的機械的の運動に化せしむる弊害がある。故に、最も賢き指導の方法は、子供に暗示と獎勵とを與ふることである。

又、子供の遊戯の發達を十分に吞み込んで指導すべきで、例へば幼稚園時代は多く個人的のものであるのに、團體的競技を強調することは當を得て居ない。これに反して、高學年に於ては、組織立つた競技を好むと言つて、規則の餘りに繁雜な競技を課することも、子供の興味を殺ぎ、



その効果も極めて薄弱はくじやくになつてくる。何れかと言へば、餘り規則きぎの困難くわんなんなものでなく、迅速じゆんそくに遊戯あそびが出来、容易ゆいに變化へんかの出来るものを行ふべきである。要するに、發案はつあんが指導者しだうしやより起らないで、子供こどもの方から生ずるやうに仕向しむけることが、最も賢き指導方法しだうはうほうである。併し指導者しだうしやは大人で、遊戯者あそびしやは子供であるから、遊戯あそびの教育的指導けいよくてきしだうは至難しじなんの事業じぎやうの一つである。

## 第十三章 道德並に宗教心の發達

### (一) 道德性の主要素

道德性に就て、種々と定義されて居るが、その中で、最も適當なものは、知的選擇によりて、團體の善になるやうな行爲をする習慣を、個人が獲得する性向と定義することである。

道德性には、五つの要素が含まれて居る。第一は知的要素で、個人が道德的な爲めには、先づ正と不正との標準を知らなければならぬ。故に、極幼い子供や精神薄弱兒は、明かに道德性を有しない。即ち前者はこれが涵養を要し、後者にはこの涵養が恐らく不可能の者がある。又、異つた社會に初めて入つたもの・新たに入國した移民・新入學の生徒・田舎から初めて都會へ來た者等は、その社會や土地の風習を知らないで、規則を破ることがあるのは當然で、慣れる迄は犯則を大目に見られるが、しかしその社會に長く住んで居ながら、法律を知らないからと言つて刑罰を免れることは出來なくなる。故に、道德性の教養は第一に各社會に望ましき標準を教へること

とで、第二に經驗的手段によりて、正不正の觀念を構成することであるといふことが出来る。

道德性の第二の要素は、個人的選擇である。これは盲目的に法則を固持することよりも、寧ろ動機や決意等が含まれて來る。催眠術にかゝつた者や病人は法則に従順で、個人の動機や衝動に全然缺けて居る場合がある。それでこれ等の者が法則に従順なることは、道德性があるからとは謂へない。何れの人間でも、熟慮的決意をするのでもなく、情緒の合目的抑制なくして、常規に従ふことを道德的であると考へるのは、間違つて居る。しかし従順の者の行爲はこの型に屬して居ることが多い。吾人の多くは殺人や放火や強盜等の行爲をすまいと考へることは無い。蓋しこれ等の行爲をするやうな機會に吾人は遭遇しないからで、謂はゞ今まで習慣となつて居ないといふ情性に基づくに過ぎぬからで、道德的選擇に基いたとは言へない。しかしこの道德性を有しない中性のものも、決して無價値のものといふことは出来ない。これは社會的に利益のあるもので、吾人の中に於ける弱者を保護して犯行に陥らないやうにし、一層高尚なる標準に登る階梯となるものである。個人が新らしい状態に置かれるといふと、烈しき情緒を伴つて、見解が狭少

になる危険がある。故に、正邪の行爲を推究し、選擇し得るだけの機會を與へ得るやうに訓練しなければならぬ。然らざれば子供の意志の獨立や倫理的價値の明白なる見解を獲得することが出来ない。

道徳性に於ける第三の要素は、各個人がそれ／＼責任を有するといふことである。各人の自己の行爲に對して責任を有し、自己の標準を學び、自身で選擇をするやうにならなければならぬ。各人は自己で裁斷し得るやうな年齢に達すると、一定の道徳的立場を取り、自己の屬する團體或は社會の善や價値に對する責任を分擔する。故に、若し彼の屬する社會が一般的善に反したことをしたり、或はその發達を阻害したりして居ることに氣付くならば、その事實を指摘して、自己の考ふるやうな政策や機能に變化せしむるやうに力を盡すべきである。又、他人の利害を保障するやうな地位になると、自己の行爲に對する許りでなく、他人の行爲に對しても、賞讃し或は非難すべき責任が生じて来る。

道徳性に於ける第四の基礎は行爲である。尤もそれは孤立した行爲でなく、行爲の習慣である。

よく世間では、自己が實際に行はない事柄ばかりでなく、抽象的の立派な觀念や情操、他人の行爲を批評するやうなことに就て、自慢をして居るものが多い。しかし言葉や文字に表はれる外、何等の表現を伴はない情操や理想は、鐵瓶の口から出る湯氣と同じく、道徳性に對して何等の結果を齎らさない。觀念や情操はこれを作業力に變形せしむべきである。假令、道徳的知識は少くても、その知つただけのものを熱心に行ふ時は、著しく道徳的性格を作り上げることがあるものである。

時々偶然に行つた道徳的行爲は吾人を道徳的にしない。品性は固定した傾向即ち習慣的行爲から出来上つて居る。婦人が友達の悪口を一度も言はなかつたから道徳的に優れて居るといふことの不合理的なことは、恰も青年が一杯のウイスキーを飲んだから、飲酒家と名づけると同一である。しかしこの點に於て、吾人の判斷は十分明瞭でない。例へば唯一度貞操を破つたからと言つて、一生の間その女を瑕物に取り扱ふかと思ふと、他方には唯一度の勇敢なる行爲の爲めに從來の無賴行爲を赦すといふやうなことをやる。殊に吾人は幼少の子供の悖徳行爲を罰する際には、

注意すべきことで、唯一度の犯行から、往々その子供を不道德の者との張札付をするやうになることがある。これと同様に、一時の善行をしたといふので満足したり、注入された道德的觀念を以て十分であるとしてはならない。子供には出来るだけ、多くの道德實行の機會を與へて、確固たる習慣を作り上げるやうにしなければならぬ。

道德性の第五の要素は、行爲が社會的善でなければならぬといふことである。凡ての行爲が道德的審判を受けるものでない。それが直接又は間接に社會的結果を有するので、道德的になつたり、不道德的になつたりする。例へば毎晩一時まで起きて居たり、食べ過ぎたり、運動ばかりすることは、それが純粹に個人的のものであれば、不道德でないが、その爲めに社會上の本務の上に影響を及ぼすやうになれば、不道德の行爲になるのである。故に、一時の行爲よりも、習慣的に永い間社會的事業に影響を及ぼす行爲の方が一層多く不道德で、又、偶然的反覆よりも、故意の反覆の方が、一層多く罪惡である。而して他人の行爲が自己に如何に影響するかを觀察し、他人の好む結果を生ずるやうな行爲をするやうに訓練すべきである。

しかし社會的善といふことは、比較的の言葉である。善の標準は時代によりて相違する。敵の肉を食つたり、老いたる祖父母を殺したり、異教徒を燒殺することは、最早や道德的行爲と認められなくなつた。現時に於て、何人も決闘や仇討を社會的善と考へるものはなからう。文化が進むに従つて、身體的のみならず、精神生活に於ける善を考ふることが多くなつて來た。暗示的な害毒ある活動寫眞を見せて、青少年に害を興ふることは、窒扶斯に罹つて、その消毒を怠るよりも一層罪惡である。

社會的善は又種族的或は國民的相違によりて相違する。例へば虚偽の嫌疑・名譽の觀念・老弱者の尊敬等に就て、支那人・蘇格蘭人・伊太利人等によりて、それ／＼相違し、結婚や離婚の法律も英吉利・土耳其・日本・米國の諸地方によりて相違して居る。

道德の標準は前記の年代や國民によりて相違する許りでなく、その社會の廣狭によりても相違する。少數の家族に於ては、別に不道德にならない行爲が、數百人を包有するやうな施設に於ては、不道德になることがある。山間に生活するものは汚物汚水を勝手に捨て、も別に差支は起ら

ないが、下流に都市のある町や、密集せる大都市では、一定の下水を用ゐ、汚物も一定の所に捨てなければならぬ。虚言・窃盜・殺戮等は個人には不道德であるが、それ等は果して社會や國民相互の間に於ても、不道德であるかとの疑問が起る場合がないでもない。吾人の社會的水平線や道德の評價は漸次擴大されて來て居る。故に、道德教育に於ては、兒童を廣い社會的環境に導き入れて教育し、選擇の機會を與へ、漸次増加してくる責任を彼等に感ぜしめ、習慣によりて善行爲をするやうに反覆せしめなければならぬ。

## (二) 道德的本能は存在するか

道德的本能ともいふべき單一の本能は存在するか否かといふことの疑問に對しては、吾人は單に存在しないと答へようと思ふ。道德性はたしかに獲得したものである。多くの本能がその發達に貢獻して居る。最初社會的である先天的傾向は、他人と接觸することによつて變化され、情緒は漸次抑制されて、或方法に利用される。而してこれ等は凡て學習の過程である。

幼兒は個人的満足を進めるやうな或る衝動が、團體の善を促すやうな他の衝動と衝突を來たす



ことを發見するやうになる。子供が道德的となるか否かは、彼等の本來的傾向が變化される方法如何によるものである。彼等の良心は社會に於ける教育の結果で、觀念や理想は、彼等の知識や經驗が擴がるに従つて、漸次形成されるものである。故に、無智の人に從ふか、孤立的生活をするならば、子供は何等の道德性が無くして成長するであらう。これ等の者の行爲を不道德とは言へない。しかし正邪の區別を知らながら、不正を行ひ、善をなすことを單に考へながら、實際にはそれより遠かる事をする者は不道德の者である。

### (三) 宗教的傾向とは何か

宗教を定義することは道德を定義するよりも困難である。或人は「必要の感よりして未見の力を崇拜するのである」と言ひ、或人は「本能的に吾人よりも、一層強大なる精靈に頼るものである」と述べ、或人は「未見の世界の尊信である」と述べて居る。宗教の意義を明白にするには其の主成分を分析する要がある。

宗教的たる第一の要件は、各個人が經驗によりて種々の計企が不適當であることを知り、人間

相互間の調整が缺けて居ること、一層よき自我と一層悪しき自我との争闘、自然を説明する必要を知ることである。従つてかの口や文字で單に教へるやうな宗教的教育は、この必要を満さないことになる。進歩的で最後の調整を將來する宗教は生命である。生命は行爲を意味する。調整が旨く行かないとの感は實際生活から起るかも知れないが、單に頭の中の知識だけでは起るものではない。この場合には眞實の宗教は得られない。法則の價值・同情の必要・神の愛の意義・刑罰の機能・個人が他人成は未知未見の力に依託すること等の事實は、人間社會に成長しつゝある子供にして、初めて經驗する所である。故に、餘り保護や注意を加へ過ぎると、健全なる經驗を得る妨げとなることが屢々ある。獨斷とか信條とかは、理解されない時に承認され、人間問題の眞の實現に導く所の疑問や考究は、輕蔑されるやうになる。

示された方面に沿うて反應が不適當であることを實現すると共に、それらの不適當の生じない一層よき事物を作り上げようとの欲求が起らなければならぬ。換言すれば、理想がなければならぬ。しかもその理想たるや、實在で生命があつて、行爲に影響を與へ得るものでなければならぬ。

ぬ。勿論、その理想は個人の成熟や環境によりて變化する。即ち「神は私共がよくなるやうに欲する大きいサンタクローズのやうな者です」とか、雷鳴を以て「神様が太鼓を打つて居る」とかの子供らしい考からして、後には基督によりて教へられた生活の理想や、科學によりて發達した自然の大法を信するやうになる。

道徳性に於けると同じく、知識・思考・習慣が必要である。宗教は終極への常恒不變的生活を要するから、習慣の統制が必要になつてくる。眞の統制は、思考を必要とし、知識が無ければ思考作用も岐路に迷ひ、習慣の形成が不可能になつてくる。宗教が判断や選擇の結果で無ければ盲目的で、合理的で無くなつてくるのである。

#### (四) 宗教は道徳性を含んで居る

宗教の主成分を前に述べた通りに分析して見ると、宗教はその眞の大なる意味に於て、道徳性を包含して居ることが分る。吾人が道徳性と名づけて居る所の、人と人との調和が旨く行くやうにしなければ、吾人の人生をして、理想的終極と一致せしむることは出來ない。又吾人は宗教

的であつて、それと同時に、不道徳であることは出来ない。而して之に反して全く宗教的にならなくても、眞に道徳的たることは可能である。吾人は同胞に關する自己の經驗を、道徳的法則の下に統一することは出来る。がそれは人生の一方面のみを考察したに過ぎないので、他の方面に於ける反對の力と調和して居ない。單言すればそれは宗教的でないのである。故に、道徳は宗教中に包含され、宗教に到達する踏石である。しかし道徳が即ち宗教であると言へない。宗教はその最も廣く且つ最善の意味に於て生命である。神の中に自身を發見する所のものである。この理想は吾人の知と情と意の凡ての力を要求する。實にこれ等凡てはこの人類の最も大なる問題に必要である。

## (五) 宗教的本質は存在するか

道徳を論ずる場合と同じく、宗教を論ずる場合にも、吾人は本來宗教的であるか否かといふことが、烈しく論争せられた。しかし未だにその解決はついて居ない。しかし或種の本能が宗教の發達に貢獻して居ることは疑ふことは出来ない。その本能の中で、最も重要なものを列擧すると

好奇心・性の本能・美的本能・恐怖等である。この他親切を盡す心や・集合を好む心・満足を與ふるもの・苦痛を與ふるもの・主動者たらんとの愛等も亦宗教心の喚起に與りて力がある。理想化する力も亦大切で、それによりて神を考へることが出来るのである。凡ての吾人の經驗の働きと、明白なる人格の意識に發達する本能的反應とは、宗教心の發達に重要な成分をなして居る。獨立したる人格なくしては、宗教も存在することは出来ない。

これだけのことは、凡ての兒童心理學者も許す所であるが、中にはこれ以上に主張するものがある。例へばコー氏の如きは人間は宗教的本質を有して居ると述べて、その證據として次の三つを列擧して居る。即ち(イ)子供は精神的事物に對する消極的以上の能力を有して居る。換言すれば、積極的本質によりて自發的に神を搜がすものである。(ロ)神と十分に結び付くことによりて、眞の人間の生活を送ることが出来、若し神を發見することが出来なければ、自我すらも失ふやうになる。(ハ)子供の人格の發達して行く際の各階級の狀態は、人生の神の意義に就ての意識が漸次に發達して行く狀態に外ならないのが普通である。

この主張に賛成するか否かは別問題として、吾人の本來の性質の中に、宗教の發達して行く根元が存在して居ることは明白である。宗教は種々の粗笨な傾向が二次的に結合して作用するかも知れない。或は又道德の主要素が親切や自己満足の本能の中に存するが如く、宗教の主要素も善良や自己満足の本能中に存するかも知れない。議論は兎も角、兒童心理の研究者として、吾人は兒童の宗教的本質の存することを知らることが大切である。これを無視することは子供が獲得した大切な財産を奪ふことになるものである。しかし子供が本質上宗教的衝動を有して居るといふことは、必らずしも子供が宗教的に成長するといふ理由にもならず、又子供が必らずしも、宗教的經驗や神の實現を意識するといふ原因にもならない。これ等は特に指導し、教養し、發達せしめなければならぬ。子供は凡て親切の本能を有して居るが、他方に残忍な行爲をしたり、合理的に道德的でない幾多の行爲をする。吾人は凡て好奇の本能を有するが、科學者となるものは、極めて少數であると同いで、子供をして眞に宗教的成人たらしむるには、注意深き幾多の陶冶が必要である。

## 第十四章 道德並に宗教々育

### (一) 道德並に宗教教育に於ける心理的法則

吾人が道德的或は宗教的に生活するには、子供時代の知・情・意の凡ての方面の本質の發達を要する。故に、吾人は知識を授けられ、思考し、選擇し、思想と選擇の獨立を獲得し、感激し、動機を生じ、固執的に行爲しなければならぬ。自我は他の人類と神の力とに關係して、その位置を定めなければならぬ。道德的本能とか宗教的本能とか名づける一個の事物を認めることは出来ないが、吾人の全自我が道德的又は宗教的事項に向つて働くものである。而して教育は統一的連續的過程である以上は、何にも道德教育とか、宗教教育とか、命名すべき特殊の教育はあらう筈がなく、これ等は全教育の一部分に過ぎない。従つて教育の他の方面と同じく感情・情緒・衝動・渴望・習慣・知的能力を取扱ふので、方法とても、別に大して差がある譯でない。故に又、何にも新しい心理的法則を要するものでない。しかし現時に於て、悖徳の成人が多數ある所を見ると、

訓育や環境等に不完全な點が多いに相違ない。それで茲に無道德期より變遷期に至る間の最も大切な要素は何であるかを述べるとは、必らずしも徒爾でなからうと思ふ。

第一、道德や宗教心の發達に適用すべき法則は、他の精神的方面の發達に用ふる法則と少しも變りがない。處が、人によりては道德や宗教の教育には何か特別の神秘的法則でもありはしないかのやうに考へて居るものがある。又、中には、普通の教育の方法や兒童の心理を無視しても信仰や禮拜をすれば、子供を道德的に宗教的になし得ると考ふるものもある。現今、日曜學校は大分各處に行はれて居るが、その學校の先生にして、普通の學校の先生程、子供の動機や興味や設備や發表等に注意して居るものが何の位あるであらうか。各家庭に於ても、父兄は數學や文學等に就て、自己の子弟を教養するの知識の不足を自覺するに拘らず、道德的に宗教的に自己の不足を考へて見るものが世の中に果して幾人あるであらうか。道德や宗教の教育は知的教育よりも、遙かに複雑であり、且つ困難であるから、尙一層子供の發達に關する知識や良好なる教育法が必要になつてくる。又道德や宗教々育に於ては、知的教育よりも訓練や環境の影響を受けることが



大である。子供の知的方面は遺傳の結果に負ふ所が多いが、品性の方面は環境の結果に負ふ所が多く、両親の責任も亦従つて大である譯である。

第二、如何なる方面の教育でも、統覺の法則が無視されると、教育は何等の効果が表はれない。處が、この法則を無視することが、道德並びに宗教教育に於て殊に著しいやうである。道德並に宗教教育も亦數學や文學と等しく既知より未知に進み、兒童の經驗・成熟・興味・理想・習慣・知識の變化發達に應じて、教育しなければならぬ。現時の日曜學校を參觀すると、小學校の初年級位の者に六かしい偈文を教へて居る處があるかと思ふと、既に青年期に入りかけた子供に、尙お伽噺を聞かしたり、初歩の讚佛歌を誦はして居るものがある。若しこれが普通の學校教育であつたならば、校長は勿論のこと、父兄の方でも黙過しないであらうが、日曜學校は實に除外例で、全く問題にも上らない。これで現時の宗教教育や道德行爲の進歩を期さうとするのは、少しく蟲のよすぎる話である。

第三、道德や宗教々育に於て、最も大切なものは暗示の作用である。兒童を取まく人格は異常

な暗示力を有し、彼等の習慣を養成したり理想を構成するに、大いに與つて力あるものである。而して未成熟であればある程暗示作用も強いのであるから、幼児の頃から道德的並に宗教的雰囲気の中に置く時は、彼等は無意識的に將た意識的に、これを模倣するやうになる。或心理學者の如きは幼児に於ける暗示の力の偉大なることを強調して、子供の道德的性格は學校に入る前に既に形成されると述べて居る。従つて両親たるものは自身の行爲を注意するばかりでなく、子供の接觸する朋友、學校の場所等にも、注意を拂はなければならぬ。

第四、習慣養成で、これに就て先づ述べべきは、

(一) 結果の法則である。習慣を養成するに最も強力なる要素となるものは、愉快の結果を將來することである。一定の習慣に従はしむる爲めに、罰を加ふることは効果が尠ない。積極的の満足が得られるやうにすることが最も良い方法である。即ち子供が眞實であり、従順であり、寛大であり、自制をし、他人を助けて行く時に、或種の満足を得るやうな環境を作らなければならぬ。従つて又日曜に日曜學校に行つて、宗教的に清き一日を送ることが、彼等に或種の満足を與

へるやうにしなければならぬ。子供は未だ善惡の判断が十分でなく、善事に對しても、惡事に對しても、等しく反應する。唯満足を感じるや否かによりて、本能的に反應するのである。勿論、彼等に満足を與ふるものは、年齢と以前の經驗によりて相違する。御菓子を食べて身體的満足を得ることから、後には神の信仰による満足まで、それ々々變化がある。従つて茲に注意すべきは子供一般に興味があるからとか、或は多數の子供の反應が正しいからといつて、往々子供の個性的相違を無視して、彼等の無興味のことを強ひて、その結果の擧らない場合があることである。

(二) 習慣の構成の第二の法則は練習のそれである。算術とか語學とか、その他身體的運動などでは、可なりにこの法則が認められて居るが、道德や宗教の教育には、これを看過して居ることが非常に多い。尤も道德や宗教教育に割當てられた時間が、他の學科のそれに比して少いから、十分に反覆練習をする餘裕が無いかも知れない。しかし中にはこの僅かの時間を修身の文字の解釋や宗教上の形式の教授に費して、眞の正しい生活に對する感銘を與ふことをしないものが多

第五、行爲に表はすことである。倫理學は道德でもなく、神學は宗教でもない。如何なる行爲が善で、如何なる行爲が悪であることを知り、聖書の文句や經文を暗誦して居ても、その者が必ずしも道德的に或は何等の活動を示さない。生きたる道德や宗教はこれを活動に表はさなければならぬ。それには實際の機會を出来るだけ多く作つて、彼等の知識を實際に活用し發達せしむるやうにしなければならぬ。

第六、個人的相違。道德並に宗教的教育に對して、凡ての子供が一樣に反應しないことは、歴史や理科の教育よりも甚しい。即ち個人的相違が後者よりも前者の方が遙かに大である。前にも述べた通りに道德的に宗教的行爲は、極めて複雑で、知・情・意の凡てを包含し、反應の個人的變化を生ずる機會が大である。或る子供は主として思考に於て反應する。それ等は答辯に苦しむやうな疑問を發する。これに反して、他の子供は「何故」とか「何の爲」とかの疑問を少しも起さず、自分の出来るだけのことをして居る。處が、ある子供は感情によりて反應する。これ等の子供には宗教上の神秘的要素とか、團體に對する犧牲的精神を嘆美する。かやうに反應の形式が

異なるので、その取扱も亦自ら異にすべきが當然である。この他暗示性の相違がありて道徳性、責任の諸問題を取扱ふ場合に、それ／＼異つた取扱を要する。

## (二) 年齢に應じて如何に教育するか

道徳教育でも、宗教々育でも、子供の年齢に應じて、それ／＼變化して行ふべきである。蓋し兒童の精神は一日一日と發達して行くから、それに應じて道徳並に宗教々育を變化せしむべきは理の當然である。例へば自我の感が明瞭にならなければ、道徳性並に宗教心は發達しない。處が、この自我の感は記憶や想像や他人との交際等によりて、漸次に徐々と發達して行くものである。又理想を生ずることも、一般化の作用の結果であるが、これも數多の經驗や特殊の状態等から漸次に構成されるものである。徳性並に宗教に必要な辨別・判斷・推理の作用も洗練されるには、一定の時間が必要である。習慣の構成も、漸次に構成され、殊に廣き社會的順應を伴ふ高尚なる宗教的統整に於ては尙更である。

これ等の發達を研究する人々は、極めて明確に各種の階級を區別して居る。しかしこれ等の階

級はしかく明確に區別が出来るものでなく、又、子供は總じてこの階級の凡てを必らず通過するとも限らない。習慣・選擇・理想等に於て、凡ての子供が恰も階段を上つて行くやうに、同一の順序を取るもので無い。しかし其の間に發達の階級はある。即ち他の精神作用と等しく、開發・成熟・完成といつたやうに進歩する。知識が廣くなつたり、判斷力が増したりするにつれて、單に習慣的に行爲するよりも、寧ろ合理的に行動する機會が多くなる。年齢が増加するに従ひ、又比較的放任して育てられた子供は思考・興味・決斷・選擇等に個人的色彩が増加する環境が、擴大してくると、以前の標準は一時的又は不適當に考へられて、改造を行ふやうになる。他人に屢屢接觸して、軋軟・競争・嫌惡・訓戒・愛情等を経験するやうになると、動機の質に於ても、衝動力の量に於ても、變化してくる。しかし前にも述べた通りに、社會的又は宗教的生活に於ける三種の階級中に凡ての子供が一樣に同時にこれ等の變化を被るとは限らない。しかし年齢に於ける變化の多少一般的特質を列擧することは出来る。それでその一々に就て少しく述べて見よう。

### (三) 最も早い時期の特質と訓練

最初の時期では、無道德の有様である。蓋し子供は何等の合理的選擇もなく、本能を習慣に漸次變化せしめて行くことによりて、法則に従ふことが出来るやうになる。この時期に於ける統制は、行爲に附帶して生ずる痛苦又は快感によりて、第一に達せられ、第二には、子供の屬する社會の人々より與へられる系統的の快不快の感によりて達せられる。記憶や想像が發達するに従つて、非難や賞讃の豫見や或種の理想を生じて、統制の要素になつてくる。訓練に利用し得べき兒童の情緒は大部分、恐怖・愛情・驚愕である。子供は幼い時には、何等の疑もなく言はれたことを受け容れる傾向がある。又、不可思議の感も強い。例へば風は觸れるが目に見えない。光は目に見えるが、これに觸れることは出来ない。音は觸れることも見ることが出来ない。かやうな類推によりて、見えず、聞えず、又觸れることも出来ない不思議の事物の存在を假定するに至るのは、容易なことである。幼兒は身體上の必要や愛情の欲求の爲めに成人に、頼つて居る。それで幼い子供は成人を信頼し、愛し、且つ尊敬する。しかし大人は一方に子供の苦痛を除いてやるが、他方には往々絶對的の服従を命ずることがある。かやうにして、人格は自我の感を發達

せしむるに、重大なる要素となり、又身體的力よりも、一層大なる不可思議を帯びてくる。その上に他人が模倣と想像的遊戯を刺戟する。かやうな環境の経験よりして、良心が生れてくる。従つてその良心は實に子供に最も接近せる習慣・標準・性格を反映する。正しい所のものは、子供自身に満足を與へるものであり、且つ他人の承認を得る所のものである。子供は愛情・信頼・社會的調和の境遇を必要としないし、又、整頓と清潔の嚴密なる訓練に基く身體上の保健的施設を要求しない。子供をして正道を踏ましむること、より大なる善を期待すること、苦痛と落膽とに勇ましく堪へるといふことは、必らずその報があることを知らしめるやうにしなければならぬ。感官知覺と自然を愛するの情とを開發し、從順・誠實・禮讓・有用の人物になる習慣を養成するやうにしなければならぬ。自然に關する話・神話・怪談等は、驚異・神祕の情を強くする。この頃の神の觀念は、罪を赦すものとしては、ぼんやりして且つ隔りのある或物として表はれる。又、神の性格の如きは、父母の類推に基いた擬人的の考へを有して居る。要するに、この時機の訓練は情緒的・想像的・直覺的方面に訴へるやうにして、高尚な知的又は現存する教權に訴へな



いやうにすべきである。蓋し後者は少しも子供に同化されぬし、又後になりて廢棄せらるゝものであるからである。早い時代の子供は單に家庭で祈禱したり、禮拜する位の習慣を得せしめるやうにする。しかし六歳前にも、團體的に祈禱・禮拜をなさしむる機會を與へるやうにしてもよい。三歳より六歳までの子供は、事物の起原や神の性質に就て、種々と質問を試み、大抵の人はその答に窮する場合が多い。しかしこの好奇心は必らずしも科學者となるか、信仰者となるかの端緒を示すものでない。これ等の疑問は早き時代の恐怖や愛想のよいことや偏愛等と同様に、後來の宗教意識の發達に烈しき障害を與へるものでない。指導によりては、立派な開發を遂げるものである。

#### (四) 中間期の特質と訓練

これは六歳より十歳までの間で、人によつて競争期とか、兒童固有期とか、少年期とかの名を與へて居る。この時期の子供の徳性は、彼等の道徳教育の如何によりて、著しく相違を來すものである。彼等は學校に行くやうになつて、比較的家庭より獨立した生活をし、同年頃の多數の子

供に接觸する。友達と遊戯や種々のことをするに従つて、正義・公平・勇敢等の醜氣の理想を構成する。自己の權利や快感を得ることに熱心で、これを妨害する他人の行爲に對して防禦する。これと同時に、自己の功績が同僚の嫉妬を惹起することも知るやうになる。競技に於ける詐欺や貪慾等に對して苦しめられたり、憤つたりするやうになると、これ等の行爲は子供の見地よりして不正と考へられるやうになる。その後數人の者が組を作りて、仲間以外の者の侵害に對抗するやうになると、仲間を賣ること、虚言・申譯等が不正として考へられるやうになる。しかし抽象的の誠實・禮讓・從順・その他成人の取扱ふ道徳は、この時まではまだ發達せず、極めて曖昧なるもので、恰も蓄音器的に道徳の内容を語るに過ぎない。

この時期には、言はれたことを無質問で承認することが少なくなり、確實性の欲求が増加する爲めに、漸次輕信をしなくなつてくる。それで怪談よりも眞の物語・歴史・英雄譚の如きものを喜ぶやうになる。又注意集注力も長くなり、責任の感をも發達し、殊に機械的記憶の力も増進する。推理力は未だ十分に發達しないが、認識の力は大いに進んで居る。道徳意識は習慣から得ら

れ、羞恥の感は不正の行爲をしたといふ意識から生ぜず、寧ろその行爲を人に見つけられたといふことから生ずるやうである。徳行も確信に基いて行ふのでなく、模倣によつて行ふのである。權力を承認することよりも、社會的均等を承認することが漸次大切に考へるやうになり、獨立の欲求が漸々強くなつてくる。神の觀念も人間的の意味を脱して、神性を帯びてくる。但し女兒は男兒に比して、明かに迷信的信仰に傾き易いと言はれて居る。

この時期の訓練や教授は、如上の特質に基いて行ふべきである。暗示性や模倣性に富むからして、子供を取り巻く人物も、子供の自我の發現に適合する材料を與へるやうなものでなければならぬ。例證の適合と正確とは、最も大切なものである。子供は直ちに教訓と他人の行爲との間の不一致を發見する。而してそれが彼等の生活に缺陷を將來するから、子供には信條よりも、應用倫理に於ける實例を與へる方がよい。

賞罰に就ても、亦常に矛盾のないやうにしなければならぬ。他人を喜ばせんとする欲求は、正義に基いて意識的に行爲することに指導してよい。盲目的服従は漸次合理的に變化し始めるが、

しかし其の習慣は後年に於ける信念や他の道德の基礎となるものである。自制心は漸次新しい方面に發達せしめなければならぬ。「さうしたくない」とか、「それは嫌ひだ」といふことが、行爲の必然性に少しの相違をも與へない多くの場合があることを、教へなければならぬ。この教訓を學ばないと、青年期になつてから、大變不利益を來たすことがある。子供に選擇を許す時と、何等の選擇をも許さず、直ちに命令を實行する時とを、區別するやうに教へなければならぬ。子供をして社會的法則と各人の責任の力を感ぜしむるやうに、善惡の行爲の判定に對して、深く持する所がなければならぬ。他人に不幸や害を與ふる惡戯や、「からかひ」の衝動は、寛大・親切・禮儀的行爲に導く衝動を發達せしむる爲めに禁止しなければならぬ。後年に於ける純眞の性的行爲の基礎を與へる習慣を養成することも大切である。

八歳以上の子供の道德並に宗教々育に於て、往々看過されることは、彼等は現實的想像、形式や禮式を愛すること、機械的記憶にたよることが多いこと、好奇心が目と手の働きに訴へること等である。この時期は又觀念や抽象によるよりも、行爲と感情とに主として訴へて教へなければ

ならぬ。抽象的又は符號的言葉で子供に話すことは容易であるけれども、それ等は子供の經驗より遠ざかつて居る。符號はそれが代表する實物の理解を得た後に初めて、了解されることを、吾人は常に記憶して居なければならぬ。子供は人物の行爲、即ち具體的直接的徳性を理解し、抽象的議論よりも、その生々した儘を體得する。故に、受動的の知的及び理論的の方面よりも、寧ろ發動的實際的の方面を、子供に教へるやうにしなければならぬ。行爲と感情とは、其の概念が出来上る前に、正しくあることが出来る。實際に概念は道徳又は宗教に關する幾多の特殊の事例が基礎になつて、初めて出来上つて居る。性に對する自然の好奇心も、彼等の發達程度に應じて指導すべきで、抑壓と虚偽とは害毒を残すことが多い。宗教上の六かしい教訓や聖典を教へることは勿論宜しくないが、神話や傳記や宗教上の歴史などは、子供の好むに委せて讀ませべきである。宗教上の文學や歴史に毎日親しむことの情意に於ける結果は、環境による他の影響と等しきものである。

この中間期と後の青年期との過渡の時代がくる。道徳教育の人格化、宗教々育に於ける自我意

識の覺醒といふことが、此の時期の特徴になつて居る。十歳乃至十二歳の子供は道德的眞理を個人的に適用することを承知しない。女兒は男兒よりも早く發達し、一層内觀的に且つ個人的である。女兒は十二歳前に既に眞の道德的習慣を得るが、男兒は未だ野性を發揮して居る。男兒は徒黨を作つたり、冒險を喜んだり、勇敢や技術を要する事項になつて居る。故に、此の時期の教育としては、種々の身體的活動をなさしめ、決意や選擇に對する責任感を養ひ、男兒にありては徒黨の本能を適度に良く指導してやる。演劇的又は模倣的の本能を宗教上の儀式に利用し、又競争心をも適度に利用する。教授としては、歴史上又は文學上の人物を主として、理想を暗示するやうにする。又この時代は祕密語・警句・謎等を喜ぶから、これを利用することも大切である。

### (五) 青年期の特質と訓練

青年期に入ると、身體上の急激なる變化、家庭生活の變化、社會的活動の擴大が、種々の點に於て、精神上の平均を失はしむる。假令そこには個人的習慣の可なり大なる組織が既に存しては居るが、内部より生ずる強烈なる新らしき衝動、外部より來る新らしき習慣と標準、個人性の

新らしき感情、未熟なる意志等が、相容る爲めに青年の心情の平衡を破るのである。情緒・興味・自我の感・推理力に新らしき力を生じ、神や社會と個人的生活との關係が改造される。自然現象に對する感受性が高上し、眞・善・美に對する鑑賞が大になる。十二歳から十六歳までは、恰も醗酵して居る状態で、氣分が種々に變化することは、其の時期の情緒的・活動的・長さと強さを決定する主要なる要素になつて居る。社會性が初めて生れ、内觀と行爲力、判斷と道德的統制との間の不一致が此の時代程烈しいものはなく、道德的安定は此の時代程容易に破られるものはない位に所謂精神的危機に瀕して居る。

かやうな低氣壓は短きは數ヶ月より長きは數年に亙りて繼續する。最も人によりては、漸進的な平靜なる宗教的覺醒をし、道德的・知的・美的感情が相調和して發達して、漸次に知が情を統制するやうになる者もある。或者は自己の人格を全く神に委託するに至る者もある。これは所謂入信と言つて、宗教經驗の中の著しき轉機になつて居る。自發的又は特殊の覺醒・入信・低氣壓の時代・無頓着の時期は、殆んど同じ年齢に表はれるもので、男兒ならば十六歳より十七歳、

女兒ならば十四歳前後に、最も多い。要するに、十二乃至十三歳より、十九乃至二十歳までの間は、行爲・情緒・及び知力の向上を來たす點よりして、危険といふべきである。

故に、此の時期の注意としては、平均の取れて漸進的發育を遂げるやうにし、烈しき抑壓とか外科的手術のやうな急激なる手段を取らないやうにしなければならぬ。従つて健全な家庭生活が最も青年期の教育に大切で、賢く且つ同情ある指導が必要である。母の無智な烈しい取扱の爲めに、女兒の七〇%以上精神に異狀を呈したといふことである。權力は漸次減らして行き、各個人の上に責任を持たせるやうにする。「私に従へ」といふよりも「汝に従へ」といふやうにしなければならぬ。男兒も女兒も、自分でこの危機に向ふやうに教へられ、自己がこれより屬する一層廣い社會の要求に應ずるやうに、自己の行爲を調整するやうに導かれなければならぬ。自己に降りかゝる問題を自分で處理し、自己の行爲や直接行動は自己の承認する道德の系統によりて、價値を批判せしむるやうにする。尤もその問題は彼等によつて、容易に解決が出來ないかも知れない。しかし其の爲めに多くの興味を生じ、健全なる活動へ導くやうになる。健全なる身體・心的



作業の豊富・身體的・美的・社會的・倫理的要求に對する豊富なる逸出路が、非常に價值のある習慣構成に助を與へる。殊に身體的缺陷は病的良心の唯一の原因となることが多いから注意しなければならぬ。理論よりも行爲を強調する必要がある。馬鹿氣た質問に對しては、賢い研究法を教へ、讀書の正しき指導を與へ、社會奉仕の機會を作つてやるやうにする。「行によりて學ぶ」といふことは、この時代ほど大切なものはない。或者を愛し、或者を知り、或事を行ふといふことは、開發期に必要である。親友は遠くから注意し、それ等の交際を旨く指導する必要がある。文學・歴史・又は現代に於ける英雄の崇拜も、その崇拜するに足るべき人物か否かに就て指導を要する。歴史・文學・倫理等に就て、一層廣き研究をするやうにし、宗教史や宗教に關する文學によりて、個人的經驗に豊富なる内容を與へるやうにする。

## 第十五章 異常兒童

### (一) 正常と異常との境界

身體的にも精神的にも、どれまでが正常で、どれからが異常であるかを明確に境界を附けることは出来ない。一寸法師と仁王様、利口の者と白痴の者、聖人と犯罪人といふ風に、兩極端を比較すると、その區別は明白であるが、この兩極端の間にある者は、何れも少しづつ程度を上り又は下りして居るので、判然と區別されない。

又、異常の質から見て、大體に身體的異常、知的異常、道德的異常といふ風に區別するが、これとても任意の分類で、決して根本的相違によるものではない。例へば身體的缺陷を除去すると、道德的改良や知的發達を促すこともある。又情意の方面の陶冶は神經的疾患を除き、不相當の情意の壓迫が神經的疾患を醸したりする。賢き道德的陶冶は健全なる知的發達を齎すこともある。しかし吾人は便宜の爲めに、前記の三種の方面に分類して、普通の者から上の方へ——下の方へ

外れて居る者を述べることにする。例へば道德的方面に於ては、下は犯罪者・道德的低格者・利己的人・厄介をかける者等から、上は立派な人格者・善人・聖人等を取り、身體的方面に於ては、下は盲・啞・癱瘓・病弱・貧血兒等から、上は健康な子供や異常に頑健な兒童を取り、知的方面では下は白痴・低能兒・劣等兒等から、上は利口・優良・天才兒等を取りて説明することにする。

## (二) 道德的異常兒

先天的に道德的缺陷の者がある。例へば義務の感に缺けたり、不道德の行爲に對する羞恥や嫌忌を感じない者がある。かやうな傾向が矯正されることの出来ない子供は潛勢的犯罪人ともいふべく、その智能が如何に高くあつても、法令規則を犯すやうなことをする。又不快の結果を將來する位のことでは、不道德や犯罪の行爲を抑壓することが出来ない位、惡習に染まつたものがある。道德的異常兒には、一方に或る本能例へば自己誇示・性慾・嫉妬・狂暴性等が、單獨に又は複合して異常に烈しく表はれ、他方に抑制力の缺亡・暗示感受性の強烈・その他執意的方面の

異常等がある。

これ等の異常は、又種々の程度の智力と共存して表はれる。早熟の子供に於ては、非社会的・無愛想・病的に利己的なこと・他人の權利を少しも尊重しないこと・自殺を遂げ易いこと等の傾向がある。高度の低能者の方が高度の優秀者に比し、遙かに道德的異常性を帯びて居る。尤も例外があつて、非常に智力の優れた犯罪者も無いではない。しかし監獄・矯正院・感化院等を調査して見ると、大部分は智能の劣つた者である。(第七章智能の章参照) ウィーズやピヤソンが智能と性格との相關係數を求めた結果によると、何れも正數で〇・四から〇・五であつたと言はれて居る。道德的缺陷がその者の智能の標準以下に烈しい時には、道德的低能者といふ名稱を用ふる。この道德的低能は可なり早い年齢から表はれ、如何に注意して保育しても、又どんな罰を加へても、少しも効果が無いと言はれて居る。而して道德的低能者が、若し智能も高度に劣つて居れば、野獸的傾向を示し、中度の智能であれば、無責任又は輕罪犯者となり、高度の智能を有すれば、惡に對する天才者となるのである。

道徳的異常を生ずる原因は種々ある。第一は遺傳で、不良兒の統計によると、二三%から七七%までは、遺傳であると言はれて居る。不完全の教育がこの性向を助長し、又はこれを矯正したりする。貧困が道徳的發達を阻害することもある。遺傳と環境との結合によりて、善良なる一大家族を作つたのは、かの有名なエドワーズの家系で、凡て傑出した人を出し、これと反對に家系の者が悖徳者ばかり出した例はデュークスの家系である。

道徳的異常の診斷は一寸容易のやうで、仲々六づかしい。例へば情緒の激越は永く抑壓された本能の逸出として、一時的に現はれることもあり、青春期の現象であつたり、早發性痴呆や癲癇の徴候であつたり、或は崇拜する友達の影響であつたりする。晝夢のやうな空想的の状態も種々の原因からくるもので、例へばヒステリー・營養不良・急速なる身體的發達・感官の缺陷・早熟的愛情等によることもある。倒錯的發作も本能から來る倒錯や、頭蓋發達の陷缺・又は不揃の齒からくる反射神經の障害或は強烈なる抑制の爲めに伴生する。故に、社會事業家・兩親・教師・醫者・心理學者等が種々の場合に、相共同して診斷を下す必要がある。

次に道徳的異常兒に對する處置は如何にすべきかといふに已に社會に害を及ぼす程烈しき者に對しては、法律上の制裁の下に置く方がよい。感化院や矯正院に送るのを嫌がつて、却つて兩親や教師に迷惑を及ぼすことがある。醫師の忠告に従つて、身體の改善に注意を拂ふことが、第一である。かやうにして衛生的生活を彼等になさしむる。心理學者に依頼して精神検査をし、教授の方法もそれに應じて改めて行く。それから一方に家庭や社會の狀態を調査する。餘りに甘い親や子供の素行に神經過敏な親はその子を害ひ、又餘りに嚴格な親や無學な親や利己主義の親も、亦その子の自然の發達を害ふやうになる。本能の善導と習慣の改造とが最も必要で、想像をして正しく逸出せしむるやうにし、行爲に對して確實に判斷し、批評するやうに導いて行く。道徳的再教育は、軍隊式の最も嚴格なる專制主義から、自治自制の最も自由なる民主主義に至るまで、種々の方法がある。これは子供の年齢や知識や道徳的異常の程度によりて、寬嚴その宜しきを選ばなければならぬ。道徳的低能者や癲癩兒の如きものに、かの少年共和國にて採用せる社會的不承認で匡正しようとするのは不可能で、これ等は隔離するか、不斷の監視が必要である。

### (三) 身體的異常兒

身體的異常兒といへば、感官に於ける缺陷・身長・體重・成長又は成熟の割合が常態でないこと、各種の神經的疾患、或は特殊の傷害に基く異常等をも包含して居るが、茲には神經的異常兒の主なる者に就て少しく説明しよう。

**癲癇** 癲癇には四種の形式がある。(一)は五分乃至二十分位無意識状態に陥るもので、時としては前驅的證候を伴ふことがある。(二)發作が數秒で、殆んどその存在が氣付かれない位に早く経過する。(三)一部の痙攣を生ずるもので、全身的の痙攣や無意識状態を生じない。(四)異常の行動、殊に情緒的激發や烈しき痙攣を伴ひ、往々にして自己の行動を後になりて忘れて仕舞ふものである。癲癇の原因の多くは遺傳で、大酒家・梅毒患者・精神病者の子供に、この症狀の者が多い。

前記の第一種と第三種との癲癇は、直ぐに素人にも分かるが、第二や第四は一寸發見されないもので、不正當の處置を取ることが多い。かやうな子供は特殊の學級に送る必要がある。そこで靜かな規則正しい生活を送らせ、興奮を生ずることを避け、最も必要な學科のみを授けるやうにす

る。かやうな者には臭素劑が用ゐられ、第三種の場合は外科的處置による場合もある。

ヒステリー これは神經の不堅固の爲めに生ずる機能的疾患で、心的統制が減少してくる。青

年期の中ば又は後までは發達しないが、この疾病に罹る原因は早い時代に存して居る。この特質としては、情緒的統制の不確・異常の暗示感受性・晝夢を異常に愛すること・不快の情的經驗を全く忘れる傾向・一種の人格分裂を生ずる傾向等がある。種々の筋肉的又は感官的障害が生じ、癲癇的發作から感覺脱失まで生ずる。ヒステリーは學童の間に精神的傳染をすると報告されて居る。

ヒステリーは、露とか不消化とかより癩痺等に至るまで各種の病氣の外觀と似て居るので、これを診斷するに困難である。この疾病は醫者の處置よりも、寧ろ教師の手でこれを除去することが賢き方法である。或は家庭の影響から全く離して、戶外生活を多くして治すこともある。自制心を奨励し、且つ陶冶しなければならぬ。客觀的興味を養つて、内省を餘りしないやうにし、時としては暗示によりて治癒することがある。

神經衰弱症 神經衰弱の子供は、特に警戒しなければ後年に於て神經的疾患に陥り易い。學童



の五％は多少の神經的疾患を有し、輕いのは感情に動き易い神經質のものからある。

神經衰弱の身體的症狀としては、頭痛・胃の不消化・不眠・不共齋運動等が表はれ、精神的症狀としては、中心を外れて居ること・感受性の高上・他人の意見に無頓着なること・強迫的恐怖・疲勞し易きこと・定まつた仕事を厭ひ・想像的狀態に心を奪はれること・他の子供と協同することが困難で・決心が仲々つかない等が表はれる。この不確實・自己確認の缺亡等が臆病にならしむるのみならず、不愉快なものを拒絶する。しかし内心の苦悶の爲めに、却つて反對現象を呈して、濫費・進撃・利己・自己主張等の傾向を呈する。

神經衰弱も遺傳である。しかし睡眠不足・刺戟物の使用・餘り嚴しき陶冶・宗教的懷疑の異常發達を來すやうな教育・正しき性教育をなさないこと等の爲めに、一層助長される。診斷は勿論専門家に委すべきであるが、父兄や教師は前に述べた症狀に就て警戒して居なければならぬ。

處置としては、(一)アデノイドや悪い齒のやうな原因を除去すること、(二)非衛生的の習慣を打破して、休息を與へ榮養を善くし、戸外生活を送らしむるやうにすること、(三)勇敢なる行

爲の習慣を養ひ、確證とか同情的考察によりて想像的恐怖を除くやうにすること、(四)勇敢なる道徳的行爲の習慣を作り、困難なことにも直に向ひ、失敗や非難に對しても、餘り心痛せず、結果にくよくよせず、問題を解決する勇氣を養ふこと、(五)自由遊戯や競技を通して、他の子供との協同的精神を養ひ、確信を興へ、空想に耽るのを防ぐやうにすること、(六)寛嚴中庸を得たる取扱をして、無暗に抑壓せず、同情を以て指導し、悲哀・性的の問題等に就ても、これを適當に發散せしむるやうにすること、(七)子供の能力に相當し、興味を惹く仕事を課して、彼等の注意を集ませしむる習慣を作り正常の發達を遂げしむるやうにする。

**早發性痴呆** これは特に青年期に表はれる精神病である。或特殊の仕事が嫌になり、空想が烈しくなり、實際のことよりも、想像上のことで、精神内容が滿されるといふ風になる。これは凡て遺傳からくる。それで教師や父兄の手で、如何ともすることが出来ない。しかし前に述べた一般的精神衛生、即ち活動や客觀的興味を強張することに注意すべきは勿論である。

#### (四) 知的異常兒

知的異常兒と言へば、精神薄弱兒、優良兒等を包含して居る。先づ精神薄弱兒から説明しよう。智能の劣つたものを智能指數によりて、劣等兒と低能兒とに區別することは第七章に述べたが、これを種々の階級に分類するものがあり、又その分類の標準も區々である。今一例として英國ロンドンの精神薄弱兒の處置に關する委員會で規定されて居る四種の區分を述べよう。(一)遲滯兒(Backward)は或る環境例へば疾病等の爲めに、精神發育が遅滯して居るもので、その條件をよくし、相當の處置をすれば、正常兒に復する者である。(二)輕愚兒(Moron)は生後又は早き時代から表はれる精神遲鈍兒で、特別の保護を與へるとどうかかうか生活が出来るが、普通の生存競争場裡では落伍者になるものである。自身の行爲又は事業に就ても可なりの慎重を以て行ふことが出来る。(三)痴愚兒(Imbecilis)も生後又は早き時代からの缺陷で、普通の身體的危險に對する警戒は出来るが、自分で生活することの出来ないものである。(四)白痴(Idiot)も生後又は早き時代より表はれ、自分で生活することの不可能は勿論、身體的危險に對しても、自己を保護することの出来ないものである。

精神薄弱兒の身體的特徴は、上顎の缺陷・出齒の遲滯又は粗惡・耳鼻及び口の畸形・舌の異狀・頭顱の變形・生殖器の異常・一種の皮膚の分泌・血行の不十分・矮小等である。精神薄弱兒には、多くこれ等の變質徴候があるが、しかしこれ等の變質徴候あるものは、凡て精神薄弱兒であると速断してはならぬ。即ち逆の定理は必ずしも眞でない。或る人は精神薄弱兒の中で八〇%乃至九〇%まで、如上の變質徴候が無かつたと報告して居るものもある。

精神的性質としては、先づ感官の缺陷又は感官的辨別力の薄弱である。筋肉共齊運動も不十分で、直立したり、歩き出すことが非常に遅れる。感情が激變し易く、本能の倒錯倒へば手淫や汚物を食するやうなことが表はれる。發音も不完全で、ラ行やサ行が言へず、觀念内容も乏しく、記憶が弱く、創作的想像に缺けて居る。學習や習慣構成も遅い。推理作用は全く缺如し、抽象的のものを取扱ふことが出来ない。注意を集中することも困難で、意識が朦朧として居る。

精神薄弱の原因は九〇%までは、遺傳とされて居る。その中で大部分は親の神經系統の疾患で、これに次ではアルコール中毒及び梅毒である。残りの一〇%は疾病・妊娠中母親のアルコール中

毒・負傷・注射の有毒作用・栄養に基く腺分泌の缺陷に原因して居る。これ等兒童に對する處置は、社會事業家と醫者と心理學者との協同に俟たなければならぬ。先づ醫師が身體的缺陷を診斷し、心理學者が精神缺陷の程度を檢査し、社會事業家は低能を生ずる環境を精査して、それ〴〵適當の方法を講ずべきである。

即ち醫師は感官の缺陷を治療し、アデロイドを取去り、又は甲状腺のエキスを與へたりして治療の出來るものは治療を施し、一方に身體の強壯を計るやうな栄養や運動の方法に注意を與へる。心理學者は彼等の缺陷に應じて、學科を加減し、能力相當の學習を命じて、漸を逐ふて進めて行く。尤もこれ等も低能の程度によりて相違する。白痴の兒童には全然知的作業を廢止し、彼等の身體を清潔に保ち、坐作を規則正しくする位の訓練を施す。痴愚や輕愚になれば筋肉作業を命じて、幾分生活費を得る方法を教へるといふ風に、其の程度を高めて行く。遲滯兒になると、特別の學級を設けて學校教育を施してよい。但し主要なる學科を授け、卑近より漸次に、その度を高めて行くやうにすると、後には普通兒の域に達するやうになる。

## (五) 優良児と早熟

優良兒童には學科全般に就て優良なものと、或は特殊の作業例へば音樂・圖畫・數算等に優秀なものがある。音樂的天才は往々六歳以前に表はれ、繪畫的天才は十歳以前に表はれるといはれる位、特殊能力の優秀は可なり早くから表はれる。而してこれ等の兒童は學校では普通児、時としては低能児の部類に入れられて居るのが往々ある。蓋しこれはその天才を十分に表はす機會が與へられないからである。

早熟といふと、一般に悪い意味に取られて居るが、知的早熟は決して悪いものでない。早教育も亦知能の早く發達したものには施して差支ない。只早教育を獎勵すると、未だ十分に發達して居ない兒童を無理に鞭撻して發育を早めるやうなことをするから危険である。又往々神經質の子供は早熟の傾向を帯びて居る。それを眞の早熟と考へて、過重の負擔を課すると、中途で挫折し所謂二十過ぐれば普通の人になつて仕舞ふ。尤も早熟の子供に早教育をすれば、それが無限に發達するといふ意味でない。只早く發達するだけで、普通の人が例へば二十五歳で大學を卒業する

のを、十八歳位で卒業するだけである。しかし八年間の經濟になるから人生の活動が、それだけ延長される譯である。但し八年間の短縮をするには、仲々教育に骨が折れることは、早教育を施した人の經歷談を見ても明瞭である。故に、早教育は決して悪くはないが、よくその子供の體質・知能の發育状態を考へ、それに應ずる教育を十分になし得る知識と努力と餘裕とを有する教師や父母が無ければならぬ。

優良兒を生ずる原因は低能兒と同じく、九〇％は遺傳で、その残りが環境から來るとせられて居る。これを發見するのは、第七章に述べた知能検査法を用ふる。但し特殊能力を有するものには、それに應じた検査法を試みる。而してこれ等兒童の教育法としては、低能兒と同じく、特別の學級を設けてその驥才を延ばすやうにしなければならぬ。即ち普通兒の學科目よりも、深さに於ても、量に於ても多くしなければならぬ。近時この方面に着目するものが出來、獨逸ではシュテルンこれを主張し、米國ではターマンやホキップルこれを唱導し、ターマンは優良兒學級を實際に試みて居る。我國でも近來この方面に注意するに至つたのは賀すべきことである。

## 附 録

### 第一 子供の虚言

#### 動物の保護色

子供の虚言といふことに就てお話するが、此の嘘といふものは、廣い意味で言へば、一般に行はれて居るものである。例へば動物の保護色がそれである。兎は冬雪の降る間は、眞白の毛をして居るが、枯れ草の時分には灰色に變る。ばつたのやうなものでも草の色の青い間は矢張り青色を呈して居るが、草が枯れ掛けて來ると、枯れ草のやうな色に變る。これ等は凡て、天然自然の嘘である。即ち自然に身體の色を變へて、他のものに襲はれないやうにするのである。處が、高等の動物になると、一種の計畫をやつて嘘を吐く事がある。最もよく例に引かれるのは、狐であるが、狐が獵犬に逐馳けられて逃げて行く時には、足跡を暗まし匂を消す爲めに、水の中に飛



び込んで向ふ岸に渡るといふことである。それは單に狐ばかりでなく、其の他の動物でも矢張り自分を保護する爲めに、色々の事をやるのであるが、要するにこれ等は、各自に劣等なる所がある爲に、他から害を受ける。それに對して防ぐが爲めに嘘を吐き瞞すのである。故に、比較的力の弱いものに嘘が多い。これは動物許りでなく野蠻人を見ても矢張り其の通りである。

然らば子供では、どうであるかと言ふと、昔から「子供程正直なものはない」と言はれて居るかと思ふと「子供の言つた事に信用が出来るものか」といふやうな反對の事が言はれて居る。これは兩極端を現はして居るもので、洵に子供は、正直であるし、又信用の出来ない事もいふのである。

子供の嘘は、何時から表はれるかといふ事に就て、色々兒童心理學者によつて異なるが、其の中で一番早いのは、約一年半で現はれるといふ人がある。或は二年目に嘘をついたと報告し、或は四歳位でなければ、嘘は言はないと言つて居る人もある。勿論本當でない事をいふのは、大分早くからあるのであるが、實際、それが嘘であるかどうかと云ふ事は問題である。

完全に、自分の意思を發表する事が出来ない爲に嘘になつてしまふこともある。故に、意思の發表の十分に出来ない、正邪の判断の十分に出来ない場合に、それが嘘であるかどうかと云ふ事を區別するのは、非常に困難である。

### 虚言の種類

虚言には如何なる種類があるかといふに、第一は記憶の誤り、第二は眞の嘘、第三は病的の嘘である。勿論、これには劃然たる區別はない。只一と二とは自分の誤りを意識してゐるか否かで區別し、即ち第一のは自分の誤つた記憶から誤つた事を言ふので、第二のは自分の誤つて居る事を意識して言ふのである。第二と第三とは目的の有無で區別し、即ち前者は何か目的があつて、其の目的を達しようとする爲めに嘘をいふので、後者は、單に嘘其物を悦び、低能の爲めに正邪の判断が出来ないので嘘を言ふ。其の間に何等目的が無い。

### 記憶の誤り

記憶の誤りといふのは、心理學者が主として、言語の發表の方面から研究して居る。それに依

ると、非常に面白い現象が発見された。即ち供述の誤りはどういふ場合に起るかといふと、其の事に興味が無かつた爲めとか、或は不注意の爲めとか、一寸見せられた爲めに、十分其の物を見て觀察する餘裕が無くて、觀察が不完全であつたとか云ふ場合、或は長い時間を経た爲めに覚えて居た事を忘れてしまひ、其の缺陷を想像で塞ぐ場合等である。殊に子供は想像作用が発達して居るから、この種の誤りが甚だしい。又、子供は暗示性に富んで居るから「そんな事はあつたのでせうね」と強くいふと「さうです」、なかつたんでせうね「え」と、何れも肯定するのである。殊に其の人が先生とか、お父さんとかいふやうな、暗示力の強い者の言葉に對しては、暗示を受けて色々の返答をするのである。殊に肯定する言葉は、子供に就ては樂である。「いゝえ」と云ふよりも「え」といふ方が都合が宜いのである。殊に「さうでありませんですか」と言つても、「え」と「さうですか」と云つても「え」と肯定の間に對しても、否定の間に對しても、日本の言葉は兩方に使へる。其の爲めに尙更ら誤りが甚だしいのである。

次に、子供の發表の不完全といふ事に就て、佛蘭西のビネーと云ふ人が調べたことがある。そ

それは子供に一枚の紙を見せたのであるが、それは肖像とか、鉛とか、荷札とか、國會議事堂の寫眞と云ふやうなものを貼付して、それを子供に十秒間見せて、直ぐに片付けてしまつて、それから「今にはどんなものがありましたか」言つて御覽なさい」と尋ねた所が、それは九歳から十歳迄の子供であつたが、正答したのは、百分の五八・二、誤つた者、百分の四一・八で、約半分に近い程誤つて居る。處が「斯う云ふものはありませんでしたか」「肖像はありませんでしたか」と斯う聞くと、暗示を受けて、あつたやうな氣がするので「えゝありました」と返辭をする。其の代り又「ペン先は附いて居りませんでしたか」と言ふと、何だかあつたやうな氣がして、無くても「えゝありました」と答へてしまふのである。獨逸のステルンといふ人は、百姓のお父さんがあつて、其の傍のテーブルで、子供に食事をして居る、そして其の傍には犬が居るといふやうな繪を見せた後に、それに對して子供をして自發的に言はせた時には、誤りは百分の六であつたが、暗示的に問を發した所が、百分の二三の誤りをしたといふ事である。又コソグといふ人によると、八歳になる男の子が、二人で戯り合ひをして居り、其の傍に二人の子供が見て居つ

た。其の喧嘩が済んで後に、各人に就て訊問をしたが、何れも正確に答へた。それから三箇月経つてから、今度は一人の證人にそれを尋ねた所が、もう覺えて居ない許りでなく、乙なる人が甲を殴つたのを、まるで反對に、甲が乙を殴つたといふ風に答へて居る。處が、殴られた人に聞いた所が、ちゃんと正確に答へた。畢竟證人は、それだけ利害關係が少ないから、早く忘れてしまつたのである。四箇月経つてからもう一度四人を調べて見た所が、矢張り證人の方は忘れて居り、今度は殴つた方がよく覺えて居つたと云ふ事である。又、ある人は教場へ出る時に、ペン軸と、小刀と、白墨の片とを生徒の目に見える處へ置いて、さうして一時間済んでから、それを片附けてしまつて、休みの時間に、机の上にはどういふ物があつたかと云ふ事を尋ねた。處が、満足に答へた者は殆んど無い。大勢の中で、小刀があつたと答へた者がたつた二人であつた。それで小刀と白墨とペン軸のあつたことを説明して置き、その翌日何にも机の上に置かずして、二時間目に尋ねた所が、今度は小刀を見た者が二六%、白墨を見た者が五七%、ペン軸を見た者が六三%といふ風に暗示を受けた。

これは暗示性ばかりでなく、記憶の不足を想像作用で足すといふ事にも依るのである。又、子供には何でも大きいふ傾向がある。「僕は今猫のやうに大きい蝶々を見た」とか、又は「家のやうに大きい犬を見た」と云ふやうな、丸で雲を掴むやうな事を云ふものがある。それは觀察が不十分であると云ふばかりでなく、想像作用に基づく一種の誇大的の病氣に罹つて居るのである。遊びをして居る間にも、自分は天皇陛下になるとか、大將になるとか言つてゐると同じで、さういふ大きな事をいふのは、四五歳の時代に多いのである。十歳以上になつて、さういふ大きな事を言ふのは、一種の變質であるが、先づ三年から五年位までは、さういふ傾向がある。これは本當と嘘との區別が出来ない爲めに、起るのであるから、吾々はそれを以て、直ちに嘘といふ事は出来ない。

## 眞の虚言

眞の虚言にも、色々區別があるが、其の本當の嘘の現はれるのは、一年位の頃からであると云ふ人もあるが、私自身の觀察又他の人の觀察に依ると、それは四五歳以後でなければならぬと思

ふ。自分の言つた事に就て、本當か誤りかと云ふ區別が自身につかなければならぬ。そればかりでなく、嘘を云ふことは、悪い事であるといふ道德的觀念も、多少それに加はらなければ、本當の嘘とは言へないのである。故に、先づ四五歳位の子供でないと、嘘は無いかと思ふ、又中には本當の嘘であつても、大した影響の無い嘘と影響のある嘘とがある。第一は見榮を張る嘘、それは着物とか、食べ物とか云ふものについて、見榮を張つて、大きな嘘を吐くのである。八歳の子供がお友達に「お休中どちらへかいらつしつて」行かないと云ふと、自分も行かない癖に「洵にお氣の毒ね、私一ヶ月許り海岸に行きました」と云つたり、又八歳の女兒が「私は金の指環や帶止をどつさり買つて貰ひました。嘘だと思ふなら家へ見にいらいしやい」又外國の例であるが、僕は家に居る時には、一日に千弗使ふのだ」と云つた男兒が居たと云はれ、又十一歳になる女兒が、「私の家は臺所まで絨緞が敷き詰めてある」と云つたが、其の子供の家は客間ですら、何にも敷いて無かつたと云ふ例がある。

かやうに衣食住に就ての見榮を張るばかりでなく、又、自分の能力の見榮を張る。それは自分

が敗けるのが、口惜しい爲めで、一種の自己擴大といふべきである。七歳の子供が「梯子が無くても木に登れるよ」と云つた。それ等は、小さい子供の時代には罪はないのであるが、大きくなると面白くない。兎に角、自分の能力の見榮を張るといふ事が多いのであるが、それも六歳乃至七歳が終りで、それ以後のものは、病的の誇大妄想である。

それが雷に自分ばかりでなく、父母兄弟親類の財産能力の見榮を張ることもある。或學校で兒童の職業を調べた所が、或子供は「僕のお父さんは、何處そこの校長であります」と答へた。受持の先生が調べた所が、其の學校にそんな校長は居ない。能く／＼調べた所が、それは其の學校の小使であつた、と云ふ話である。又八歳の男の兒が「貴様は悪い事をする直ぐに交番に引つ張つて往くぞ、僕のお父さんは巡查だぞ。」と言つたと云ふことである。

其の他、時に依つては、子供が意地を張ることがある。側から色々な事を云はれて凹まされるのが嫌だから、つい嘘を言ふ。例へば他の者と喧嘩して「ヤイ泣虫野郎」と言ふやうな事を云はれると、「何んだ泣くもんか」などと言つて、それに對抗するのである。



それから又、不愉快の状態から免れる爲めに嘘を吐く。これは比較的罪のないのであるが、自分は嘘を吐くと言ふ事は悪い行爲だと云ふ事は知つて居つても、目前自分の苦しみを免れる爲めに嘘を吐くのである。自分が興に乗つて居る所を妨げられる爲めに、それを防がんとして嘘を吐くと云ふやうな事がある。例へば積木をして遊んで居る。其の時に、お父さんが「坊や散歩に往かう」と云はれると「僕草疲れてしまつた」と云ふやうな事を云ふ。處が「お祭を見に行かう」と云ふと、「それぢや僕も往かう」と云ふ事になる。自分の興味の向いて居る所に往きたいと云ふのであつて、一種の方便の嘘である。が、それはあまり大して悪いのではない。

外國の例で、子供に澤山箱を運ばして居つた。處が、未だ残つて居たのに、「もうありません」と言つた。これは、自分が疲れてしまつて、もうこれ以上運んで往く事が出来ないと言ふ事を、意味して居るのである。又、他の一人の子供は、米の御飯を食べる時には、いつでもお腹が痛くなる。これは一種の米に對する恐怖症を持つたのである。他の物を食べたのでは、腹も痛まないが、米の飯を食べて胃腸を壊したのが、原因となつて、「お腹が痛い」と言つて食べないといふ例

がある。これ等はあまり悪くはないが、段々進んで來ると、種々言ひ抜けを言つたり、悪い事をして、匿してしまふやうになつて來るので、その境界線をよく區別しなければならぬ。

子供は又能く人の物を見ると欲しがるものである。意思が強ければ、外界の誘惑にも抵抗するのであるが、子供にはそれが出來ないから、他人の持つて居る物を見ると欲しくなる。大人でもさう云ふ人があるが、子供に於ては殊に甚だしいのである。故に、子供の欲望に對しては、家庭では多少はそれを満たしてやらなければならぬ。さういふ場合には、「外の物をあげませう」とか何とか言つて玩具でも遣つて、欲望の轉換をやると云ふ事が必要である。それを其の儘にして置くと金をくすねて往つて、自分で欲望を満すと云ふ事になるのである。故に、家庭で餘りに嚴しい事を云ふのは却つて、嘘を言はせるやうなことになるので、餘り頭から嚴しく云ふと、子供は其の權幕に恐れて、匿したり嘘を云つたりすることになる。又反對に甘くしても宜しくない。「これは坊やぢやありませんね」と云つて甘く出られると、「私がやりました」と云ふては悪いと思つて匿してしまふ。さう云ふ點は特に注意しなければならぬ。

時に依つては、他人を不愉快の状態から救ふ爲めに嘘を云ふ、所謂義侠的に嘘を吐くと云ふ事がある。六七歳から八九歳の時分には、一種の英雄崇拜の時代がくる。其の時代には、何か友誼のした悪い事に就て、先生から訊ねられると、「誰さんではありません」と云ふやうな事を云ふ。斯う云ふのも或程度迄に留めて置かないと悪くなつてしまふ。

其の次には、中傷的の嘘がある。これは幼時にはないが、尋常一年生位になると、早や表はれてくる。社會が段々廣くなつて來ると、自分が他に卓越した地位を得たいと云ふのは、子供でも同じで、それで一番最初には、人のあらを捜す、それから今度は無い事があるやうに云ふ事が初まつてくる。フエリアニと云ふ人は、五百人の犯罪者の初歩を調べた所が、其の中の百九十五人迄は嫉妬・羨望の爲めに人を欺いたと云ふ事である。十歳の女の兒に「あの子は善い子だね」と云つた所が「あの方は學校で皆に嫌はれて居りますよ」と云つた。又「あの方は非常によく出来るね」と云つたら「あの方は始終隣の人のものを見て書いて居るのです」と云つた例を聞いた。

又、人を喜ばす爲めに嘘をいふ事がある。是は女の兒に多いのであるが、數へ年の六つ位の女の

兒でもさういふ嘘を云ふものがある。私が講演をして下りると「久保さんはお話がお上手ね」と云ふやうな事を云はれた。上手だか下手だか判断する能力は勿論ないのであるが、善悪の判断をして云つたのではなく、よく云へば私が喜ぶだらうと考へて云つたのである。これがもう一步進むと護ひになるから、注意しなければならぬ。

護ひと云ふ事は、多少大人からさせるやうに仕向ける事が多い。「お祖父さんとお祖母さんと、どつちが好きだい」と云ふやうな問を出す。子供はお祖父さんに抱かれて居る時には「お祖父さんの方が好きだ」と云ふが、お祖母さんに問はれた時には「お祖母さんの方が好きだ」と云ふ事になる。

お世辭の嘘と云ふやうな事も、社會状態を構成して居る以上は必要であるが、或一種の目的があつて、利益とか恩顧を受けるとかの爲めに云ふやうになると、矢張り中傷的の嘘と同じく宜しくない事になるのである。

次に、遊戯に於ける嘘がある。これは比較的罪のない嘘で、兵隊になるとか、大將になるとか、

又は先生ゴツコをやつたりする。或は玩具のお金を作つて、それで買物の眞似をするとか、電車  
の切符を作つて車掌の眞似をするとか、それ等は勿論罪のない事で、それは一種の想像作用に基  
いてやるのである。これと相似て居るものはお伽噺である。これを絶対に嫌ふ人は、あれは嘘を  
教へるものだと云つて排斥する。處が、お伽噺を作る側では嘘には嘘らしい嘘と、眞らしい嘘と  
ある。お伽噺を聴く者は、正邪の判断が付くから、お伽噺をした時には、嘘として考へてゐるか  
ら、差支ないと云つてゐる。これは何れも一理がある。要するに、それは程度問題で、子供心に  
嘘の行爲を教唆するやうなものはいふまでもなく宜しくないと思ふ。

又面白半分に云ふ嘘がある。他人をからかふといふのは人間の通有性であるが、これも程度問  
題で程度を越すと宜しくない。斯ういふ嘘を多くは大人から教へられる。「坊やこゝへお出で」子  
供がやつてくると、「遠方御苦勞様」と云つてたゞ返してしまふ。大きくなると、矢張り弟にやる  
と云ふ事になるのである。

最後に病的の嘘のことは後日に譲り、嘘も方便と云ふ事に就て一寸附言しよう。子供が御飯の

濟んでしまつた時分に、餘所の家から美味しい物を貰ふ。さうすると、子供は食べたがるが、食べさしては宜しくないから「これは皆腐つて居る」と云ふやうな事を云つて仕舞つてしまふ。それよりは何か他の物を代りに與へるのが宜しいのである。それでも中には一旦見た物は食べなければ承知しないと云ふやうな子供もあるから、斯ういふ事は自分一家だけではいけない。皆が注意して、さういふ時分には物をやらないやうな事にしなければならぬと思ふのである。

## 第二 子供の雑誌に就て

子供の雑誌ほど数の多いものは無からう。雑誌店に行つて見ると、赤・黄・青などの原色を使つて絢爛たる幾多の雑誌が店頭を飾つて居る。しかしこれ等の子供の雑誌を分類すると、先づ繪を主にしたものと、話を主にしたものとに大別が出来やう。繪を主にしたものは、少し以前には繪本とか、一枚づゝになつた石版刷のものが多く行はれて居た。一枚づゝの石版刷は今でも無いことはないが、日清戦争前後が全盛期で、原田重吉の玄武門破りの光景、豊島沖に於ける致遠の爆破などは、その當時の子供の血を湧かせたものと思はれる。その後石版刷の方は減少し、一方に色刷が發達して來た爲めに、従來の不定期の繪本が、月刊の繪雑誌に代つて來た。歐洲戰爭中が最も多くの種類が創刊されたやうである。月刊の繪雑誌に比べて見ると、以前の繪本は餘り教育的では無かつた。題材が低級であるか、又は時代物が多かつた。これに比べると、最近五六年の繪雑誌の進歩は實に目覺しいものと謂はなければならぬ。これは世人が幼兒の教育に注意し

又幼兒の心理を漸次理解するやうになつた結果である。學校系統に於ても、幼兒教育は最後に氣付かれたやうに、幼兒の玩具や雜誌の如きものも、亦最後に世の父母の注意を惹くやうになつたやうである。

### 近頃の傾向

處が、近頃發行される幾十種となき繪雜誌が果して幼兒教育上有益なものであらうか。よく世間では一と口に「子供の雜誌はよくない」とけなして仕舞ふ。しかしそれ程悪いものであるかどうかを吟味する必要がある。毎月發行する雜誌のことであるから、終始一貫して良いもの許りは無いかも知れないが、中には種々と苦心したのもあつて一概に悪いとは云へない。一時、ひらき繪、變り繪といふものが流行して、何れの雜誌にも行はれた。何れも子供の趣味に適した面白い趣向であるが、往々にして荒唐無稽な繪がある。殊に變り繪になると、論理的思想の發展といふ點から非難のあるものが多い。單に變化とか突飛とかに捉はれて、思想奔逸の方面を顧慮しない。この種の變り繪は近時その跡を絶つたが、角を矯めた點に於て、幸といふべきであるが、遂



に牛を殺した憾がある。

これと關聯して、活動繪と稱して事件の進行を連續的の繪で示すものが往々ある。これは繪ばなしの一變形であるが、私はこの繪ばなしは今少しく發展させたいと思ふ。よく附録として花咲爺やの話や、金太郎の話をつゞき繪にしてあるものがあるが、今少し、題材を變へたらば面白いものではないかと思ふ。三四年前幼年の友の増刊として、全紙一つの話が繪に表はされたものが出た。私は非常に面白い企てと思つたが、その永續しない所を見ると、題材の案出が困難な爲めであるか、或は餘り單調で變化に乏しく、子供に早く棄てられる爲めであるかであらうと思はれる。若しこの二つが原因であるとすれば、何れも編輯者の苦心次第では出来る譯である。子供は必ずしも盛り澤山の繪を喜ばない。雜誌の中一二ヶ所面白い所があれば満足するものである。幼児の心理を解した人は必らずやその要所を捕捉し得ると信ずる。

繪雜誌が月刊となつてから年中行事を取扱ふことが増加して來た。これは非常によいことである。しかし平凡な年中行事を表はして面白くないといふ爲めか、時々突飛なことを畫く、これ

は單調でも兒童生活の實寫でなければならぬと思ふ。實際、幼兒を觀察して見ると、彼等の生活の實寫であれば、大人の目には單調でも非常に共鳴するやうである。しかし兒童生活の實寫と云つても、子供の瞬間の興味をそゝらうとして、下等な滑稽味を帯びせたり、奇怪な事象を捉へたりするのは、大に禁すべきことである。

### 繪雜誌の附録

繪雜誌の今一つの特徴は附録で、これは編輯者の最も苦心する所ださうであるが、前に述べた繪附録の外に、手技的のものを附することである。茲に至つて、繪雜誌は雜誌であり、一の玩具になつてくる。これも近頃は餘まり流行しなくなつたが、若し好い材料があつたらば兎も角、無理に雜誌と玩具との二重の目的を一冊で充さうとしなくてもよいと思ふ。しかし現時の幼兒教育の上には今少しく切り抜き、嵌め繪、飛行機や自動車製作などに、手技の練習を必要とし、それ等の材料の少ない今日では、繪雜誌の附録としては良好なる材料を添附することは必要であるかも知れない。

最後に、繪雜誌に就て、何時も問題になるのは、彩色である。近頃發行されて居る「コードモノクニ」はこの點に注意して居るが、他の大多數の雜誌は餘り改良してない。幼兒が原色を使つたものを喜ぶのは事實であるが、不必要な色を塗るとか、悪い繪の具を用ふるのは勿論よくない。子供に授くるものは彼等の興味や知識の程度に應ずべきであるが、單に迎合だけでは尠しも子供の精神を向上せしめない。一步進んだ趣味の方に向けなければならぬ。かやうに云ふと、或は大入の世界は完全であると豫思し、子供をその方に強制するやうになると云ふものがあらう。吾人は大人の世界が必らずしも優秀のものとは思はない。しかし長い間の文化を繼承して居る世界は確かに素朴の子供の世界よりも、一步進んで居る。であるから、その進んだ世界を土臺として、更に一段の進歩をなすやうに子供を教育しなければならぬと思ふ。それには彼等の興味から離れず、しかも一步向上した所を示し、彼等をして不知不識の間に進歩せしむるやうにしなければならぬ。これが次の時代の人類を眞に愛する所以で、彼等の繪雜誌でも、次に述べんとする讀物でも、この眞の愛から生れて來たものでなければならぬと思ふ。

## 話を主とする雑誌

次に話を主とする雑誌であるが、子供の讀物の變遷は別に管々しく述べなくても、巖谷小波氏が三十年前にかかれた「こがね丸」と今日それを書き直された「こがね丸」とを比較した丈でも十分で、實に隔世の感がある。然らば茲に吾人の問題とすべきは、現時の子供は如何なる種類の雑誌を讀むかといふ事である。最近に京橋の小學校で讀物の調査をした結果によると、男兒には譚海が最も多く讀まれ、次は少年世界で、それからすつと下つて赤い鳥、金の船、日本少年、良友、海國少年等である。女兒になると、少女世界が群を抜いて多數で、次は少女の友、少女界、譚海といふ順になつて居る。金の船、赤い鳥、少女、小學女生、小學少女等が、その次に位して居る。而して學年からいふと、四學年頃より讀む者が増加し、五年六年が最も多い。讀む雑誌の種類と讀み手の増加は互に並行して増加して居る。

その結果によると、子供は一般に假作物語の多いものを喜ぶといつて差支ない。御伽噺よりも今少しく現實的な、子供の空想をそゝる記事が喜ばれるやうである。

近來、童話や童謡が流行して、斯の方面に一新生面を開いて來たが、前の調査から見ると、未だ一般の子供に受け容れられる程に進歩して居ない。一童話作者の話によると、子供心の忘れずに子供の心持に立ち歸つて「童話を書くといふことであるが、種々の經驗を積んだ大人が、子供時代の純眞率直な心持を、どの位維持することが出来るであらうか。假令維持しないでも、これを追想することが出来るであらうか。この點は童話作家の苦心の存する所であらうし、又新童話が一般の子供に十分受け容れないのもこの點に存して居るのであらう。

精神分析學者によると、吾人の夢は豊間實現されない諸種の欲求の満足をするもので、神話でも千古不磨の藝術的作品でも、凡てこの欲求の實現であるといふのは、大に味ふべき説であると思ふ。眞の子供の心持になつて童話を書くといふことは、彼等の説明慾なり、強大慾なり、自由慾なり、衣食に關する欲求なりを、十分に理解し、此の實現を計ることに存するやうである。ある童話作家が、「童話の世界に於てのみ子供と大人とが一つのものになり得る」といふのも、即ち欲求の實現といふ點が共通して居る。大人は子供よりも複雑な經驗の衣を着て居るが、その赤裸

裸の所には必らずや、一貫した欲求があるに相違ない。昔時より少しも飽かれないで、各年代の子供に讀まれるグリムの噺・アンデルセンの物語・さてはかち／＼山・桃太郎・浦島太郎のやうな話は、孰れも子供の欲求を十分に理解し、その實現純化を計つて居るやうに思はれる。

精神分析學者はよく欲求の昇華といふことを主張する。蓋し昇華作用といふのは、化學上の術語で、物質が固體より液體となることなく、直ちに氣體に變ずる作用をさすのであるが、吾人の有する幾多の素朴なる欲求は、或方法を以て昇華せしむる必要がある。若し昇華されないので、其のままに残ると、後の生活に種々の障害を起し、ヒステリー・神經衰弱・甚しきは精神の錯亂を來たす事がある。これに反して、指導宜しきを得ると、素朴なる本能は純化されて將來有爲の人物になる。例へば幼時自己の尿に興味を持つた子供が、水道開鑿の技師として獨特の技倆を發揮したとか、幼時サディズムの傾向ある子供が外科醫として成功したと云はれて居る。故に、作家は兒童の欲求の那邊にあるかを十分に理解するばかりでなく、その欲求を如何にして實現せしめ、純化せしめ得るかに注意し、既に繪雜誌の場合に述べた通りに、一步進んだ所、或は一段高い所

に着目して、其の方に子供が自づと歩いて行くやうに仕向けなければならぬと思ふ。

## 自由畫

終りに繪雜誌では無いが、近來子供の自由畫の發表が、單行本や少年雜誌に登載されてある。子供の個性を自由に發表せしむる點に於て、教育上大に推賞すべきである。唯往々にして兒童生活の純真を示さないものが多いのと、餘りに自由を誇張し過ぎて、思想を奔放して居るやうなものとの兩極端がある。しかしこれは發達の初期として己むを得ない事であるかも知れない。

最後に、多少功利的の言分ではあるが、世の父母たるものは、一方にかやうな童話作家が子供の純真なる心情を表はすに、如何なる方法を用ふるかに注意し、他方には子供が其の作家の苦心の跡をどの位に評價するかを調査する必要がある。蓋し子供の完全發達を計るには、子供の生活を、眞に理解しなければならぬ。その爲めには、子供に自由に雜誌を選択せしむることも時としては必要であり、又出來るだけ、各種の雜誌を通讀することも親として大切なことである。

## 第三 不良少年の心理

### 不良性は先天的か

不良少年として、新聞に紹介されて居る者の肖像を見たり、又不良児收容所などに行つて見たりすると、孰れも一種異様の容貌を有して居るやうに思へる。「これは不良児だ」といふ豫備觀念を以て見るので、さう見えるかも知れないが、兎に角、普通の人と異つた者が多いやうである。頭が大へん小さいとか、頭の格好が平均を缺いて居るとか、眼玉が底光りがするとか、頬骨が高く、顎が角ばつて居るとか、獅子鼻で耳朶が變形であるとか、頭髮も赤毛で、ちどれて居るとか等、それぐ特徴を持つて居るのが多い。かやうな形質は常に不良行爲をして居るので生じたとも思へない。やはり先天的のもので、ロンブローゾの所謂犯人型を有して居るやうに思へるが、翻つて正常児の多く集まつて居る所に行くと、可なり不良型を有して居るものを見受けるが、それ等は必ずしも不良少年でないのである。



精神的方面でも、不良少年は早熟だとか、色慾が異常に發達して居るとか、虚榮心殊に口體に就て見榮を張る心が強いとか、情に激し易く、意志力の弱いとか、種々とその特徴を列擧するところが出来るが、さて正常の少年の中にも程度こそ異なれ、可なり此の種の者が多い。單に少年許りでなく、成人にも中々不良大人が居て、しかも犯罪者となることなく、自分も許し、人も許して居る者が、幾人もある。試みに讀者自身、胸に手を當て、自分の心的經過を省みて見られると、最もよくこの事實が理解されると思ふ。綺麗な異性の通過するのを見て、氣を牽かれぬものもなく、堆く積んである紙幣の山を見て羨ましく思はないものは殆んど無からう。唯それが心の中に浮んだだけで、その目的物を獲得しようとする行動に移らないまでもある。尤もそれには程度があつて、これ等の欲望は起つても、極限時にして消失するものもあらうし、中には冷靜な理性の判斷の下に強力なる意志を喚起して、これを抑壓する者もあらう。かやうに考へて見ると、不良少年といつて特に普通の少年と異つた先天的特質を有して居るとは思はれない。不良少年爲は何れの少年にも共通の先天的性質であつて、只それが時と場合によりて、異常に強く働いた

と見るべきである。換言すれば、質には別に變りはないが、量に於て相違するやうに思へる。尤も量に於て相違を來たすやうに生れついて來たといへば、それが先天的のやうに思へるが、この量の相違を來たす所以は、單に親譲りの神經素質にのみ歸すべきでなく、後天的の影響が極めて大であるやうである。

### 勢力の昇華作用

蓋し吾人が善行爲と云ひ、惡行爲と云ふものは、その結果に至つては、雲泥霄壤の差があるがその本源に至つては、同一では無からうか。恰も白と黒と云へば、兩極端の光度で、互に相容れないものであるが、その兩者の出發點は同一光度より起つて居るやうなものでは無からうか。吾人の精神活動殊に情意の方面から、精査して見ると、憤怒と恐怖、愛情と憎惡、興奮と沈靜、快活と憂鬱、秘密と告白、進取と退嬰等と幾多の矛盾する活動があるが、これ等の一方は他方を全然排除するものでなく、寧ろ兩者はその根柢を同一にして、時と場合によりて、一方より他方に移行し、所謂精神上の兩極的生活をして居るやうである。それで勢力の轉換とか、昇華と

かを、主張する一派が近頃現はれて來た。即ち子供が元々自發的に行ふ活動や興味は、教育の目的として居る所と全然その方向を異にして居る。教育の目的を達しようと思へば、それを他のものと入れ換へなければならぬ。しかし入れ換へと云つても舊い自發的の興味を排除して、全然新しい教育的興味を持つて來るといふ意味でなく、只その勢力の方向を轉換せしむるのであると。

例へば茲に一人の子供があつて、幼少時殘忍性戀愛の傾向を有して居たとすると、勢力轉換の方法如何によりては、屠殺者として成功するか、或は外科醫として名を擧げるか、或は色情性殺人犯として、刑餘の人となるかであらう。又、幼時自己廣告的又は陰部露出病的の傾向を有したものは、長じて後俳優となり、競り屋となり、又は演説家として成功し、或は新聞紙の一頁に假令惡名にても記されんことを希望する犯人となるであらう。或は幼時排尿といふ事に非常に興味を持つて居たが、少し成長すると、流水や水溜りを弄ぶことに、殆んど狂的の嗜好を現はし、今日では有名なる工學者となり、多數の運河や橋梁を作つた者もある。又幼時主として排便作用に興味をもつて居たものが、昇華作用によつて種々の競技に耽つて居たが、後一人は建築家とな

り、一人は彫刻家となり、一人は活字鑄造家になつた。又一人は固形物もこれを熱すれば、型に嵌め易くなり、弄ぶにも都合よくなることを知つて、料理を好むやうになり、遂に料理長になつたといふ事である。かやうに考へてくると、子供に自發的に現はれて來る活動や興味などに就て、もつと深く立ち入つた研究をし、又その勢力が環境によりて、如何に變化して行くかを調査する必要がある。それで以下に於て善良なる少年と不良なる少年を生ずべき分岐點に就て少しく列擧して見よう。

### 社會的條件の變化

同一の行爲でも、時と場所との相違、即ち社會的事情の相違によりて、罪になつたり、罪にならなかつたりする。自分の家で毬投げをして窓をこはしても、又自分の家の前で遊んで居ても、別に咎は無いが、他人の窓をこはしたり、往來で遊んで居ると咎を被るのである。又田舎の子供は野原へ出て、自由に風を揚げて遊ぶことが出来るが、都會の子供は電線の爲めに風揚げを禁ぜられる。即ちこれ等は個人の行爲その者には何等の變化はないが、對他的になつて初めて、善と

か悪とかの意味がついてくる。人口が稠密してくるに従つて、この種の犯罪が多くなるのは理の當然である。子供は一般に自己中心で、對他の事には無頓着である。只彼等は年長者の禁止命令によりて、自他の區別をつけて行爲するに過ぎない。處が、不良兒に於ては、この區別をするだけの知識や思慮の缺けたものが多い。フィラデルフィヤ市に八歳の少女が嘗て放火をした。その原因はと調べて見ると、消防自動車の威勢のいゝのを見たい爲めであつたといふことである。先年東京府下に十五歳になる少女が主家に放火したことがあるが、それは二ヶ月許り以前に失火があつて、主人始め雇人等が狼狽したことが非常に面白くて、それを今一度見たさに主家の納屋に放火をしたといふことである。

子供には種々の本能がある。悪戯・鬭争・亂暴・爭論・放浪等數へて來れば澤山あるが、これ等の本能は徒に抑壓すべきものでなく、これを利用して、遊戯に競技に將た遠足等に本能の淨化をしなければならぬ。處が、都會生活になると、その淨化が旨く行かない。殊に東京や大阪のやうに兒童専用の遊園地の少い所では、尙更然りである。即ち活動の範圍を制限し、剩へ校外

兒童取締規則などを設けて、網を張つて居る。それで彼等の活動は内部的になつて、ベイ、メンコのやうな勝負事や活動寫真に走るか、或は規則を犯しながらも、道路や公園で種々の惡戯を働くやうになる。この消極的制限の爲めに、毎日都會の子供がどれだけ、其の本能活動の満足なる發達を阻害されて居るかは、實に想像に餘りあることである。人口が稠密になればなる程、不良少年が増加するのは、他に幾分の誘因はあるが、この本能の無謀なる抑止が最も與つて力があると、私は思ふのである。近時米國勞働局の兒童課では、遊園地に關する最低標準を作つて、これを各大都市に行はしめんと計畫して居ることは、實に宜なりといふべきである。

## 家庭の狀況

不良兒は前に述べた通りに、特殊の本性を有するものでないから、兩親が揃つて居て、しかもそれが相當の教育あるものであれば、その家庭から不良少年の出る筈はないのである。一昨年大阪區裁判所の手にかゝつた不良少年の家庭の調査によると、兩親の無い者が一六・六%、父だけあるものが九・四%、母だけある者が一九・二%、兩親の揃つたものは四九・五%であつたといふこ

とであるが、異常の家庭の者が約半數以上を占めて居ることが分る。セントルイ市の調査も略ぼ同様で、異常家庭が五二あつたと報告されて居る。

又両親は揃つて居ても、無教育で、子供を如何に訓育するかを、知らない家庭に不良少年の出るのは、當然のことである。米國中央政府で調査した不良男兒の父親の職業別によると、労働者が五六・七%を占めて居るし、不良女兒の父親の職業中労働者が六三・二%を占めて居る。しかし中には教育ある両親を有しながら、不良性を帯びた者が表はれることがある。先年某博士の末子が出奔して、度々警察の厄介になつたことがあり、又某教授の子息が藝妓と心中を企てたことがあつた。前者は父親が餘りに嚴格に過ぎた爲めだと云はれて居る。後者は恐らく家名を恐れて賤業婦との結婚を許さなかつたことが原因であらう。子供には相當の欲望がある。それ等を満足せしめないで、大人の考を以て抑壓すると家庭に對する興味を失つて仕舞ふ。浮浪性は人類の本能であることは、誰れも知つて居る。しかし家庭が唯一の楽しい所であれば、何を求めて浮浪する者があらうか。又浮浪の本能は必らずしも浮浪少年にならなくても、遠足に、旅行に十分その満

足を興へることが出来る。これ等の満足が家庭の嚴格とか、貧困の爲めとかに十分發露されない  
と、即ち浮浪少年になるのである。

讀者試みに、不良少年の收容所を訪れて、親は有難いものか否かの質問を試みられたらば、その答の意外なるに驚かれるであらう。勿論監督者の面前では彼等は眞實を吐露しないが、彼等の赤裸々の告白をきくと、恐らく親の眞の愛を感じて居るものは、一人も無からうと思ふ。現時感化院でカツテーヂシステムを用ゐて、監督者が彼等の両親の如き地位にあつて、彼等を慈育し、所謂家庭の眞味を覚えさせることが、最良の感化法であるとされて居ることは、即ち這般の事實を最も明かに示して居ると云ふべきである。

### 環境と友達

子供に暗示感受性と模倣性が強いことは、已に知れ渡つたことである。サボルといふ言葉が出る時、小學兒童までがこれを使用する。子供は殊に好奇心に富むから、何か新しいことを見たり聞いたりすると、直ちに自身でこれを行ふ傾向がある。黒手組の活動寫真を見ると、その



變化多き所業が、彼等の本能をそとつて、遂にこれを自分で演じて見たくなる。大戦中獨逸の子供の不良行爲を列舉した書を見ると、子供は明かにその時代の風俗を反映して居るやうである。一例を挙げると、カフエーの所で何の原因もないのに亂暴を働き、器物を壊し、「戰場はみんなこれだ」と豪語する一群の少年團體があつたと云はれ、又伯林に於ける十五歳の一少年は平素海軍が好きであつたが、戦争の勃發と同時に義勇兵を志願した。しかしそれだけでは満足が出来ず、海軍電信技手となる教育を受ける必要があると云つて、度々家出をし、學校を缺席した。彼はその技術の練習をしたと吹聴はするが、實際は何にもしないのである。冬休に際して、彼はその友達に自分は今度海軍に入つたと云ひふらし、或日水兵服を着て、腕に繃帯をし、胸に鐵十字章をさげて來た。そして彼はヘリゴランドの大海戦に参加して左胸の處に負傷したと述べ、歸休證明書、旅行證明書など、全部印章まで揃つたものを示して歩いて居た。しかしこれ等は全く虚言であることが知れ、二ヶ月の監禁を食つたと云ふことである。

個人々々ではさまざまで著しいことをしないが、團體になると、往々破天荒なことをする。これは

人類一般の通有性で、一國の選良の集りと云はれる衆議院でも、この現象が現はれ、又よく新聞紙の種類になる社會主義同盟とか、赤瀾會とか、その他労働團體の會合の如きも、亦群衆心理の研究に絶好の材料を提供して居る。吾人は何故に個人の時と集團の時と、その心の活動に相違を來たすのであらうか。中には模倣性の爲めに無意識に先達の行爲に従ふものもあらう。しかしこの模倣性だけでは十分に説明が出来ない場合がある。恐らくそれは個人では無力であるが、團體になると強味を増すのであらう。而してその強味を増すといふことが吾人をして放縱ならしめ、各種の原始的行爲に陥らしむるのではあるまいか。過般大阪で女學校の生徒を絞殺した不良少年も四人組である。彼等の中一人が若し途中で女學生に逢つたとすれば、恐らく殺す程には至らなかつたに相違ない。強迫・掻浚ひ・亂暴・喧嘩等の日々に表はるゝ犯行の多くは、團體的精神に左右された結果である。

### 精神的軋轢

不良少年の犯行を調べて見ると、竊盜・横領・詐偽のやうな金品の欲求に基づくものが最も多

い。而してその金品の要求は衣食の美を欲求するのと、色欲の爲めに起るものとが多數である。衣食と性に關する欲求は悟道の人にあらざる限り、その程度こそ異れ、如何なる成人にも通有するものである。不良少年は只これ等の欲求の跳梁に委せて、少しもこれを抑壓する氣力の無い者である。勿論、これ等の欲求は本能的であるから、往々發作的に激發し、凡ての精神界を燒盡して仕舞つて、少しも反省する餘裕を與へない。放火犯として時々檢舉される少女には、この型に屬する者が多い。歸宅したいが一心に、主家を燒拂へば實家に歸へることが出来る爲めに、放火した少女や、或は情夫と密會する機會を得んが爲めに、或は情夫に金品を送らん目的に竊盜せん爲めに、又は竊盜した犯行を蔽はん爲めに放火した少女がある。これ等は凡て本能的欲求の強烈の爲めに、殆んど盲目的に犯行を取へてしたに相違ない。

過般本郷に高師の學生を殺した少年があつた。その殺意を調べると、別に深い原因が無いらしい。大道狹しと三人の學生が通り掛つたのに、衝き當つた迄である。それがグツと癪にさはり、手にした短刀で刺したやうで、別に前から遺恨があつたやうでもない。かやうに何事にせよ、發

作的に激情を發するのは、不良少年に於ける通有性の一である。而して犯行の後、これを尋ねると「つひやつて仕まつたんです」「今は後悔して居ります」とか答へ、中には「どうしてそんなことをしたかその時は夢中でした」といふものが多い。かやうに自分の氣附かない、或はその行爲をしなければ何となしに落着いて居られないといふやうな、内面からの強迫的動機によつて、不良行爲をする者に對して、或學者は精神的軋轢から來るのであると説明する。今一例を擧げて見よう。

十歳になる女兒が居たが、極めて温順で伶俐であつた。しかし盜癖があつて、學校ではお友達品の物を盗み、隣家からは金錢や寶石を盗み出した。盗んだことを聞かれる時の外は、少しも虚言をつく事なく、極めて快活で温味のある少女であつた。それでその少女の精神狀態を分析して見た處が、淫猥な言葉が常に彼女の心を支配して居たのが發見された。彼女に尋ねると「その事が屢々私の心中に浮び出て、殊に學校などでは、その爲めに頭痛を催すやうになる。それから後は頭が混雜するやうになり、何をして居るか分らなくなつて、時々人の物を盗んで仕舞ひます」と答へた。それでよくその子の經歷を調べて見た處が、二三年前田舎に住んで居た時、一人の男

兒と遊び友達になつて、その子が彼女に盗むことを教へ、且つ性に關することを教へた。その後淫猥なことが彼女の念頭を去らず、その軋轢を除去する手段として、竊盜をするやうになつたのである。それで両親に注意して出来るだけ新しい興味に彼女を向けしめるやうに努めた處が、六年後の今日は全く盜癖が矯正されたといふことである。この他虚言・詐偽・手淫・彷徨・浮浪・怠惰・暴行等の各種の不良行爲も、その原因や條件を精査して見ると、この精神的軋轢から來て、その苦悶を脱する一の方便として、それ等の犯行をして居る例が澤山ある。

この他不良に導く條件としては、兒童の勞働、その爲めに金錢の使用が自由であること、精神の低格、即ち智能の缺如の爲めに、十分に善惡の判斷が出來ないといふやうなことがある。孰れにしても、不良少年なるものは、前にも述べた通り、世人一般の人々の有しない本能や欲求を有するものでなく、只それ等が、何等かの事情によつて異常に激發したに過ぎない。それで教育者や父兄は、よくその子供の心的傾向を精査して、それ等の本能や欲求を昇華し、轉換する方法を講ずる必要がある。

## 第四 兒童の職業選擇に就て

### 精神分析的研究所

人生に於て、最も大切な選擇は、結婚の場合と、職業を選擇する際のそれである。最も賢い職業の選擇をなし、それに全生涯を没入し、其の方面に十分なる能率を發揮し得るやうにすることは、青年並に公衆に對し、最も重大なる事項である。若し自己の才能の那邊にあるかを辨へず、又社會が如何なる人物を要求するかを知らずして、漫然或職業に従事する時は、直に社會生活の車輪に粉碎されるやうになる。最初選んだ職業が失敗に歸して、他の職業に移り、成功するに至る者も無いでは無いが、それ等は偶發事項たるに過ぎない。職業の選擇を誤つて、實に氣の毒な最後を遂ぐるに至つた者が、醫者側の研究から明かになり、殊に職業と神經に關する病氣との關係に就ては、種々の神經學者が例を擧げて説明し、各人が職業を選擇する前にその體質に大に注意しなければならぬことを警戒して居る。

職業選擇に關する問題は單に醫學者ばかりでなく、教育者・心理學者・社會の福祉を計る人々の間に、注意を喚起し、現今では教育上最も重大なる問題の一となり、この種々の研究が盛になり、著作物も續々現はれて來た。而して彼等の間に一致する見解は、職業を最も賢く選擇する第一歩は、自己の研究、換言すれば自己そのもの、才幹・體質・興味・欲望・弱點・既得の知識等に就て、十分に理解することである。第二は職業そのものに就ての知識即ち職業の性質・職業の將來等に就ての知識である。それが自己に就ての知識に乏しく、又職業に關する知識に缺けて居る青年には、是非相談役が必要である。だから、米國ボストン市の如きは、各種の職業學校には一名又は數名の相談役が居て、入學兒童の心身の能力及びその家庭の事情を斟酌して將來その者に取りて、有益なる職業を選擇して呉れる。若しその子の興味が那邊にあるか分らない間は、例へば一箇月か二箇月の間は、種々の科の方に廻はし、その中でその子に最も適當と思はるゝ料に籍を置かせるやうになる。小學校でも、上級では實業科を置いて、卒業後直に實業に就くものを收容し、その選擇科目も、生徒の父兄と相談して、その校長又は特別の係りの人が決定して呉

れる。この傾向は歐米の都市で、漸次その勢を増して來て居る。

かやうな相談に與かる人は勿論、父兄たるものは、一方に社會の大勢を知ると同時に、他方には兒童の精神は如何なるものであるかに就て、詳細なる知識が必要である。殊にこれ等の兒童は將來の計畫に就て、合理的の知識を有するや否や、如何なる職業が最も彼等の興味を惹くか、職業に對する理想は年齢の増加と共に、如何に變化するか、それ等の興味又は變化の間に何等かの共通の傾向があるか否か等は、一に兒童心理研究者の言に耳を傾くる必要がある。かやうにして職業選擇の問題は如上の相談役や父兄のみの取扱ふべきものでなく、兒童の個性を研究する専門家の問題となつて居た。しかしその研究は未だに幼稚にして、十分に實際的要求に應ずることが出来ないが、近頃になつて大分珍らしい研究の結果が發表されて來た。例へばアドラ一派の研究や、フロイド一派の研究の如きは吾人の參考となる點が決して尠くない。

これ等の研究者は、種々の人が、それ々の職業に従事するに至つたその動機は如何なるものであるか、假令、その動機は本人にも亦他人にも殆んど氣付かれないで居るが、潜在的に大に勢力



を揮つては居ないかといふ點に於て、面白い研究を試みた。例へばアドラ一派の人々の主張によると、人が自己の職務に満足して、忠實に働いて居るのは、その職務がその人の身體又は精神に於ける意識的又無意識的缺陷を填補するに足るものである。例へば身體が悪いか或は不具である者が、僧侶や醫者となり、又は慈善事業に従事するやうになる。又残忍性を帯びた者が、外科醫となつたり、軍人となつたりする。外界の事情はその職業選擇に影響を及ぼすことは大であるが、その中心を貫く動機は不動で、只その表はれる形式が異なる許りであると云ふのである。

次のフロイドの一派も一の動機が終生貫いて居るといふ考は、大に右と似た所がある。但しその動機が性に關係して居るとする點が異つて居る。下等な性的傾向が漸次純化されて、種々の形式を以て表はれて來る。ジョーンズ氏の一患者は幼少の時尿に興味を待ち、その流れ方や、流れる力等に興味を持つて居たが、少しく大きくなつてから、水溜りや、樋の水をいぢつて遊ぶことが大好きであつた。その者は大人となつて、土木師となり、橋や暗渠を數度造つた。幼少の際特に糞に興味を持つた患者の中で、後に泥土細工が好きになり、遂には一人は彫刻師、一人は鑄型

師、一人は美術家となつたといふことである。

ステツケルはその蒐集した實例から、尙詳細に職業選擇の種類を分類して、五つとして居る。即ち(一)父と同一の職業を選ぶ者。例へば醫師の子が、その父を愛敬して居る所から醫師となつて居る。(二)父と全く異なる職業を選ぶ者。例へば父の物質的職業なるに反し、理想的職業に従事する。商人・職工の子供が詩人・畫工・又は哲學者となつて居る。(三)性的又は犯罪的傾向の純化に基づく者。例へば血を見ることを喜ぶ傾向の者が外科醫となつて、其の残忍性を醫するものがある。(四)無意識的衝動によるもの。例へば足に對して興味を有して居たものが、靴屋となつて居る。(五)自己の缺陷を填補するやうな職業を選ぶもの。例へば犯罪的傾向のあるものが、自己の道德的素質の缺陷を補償する爲めに裁判官となり、學校の先生になつた者があると述べて居る。ステツケルの考は、前記のアドラ並にフロイドの考を折衷したやうであるが、斯様に一々の動機を列擧して來ると、吾人は到底前記の五種類に包容しきれない觀がする。何となれば、この五種の外、尙幾多の衝動や動機が吾人の精神生活を支配し、吾人の職業選擇に影響を及ぼして居

るやうである。吾人は今暫く抽象的の議論を後廻しとして、實際、兒童は如何なる職業に興味を有して居るかに就て、從來質問法によりて得られた結果の概要を述べよう。

### 職業選擇に關する統計的研究

「大きくなつたら何になりたいか」と生徒に尋ね、「どうしてそのものになりたいか」を尋ねた結果を統計的に表はした研究が、私の知つて居る範圍では、米國に五つ程ある。この種の研究法に就ては、種々と議論のある所であるが、少くとも、その當時兒童の精神の表面にその種の職業に對する興味があつたことは明かである。

今この統計的結果の概要を述べると、女兒に對しては、先生といふ職業が、尤も好きなやうである。而も五人の研究中でこの點だけは例外がない。而して最も高い割合はマサチューセツ州に於ける女兒の百人中四十三人のそれで、最も低い割合が、ミルウオキー市に於ける女兒の百人中三十二人のそれである。而してこれを年齢別にすると、大抵十四歳以上になると、教員希望者は減少し、十六歳以上になると、殆んど無い位になる。而して希望者の最も多いのは九歳乃至十歳頃

で、甚しきは生徒の七〇%が教員たらんと希望して居る。

これに反して、男兒になると、先生の志望者が非常に少ない。例へば先生の希望を最も多くする時期たる九歳乃至十歳の男兒でも約一〇%位である。しかし工業や商業に従事したいと希望する者が男兒に最も多い。機械又は土木工事に従業したいと云ふ兒童も少くない。が、この種の傾向は、年長の子供となるに従つて増加して行く。

次に女兒に於ては、速記・簿記・タイプライター等の業務を志望するものが、先生を志望する者の數の次位に来る。衣服や小細工物又は帽子の飾物を製造する業務に従事せんとするものも大分ある。しかし家政を司らうとする女生徒が、何れの研究者の答案中にも、非常に少いか、又は全く無い。是れ恐らく、家政向の事は常に内に許り居て變化に乏しく、收入とても餘り多くないからであらうといふことは、研究者の一致した説明である。

### 職業の選擇を規定する條件

環境が兒童の精神發達に影響することは勿論のことで、職業選擇にも四圍の事情殊に父母の職

業、教師及び學校の教科書及び生育する社會の事情等によりて、大に左右される。

(イ)兩親・親族・朋友等の影響。兒童が兩親の職業を繼承する希望を有するのは、九歳より十三歳までに多く、以後は其の數が減少してくる。而して男子が父の職業を選む割合は、女兒が母の職業を繼承する割合よりも多いことは云ふまでもない。

父親の職業を選択する割合が田舎の子供と都會の子供とによりて、多少相違する。田舎の子供は土地の風俗が保守的で、且つ父親の職業の何物たるかを知り、又職業の種類も少ないから父親と同一の職業に従事しようとするものが多い。これに反して都會の子供になると、父親の職業の何たるかを明瞭に知らないものか、假令知つて居ても他に種々の面白さうな職業があるので、従つて父親の職業に従事しようと望むものが少ないと云はれて居る。この父親の職業を選むことが、漸次減少してくる理由に就てクラメールは面白い解釋を下して居る。氏曰く、大人が街道を横ぎる時非常に注意を拂つて、車馬に轢き殺されないやうにする。これに反して、馭者や運轉手はこれにお構ひなく、叱聲を發して意氣揚々として、車馬を驅つて行く。それで子供の中には馭者や

運轉手が非常にえらく見え、如何にも父親が見すばらしく見えるので、馭者や運轉手の希望者となる。これと同じく教會や學校の小使の子供は、その牧師や先生が非常にえらく見え、牧師又は先生たらんことを望み、下給の官吏の子供が裁判官や知事たらんことを希望する。かやうに父の賤しい職業を光彩あるものにしようとする。換言すれば、アドラが主張する如く、自己の缺陷を填補し向上しようとして、子供の時から努力するのである。

この種の傾向は階級の差が烈しい國には、殊に多いやうである。即ち前記のクライメルの研究は獨逸人種の子供に就て行はれた。私が嘗て田舎の中學で、この種の傾向を調査したことがあるが、父の職業を繼承しようと云ふものは非常に尠く百人中三四人に過ぎない。且つ其の土地の先輩には軍人と政治家とが多いが、その學生の過半数以上が軍人又は政治家志望である。而してその父兄の職業を尋ねると農夫、又は商人が多く、貧乏の舊士族が少々交つて居る。處が、東京の或中學殊にその父兄の良い兒童の希望を調べた所が、約四〇％は父と同一の職業を選び、異つた職業を選んだ者の理由を尋ねると、父の職業の仲々骨が折れる割合に結果の擧らぬ事を、

知悉した結果である。

次に職業の選擇が往々朋友又は知人によりて左右されることがある。デービスは五百三十一人の中學生の中三十三人は友人の勧誘によりて、或職業を選定し、五十九人は親族及び朋友の職業が面白相に見えて、それを選定したことを發見した。この親族又は朋友の影響は比較的上級の生徒に多く、殊に其の朋友が自己よりも年長であるか、知識が優れて居れば居る程、その影響が大であるやうである。私と共にクラーク大學で勉強した米人で、哲學の講師をして居る人の話によると、同人がまだ十八歳頃宗教上の疑問に陥つて居た際、哲學に非常に興味を有して居た人と知己になり、遂に其の感化によりて、従來の目的たりし法律研究を廢して哲學を研究するやうになり、遂に今日に至つたと語つた。

(ロ)先生並に讀物の影響。先生の影響は實に偉大なもので、殊に學校に入學したその頃は、實に先生ほど偉い者は世界に無い位である。それでこの時代の生徒の多くは、大きくなつたら先生になるといふものが多くある。その傾向の最も烈しいのは、前記の統計によると九歳乃至十歳で、

殊に女兒に於ては學校を出るまで、先生を志望するものが多い。是れ、歐米各國では女教師が大多數を占め、小學校では校長始め女で、男教員は一名も居ない位であるから、女教師の女生徒に對する影響は莫大なもので、女生徒の目から見ると、これ程權力ある、學識ある且つ裕福なる職業は無いと考へ、自分も先生にならうと希望するのは無理ないことである。

次に讀物が兒童の職業選擇に影響することが多い。子供に何か物語をすると、子供は直にその主人公であるやうに想像する。この想像作用は極幼少の頃から現はれるもので、私の満三歳の男の子に繪雜誌を見せると、すぐ僕はどこに居るかと思ね、又綺麗ななりをして居る男の子を見ると、すぐこれは僕だと云ひ、その繪の話をするにも、僕といふ言葉を入れないと怒るといふ位である。物語の主人公に自分になるといふことは、兒童の教養上實に必要な手がかりとなるもので、従つて他方にはこの想像作用の爲めに、却つて害毒を及ぼすことが往々ある。即ちいたづら小僧の日記や、繪本又は活動寫眞を見て、直ちに其の主人公通りのことを演じて見るといふことは、吾人が屢々見聞する所である。これ兒童は知識が低く、理性が弱く、従つて邪をさけ、正に



つきの行動に乏しく、徒らに烈しい想像力の奴隷となるからである。かやうに想像作用の烈しい時代に暗示力の強い教師から、偉人傑士の話を聞くと、直ちにそれが、彼等兒童の理想となる。ピスマーク、ワシントン、ネルソン等が歐米男兒の理想となり、ビクトリア、ナイチンゲール等が歐米女兒の理想となり、楠正成、二宮尊徳、東郷大將等が日本男兒の理想となり、小國旗の主人公や井上でん女等が模範となつたりする。勿論かやうな理想は一時的で、漸次現實社會の狀態が分るやうになつて、種々と變化し希望も空想的より實際的に移つて行くのであるが、この時代に深く腦裡に浸込んだ印象は、假令その表現の形式は異つても、不變的に其の根葉に横はつて居ることが、多くの偉人傑士の傳記によりて證明されて居る。従つて適當の時に適當の讀物を兒童に供給することは、只に教師のみならず、常に監督の任に當つて居る父兄の注意すべき所である。獨逸では早くから一の會があつて、兒童向の印刷物を調査し、その良否を父兄又は教師に知らせる機關がある。米國でもこれに倣つて、圖書館の兒童係のものが、教師又は有識者と計つて、その讀物を推選し、それ等を兒童に讀ませるやうにして居る。目下大都市に於て兒童の遊園地計

畫が唱導され、兒童の身體の完全發育を増進する點に大に注意するに至りたるが如く、如上の圖書館の計畫は兒童の精神の完全發達を期する點に大に裨益あるものである。

(八)社會の狀況 兒童の生活する社會の相違が、彼等の職業選擇に相違を來す事も亦勿論である。前に一寸述べたる如く、田舎の子供と、都會の子供との選擇の標準が相違するばかりでなく、同じ都會でも、貴族又は富貴の子弟の多い學校と、貧民の子弟の多い學校との間には、その相違が非常なものである。パインズが倫敦に於て、工場の澤山ある貧民の多い町にある小學校の生徒と、學識ある家庭に教育されて居る兒童との將來の職業に對する希望を調査して、兩者の比較を取つて居る。その中から興味ある例を擧げると次の如くである。

前者に屬する兒童の答案

男兒、十一歳、學校を卒へたら兵士にならうと思ひます。その理由は、私の伯父さんが其の一人ですから。

男兒、八歳、大工になりたいと思ひます。お母さんが大工になれと云ひますから。

男兒、九歳、桶屋かづやになりたいと思ひます。樽たるを作ることが好きですから。

女兒、十二歳、女中に行きたいと思ひます。家で働くはたことが好きですから。

女兒、十二歳、何處どこかへ働きに出かけようと思ひます。自分自分だけで生活が出来るやうにならなければなりませんから。

後者に屬する兒童の答案

男兒、八歳、私は市長市長になりたい。

男兒、十歳、私は軍人軍人になりたい。

女兒、十歳、ピアノの先生先生になりたい。綺麗な曲きれいなうたを奏奏することが出来ますから。

女兒、十三歳、私は博物家博物家になつて諸方しよほうの國々くに々を旅行りょこうしたいと思ひます。

### 職業選擇の動機

兒童が何故たゆまに或種の職業を希望するかに至つた動機どうきを知ることがは非常に大切なことであるが、これを知るにはその兒童に關する完全なる個別的觀察こどごたぎくわんさつに基づかねばならぬ。

従つて非常に困難で、かの「何故にその職業を選んだか」と通り一遍の質問では十分に其の真相が分かるものでない。殊に幼少の児童になると、單に「好きだから」と答ふる許りで、それ以上の理由を述べない。是れ一に彼等は何故に好きになつたかを、恰も大人がするが如く、分析的に内省探究することは出来ないからである。従つてこれまで此の種の研究者にして、完全に其の動機を調査したものは全くない。それで吾人は茲に不完全ながらも、五人の米人が質問法によりて蒐集した結果を紹介するより外はない。而して其の結果を大別すると左の五項に纏めることが出来る。

(イ)金銭に對する欲求。「金を多く儲けん爲め」といふ理由が五人の結果とも、第一位を占めて居る。例へば、

男兒、十五歳、私が大きくなつたら帳簿方になりたい。それは俸給が高くて綺麗な仕事だから。

男兒、十二歳、私が大きくなつたら機械師になりたい。私は機關を作ることが好きで、その上よい金儲になるから。

等の答が多い。それで研究者の一人は、米國民一般に金銭を大事にし過ぎ、金權萬能の考が餘ま

り強過ぎる結果ではなからうか、若し左様とすれば、兒童に教ふる市民科或は道德科の教授を改善する必要があると云つて居る。金錢に對する兒童の觀念を研究した人が二三あるが、その結果は、茲に參考に資するに足る點が多い。兒童は自己の快樂を得ん爲めに金錢を消費し、又將來の需要の爲めに金錢を貯蓄する傾向が極めて強い。但し年の幼い兒童殊に貧民の子弟には現在の慾望を満たす爲め、例へば菓子を買ふとか、玩具を求むるとかに金錢を費消するものが多い。兒童の夢又は幻想を研究した人々の言によると、青年期に達する前後の兒童は金持になつた夢を多く見る。而してそれが勞働、又は苦心發明の結果に基づくよりも、大金の拾得又は親族の遺産相続に基づくものが、遙かに多數を占めて居るといふことである。

しかも年長の兒童殊に女生徒には利他的の動機から、金錢の儲かる職業に従事したいと答へたものがある。例へば、

女兒、十五歳、私は畫師になりたいと思ひます。私は畫を書くことが好きで、繪は高い價で賣れます。そして金が溜ると、教會堂や病院に寄附し、又は貧民に恵んでやらうと思ひます。

女兒、十四歳、私は上手な料理人になり、立派に自活の出来るやうにしたい。若し両親が生きて居らるゝならば生活の補助をしてやりたいと思ひます。

(ロ)優れたる能力。地位又は名譽に對する欲求。子供は幼少の時から名譽心が強く發達して居るもので、「いゝよ」だとか、「うまい」とか、譽められることを非常に希望する。それで初年級頃には先生になりたいと云ふ子供が尠くない。何となれば先生程何でも出来るものはなく、又、先生程權力の強いものは無いやうに思つて居るからである。漸次上級に進み、種々の偉人傑士の事業を知るに従ひて、彼等の理想も擴大され、軍務・法律・政治・音楽・繪畫・其の他社會公共の事業に於て優秀なる人間たらんことを希望するやうになる。殊に青年期に達する前後が名譽心の高潮を呈する時期である。

幼時には單に外形が彼等の羨望心の的となるもので、例へば勳章を光らせ、駿馬に跨る軍人になりたいものが多いが、漸次年齢を重ねるに従つて、人格に對する判斷が増しこれを稱讃し、羨望することも、漸次増加して來る。

ターバーの調査によると人格を認めて、これを希望するものは、八歳の兒童では五%に過ぎないが、十一歳の兒童になると、一五%に増加し、十四歳になると二三%の多數になると云ふて居る。即ちこの時は青春期に入つて、間も無い頃で名譽心の旺盛な時期であり、教育者に特に注意を要する時期である。

(ハ)上品に見える、又は尊敬されることの欲求。よく兒童が、この職業は人が皆尊敬するからとか、紳士又は淑女にふさわしい職業だからと云つて、職業選擇の理由として居る。この傾向は男兒よりも女兒の方が多く、又年少の兒童よりも、年長の兒童に多いことは勿論である。ヤングが嘗て倫敦の少女の五個の職業即ち家事手傳・裁縫師・賣店の女・教師・タイプライター使用に對する態度に就て調査した。而して上品な仕事とか淑女として恥しからぬ仕事であるからといふ理由が、金儲になるとか、樂な仕事であるといふ理由と同じく多數を占めて居た。而して工場が多い所にある學校の少女は家事手傳は上品だからといつて、これに従事したといふものがあつたに反し、富豪の子弟の多い學校では、家事手傳は普通の女のする仕事だといつて輕蔑された。

タイプライターを使ふことは、上品で女らしい仕事だと、何れの處でも歓迎された。それでヤングは次のやうな結論に到達した。十三歳乃至十四歳頃の女子を観察すると、全體に於て大に見えに氣をつけ、上品とか淑女のすべき事とかに注意し、甚しきは其の職業が彼等に取りて有利であるか否かに就ては、無頓着のものがあつたと述べて居る。

(二) 獨立に對する欲求。少數の男兒及び多數の女兒の答案中には、獨立して行く爲めにか、自活せん爲めにかと、職業選擇の理由となつて居る。婦人參政權運動や男女同權論などの唱道される一方に、婦人も男子に依頼せずして獨立自營しなければならぬといふことが、獎勵されるのは必然の道理である。殊に又近世商工業の發達に従つて、女子の職業を増加し、漸次男子の領域を奪ひつゝある。小中學の教師・交換手・速記者等は殆んど女子の職務のやうになり、簡易の機械職工も女子を備ひ、最近に紐育では女子自動車の運轉手を營業とする鑑札を下附した。歐洲の戰爭は男子の缺乏を來たし、女子の車掌は英・佛・露で珍らしく無くなり、倫敦では、地下鐵道に昇降する昇降機を取扱ふものも、大半女になつて居る。郵便の配達も女を使つて居るといふ有



様で、益々女子の獨立自營を助長して居る。先年、前大統領タフトが紐育の一女子職業學校の卒業式で演説した一句は、大に這般の消息を洩らして居ると思ふ。曰く、從來女子は必らず結婚すべきものだとし、少々は不満足と思ひながらも、結婚したものだ、それは多く女子の自活が出来なかつた事に原因して居る。處が、商工業の發達と共に女子に職業教育を施すものが多くなり、其の卒業生は決して男子に劣らない多額の收入を得、若し自分に不相當な男子よりの求婚に對しては、あなたと夫婦になつても、別に生活に向上を來たさないと斷然拒絕し得るやうになつた。故に職業教育は女子をして男子と同様、十分に相當なる相手を選択せしむるに至らしめ、十分に自尊心を養成するに至るものであると述べて居る。かゝる風潮は漸次我國にも輸入されて來て居るが、女子の職業教育、女子の自活問題は現今の我國に取りては、重大な問題で果して那邊まで、女子の獨立を奨励すべきかは、逼迫せる、大に研究すべき問題である。

(ホ)短時間の労働、又は容易なる業務に對する欲望。短時間働いてよいからとか、容易く出來るから従事したいと希望する兒童がある。例へば、

女兒、十歳、私は學校の先生になりたい、仕事が楽だから。

男兒、十二歳、私は教師になりたい、一日に二時間位働けば済むから。

かやうな答案が前述の研究者の中に最も多きは、二六%少きは五%位あつたと云ふことである。或研究者は又此の種の傾向が男兒よりも女兒に多いことを發見した。斯様は怠惰の考は出来るだけ兒童の心から驅逐しなければならぬ。勿論少く骨折つて、多く金儲をしようとする傾向は、人間共通の欲求で、近頃大流行の能率増加の研究も、出来るだけ「エナージ」を有效に使用せんとするにありて、例へば従來は一の勞力で一の結果を得たものを、今度はその二倍乃至數倍の結果を得ようと研究して居る。但しこれは怠惰けて金儲けることとは、全然異つて居る。體質が虚弱の子供又は家庭の悪い所の子供には、往々功名心のみ徒に強くて、それを得るに要する勞力を厭ふものが多い。教育者はこの點に注意しなければならぬと思ふ。

### 職業に對する理想の變化

子供の時に理想とした職業に、一生涯を通じて従事するものであるか、或は途中で變化するも

のであるかの調査は實に大切である。ウイラルドはこれに就て、二様の調査をした。一は既に一定の職業に従事して居る時に、汝の小學校の上級時代又は中學時代に於ける職業の理想は何であつたかと尋ねた。その答案は十七だけ集まつて、内十一人は男子、六人は婦人であつた。最初の理想通りの職業に従事して居るものは、十七人中三人しかなく、他は職業を轉じ、甚だしきは六回乃至九回も職業を更へたものがあり、中に第一の職業に三回戻つて來た者もあつた。第二の調査は第七學年及第八學年の兒童二十八人に學年の初と終りとに、汝の理想とする職業は何かと尋ね一年間に於ける彼等の理想の變化を調査したのである。

女兒で同一の職業を選んだ、其の職業名は教師と帳簿方とで、男兒の方では機械業、農業等であつた。この後の方法と同一方法を以てケートが百二十九人の女兒に就て調査した。六一%は初めと終りと本質上同一の職業を選定したが、その他は初めと多少異つた職業を選んだ。最も面白い調査は、倫敦の教育局で行つたもので、それは小學校の女兒の卒業前の希望と、卒業後實際に従事して居る職業との比較である。卒業前は女生徒の三七%だけ家事手傳となることを希望した

が、卒業後は二七％だけ、それに従事して居る。即ち一〇％だけ減少した。二六％の女兒が裁縫師なることを希望したが、一五％だけそれに従事して居る。一〇％が商賣を希望したが、四％だけ従事して居る。教師志望者は二四％であつたが、僅か三％だけ教師になつて居る。即ち職業によりては、大分變化して居るやうである。

私が十五人の心理學者及び教育學者に、彼等の幼時の志望が如何に變化したかを、私かに尋ねた所が、大に個人的相違はあるが、其の間に多少共通の變化をして居る。例へば實驗心理の教授は多く最初醫者にならうと志した。教育家には最初牧師志望者又は政治家志望者が多い。而して彼等の十五、六歳以前は、その理想が度々變化し、且つ其の頃の志望と現在の職業とは、大分相違して居る。今日の職業は多く十五、六歳以後に決定され、その以後は大した變化はなく又尠くとも今日の職業に緣故のあるものである。中には両親から先生になつたらと勧められて、教育學を研究するに至つたものもある。然らば何故に幼時の志望が變化するか、その變化の中には、何か共通の點があるかといふことが、疑問となつてくる。

私の蒐集した結果や他の研究者の調査とから綜合して見ると、現在の職業を選択するに至つた動機に二種類あるやうである。第一は兩親又は教師の勧めに従つたもの、第二は全く自己の興味に従つたものである。

第一の場合、即ち兩親又は教師が選定して呉れた業務は、若し其の選定者が、よく兒童の性質興味知能を知り、且つ世間の事情を知悉して居れば、その子供の將來は幸福なもので、漸次その業務の進むにつれて、興味を増し、全力を以てこれに當るやうになる。所が、これに反して何等の考もなく流行に習つて選定する時は、其の兒童は漸次自己の不適任を知り、興味を失ひ、遂には他の業務に轉ずるか、若しくは、今となりて職業を更ふるのも、晩過ぎるといふので、厭々ながらその職務に従事して居るやうになる。後者ほど單にエナージーの不經濟ばかりでなく、實に憐れな生涯を送るものは無いのである。

第二の場合、即ち自己の興味より職業を選定したものは、又これを二つに區別することが出来る。第一は幼少の時代よりそれに對する興味又は技能が表はれ、終生その興味が持續したる場合

と、第二は興味が時によりて變化する場合とである。

ケントが米國に於ける機械工場技師名簿の中から七千五百弗以上の俸給を受け居るものゝ中七十五名だけ選定し(その平均俸給額は一萬二千弗となるが)、彼等の幼時の興味が何であつたかを尋ねた。處が、八三%だけは、幼少の時より機械に興味を持ち、十二歳より十七歳の間に種々の機械例へば機關車・電話機械などを模造し、實際に使用の出来る位に完全なものであつた、といふことである。而して彼等の學科に對する興味は如何といふに、四一%は理化學に、四八%は數學に興味を持ち、文學に興味を持つて居たものは三%に過ぎなかつた。これを要するに、この有名なる七十一名の技師は大體に於て十七歳以前に既に機械に對する興味又は技能を發揮したといふことである。

ダーウィンの傳記を見ると、八歳頃から植物や動物の蒐集に興味をもつた。しかし彼は初めて醫者にならうとしたが直ぐ嫌になり、後又牧師にならうとしたが、今度は全く語學を覺ゆる能力がなく、これを中止し、後、幸ひにも動植物採集隊に加はる機會を得て、遂に其の本來の才能を

發揮し、盛名を後世に遺すやうになつた。かやうな例は澤山ある。アレキサンダー大帝は三歳の時、既に不在の父の代理で各國の使臣と商議し、ミルトンは四歳でラテンの詩を作り、ポーブも四歳でグreekの詩を作つた。五歳の時、フレデリック大王は兵士を指揮し、モザルトはヴァイオリンを弾き且つ作曲をし、チチアンは野生の花より出た汁で繪を畫いた。モリエールは十歳で劇を書き、ジョン・ステュアート・ミルは三歳でグreekの「アルファベット」を覚え、五歳の時、兄さんのラテン及びグreekの誤りを正したといふことである。しかしかやうな例は實に尠く、非凡の天才に限つて居るので、一寸一般には適用が出来ない、寧ろ第二の場合即ち興味が度々變り遂に不動となつて、現職に従事するものが大多數を占めて居る。

凡そ兒童時代の興味には一時的のものが多し。一寸先生から賞讃されると、その事が好きになつるとか、或は模倣或は好奇心から興味が興ることがある。従つて其の興味も轉々して永續しない。私の蒐集した一例を擧げると、現時著名の心理學者ホールは、九歳頃までは鳥の羽、動物の爪、貝殻等を集むるに、興味を持つたが、その後十二三歳までは音楽が好きになり、日夜演奏し、大

音楽家たらんことを希望した。しかし其の興味も何時しか去り、今度は文章家たらんと希望し、これも長続きはせず、遂に十七歳頃から哲學に興味をもち、その後心理學に變つたといふことである。他の心理學の碩學ミユンスタールとは最初植物に興味を持ち、隙さへあれば採集に目を暮らした。これは三年ばかりつゞいたが、誕生日に伯父より電氣機械を貰ひ、その後はそれに熱中し、室中電線で一杯となつた位である。十二歳の時宗教に熱心な友人と懇意になり、今度は比較的宗教殊に「イスラム」教に興味をもち、同時にアラビア語の研究をした。これも永續きはせず、今度は人類學に興味をもち、古い土器など發掘し、小博物館を建設する位になり、これに關する著述（未だ刊行はせぬが）までした。其の後大學に入るやうになり、文學・自然科學・哲學を習ひ、其の間に現在の職業たる心理學に興味を持つやうになつたといふことである。

私の蒐集した十五人の心理學者及び教育學者の幼年時代の回想談によると、大抵十四五歳頃までは、興味が變化し、職業に對する理想も變化して居る。しかし、その後生じた興味、又は選擇した職業は、假令變化しても、かの振子が一方の極端から他方の極端へ移るが如く、變化する



ものでなく、その間に連絡のある變化をしたやうである。

然らば何故に斯様な變化が起るかといふことが、又疑問になる。クラメールは極端な例證を擧げて説明を下した。曰く初めに海軍々人・世界旅行家・機械技師等を志望するが、後には身體の危険なる事を聞いて、他の職務に轉ずる。醫者を志望した者が夜蘭の往診を恐れて商人となつた。料理人たらんとして、夏料理場が暑い事を聞いて中止した。初め飛行家たらんと志望し、墜落事變の多いのに怖ぢて羅典語の教師を希望した。處が羅典語の先生は永生しないことを聞いて、これも中止し、目下一定の希望もなくぶらぶらして居る者もある。かやうに職業の變化は恐怖といふことが、其の中心になり、一方には向上しよう、少くとも他人より上に立たうといふ考が烈しいからである。と結論して居る。アドラは一人の醫師が何故に醫者となつたかを調べたら、子供の頃から度々死に瀕する危険に遭遇し、死と闘はなければならぬ羽目に遭ふので、その目的を達する爲めに醫師になり、死に打勝たうと努力して居る。勿論この努力は醫師の意識にはないが、常に潜在的に働いて居ると述べて居る。

私の友人で、青年團の宗教々育に興味を持った人の話に、自分は幼少の頃演説が上手で、度々學校で討論演説をしたが、一度途中で行詰つて、一語も出なくなり、討論に敗れた。それを非常に恥辱に感じ、何となしに臆病の性質になつた。その後足部の病氣で學校は中止し、益々引込み思案になつたが、後身體を恢復し、カレツジ及び大學に入學するやうになり、一方に青年の品性維持といふ事に興味をもち、夏休みなどには郷里に歸りて活動した。卒業後も、その事業に關係し、一方宗教々育に關する講座を持つて居る。これ恐らく自己の缺陷即ち臆病及び身體の不完全を、補填するやうな職業を選定するに至つたのであらうと話した。

他の友人たる心理學科の學生は私に次のことを述べた。自分は最初演説家になるつもりであつたが、丁度同級に自分より上手のものが居り、時々敗けるので、遂に今度は文章家にならうと思つて、盛んに寄稿したが、これも何だか思想が涸渇しさうに思ひ、且つ文士の生命の長くないことを知るに至り、一層心理學でも研究しようと思つて、大學に入學して來たと話した。かやうに、自己の缺陷を知り、何とかしてこれを補ひて、向上しようとするの傾向は人類通有のものである。

この現象は精神の上ばかりでなく、身體の上でもさうである。例へば身體中の一部分が障礙を被ると、その代用をする機能が表はれて来る。又微菌が入ると、これを殺すものを、身體に生ずるといふ風である。吾人の精神生活にも不知不識の間に、自己の缺陷を補ひ、人後に落ちないやうに努力する。而して旨くその缺陷を補ふやうな職務に逢着すると、その人は喜んで一生その業務に従事するやうになる。處が、これに逢着するまでは、常に不安で、十分に自己の精力を集中することが出来ない。パーソンが多數の青年を取扱つた経験によると、何れも同氏に相談にくるものが、自己の精力を疑ひつゝあるもので、そこで同氏はそれ等の青年に對しては、彼等の能力の何れにあるかを指摘し、十分の自信力を喚起し、最後の決定を與へるやうにすることであると云つて居る。

### 結 論

大分種々と述べて來て、多分讀者はその内容を捕捉するに困難であらうと思ふ。それで上に述べた事項を、茲に概括することにする。

一、兒童の職業に對する理想は、彼等の環境即ち家庭、學校並に社會の影響を被る。

二、両親の勢力は漸次減少し、教師並に朋友の影響が年と共に増加し、又外部社會の影響も強大となつて來る。

三、年少兒童の職業選擇の動機は、金錢・名譽・餘暇を得ることが主で、女兒には往々職業の上品といふことが動機になつて居る。勿論彼等は實社會の知識に乏しいから、彼等の選定せるものは、空中樓閣的のものが多し。漸次青年期に入りて、實社會に觸れるやうになると、其の選擇も大分眞面目になる。

四、両親又は其の他の人の勧めによりて、職業に従事するものがあるが、其の選擇宜しきを得れば漸次興味を喚起し、成功して行くものも、これに反する時は不愉快に其の職務に従事し、その中に年を取りて、他の職業に轉ずることが出來ず、一生を後悔の中に過すものもある。

五、天才的の人は早くから非凡の能力を表はし、一生不變的にその職務に従事するものが多い、六、自己の職務に満足して、これに自己の全力を盡して居るものは、大抵自己の缺陷を補填す

るに足るべき職業を發見した結果が多い。

七、しかし大多數の人に於ては、理想が度々變化する。但し十四五歳以後に於ては、前とは全く毛色の變つた職業に轉ずるものは尠く、職業を變へるにしても似よりたるものに移つて行く。従つて此の時代が職業選擇に最も注意を要する時である。

八、職業を度々變へる動機は、自己が不適當でないかとの不安の念から起る。これは一方に自己の缺陷を患ひ、他方に向上の念が烈しいのに基因するもので、この種の煩悶は十五六歳より二十歳前後の青年に多く見る所である。従つて青年の指導者たるものは、彼等の才能の存する所を看破し、彼等に確信を與へて、専心その業務に努力するやうに勉めなければならぬ。

## 第五 兒童の遊園に就て

### 兒童遊園の問題

兒童の遊園は時々問題になるが、仲々實現されさうもない。先年大森夫人が兒童遊園協會なるものを設立して、大分賛成者も出來たやうであるが、寄附が十分集らないで挫折した。その時同夫人は「自分は米國人だから日本人の賛成を得るに困難なのであらう。」と云はれたが、若しこれを日本人が發起したら尙更寄附も集まらなかつたかも知れない。誰れも兒童専用の遊園の必要を認めては居るが、それに賛成して幾分の寄附でもする人は、先づ目下の日本人には幾人も無いやうに思はれる。

恰度入學試験の過重なる負擔に、子供自身よりも、親の方で心配し、中には這入つていけないといふ試験場の廊下に立つて、自分の子供の試験の成行を心配さうに見て居る親はあるが、さてその困難な根本原因を除去するに、各自が幾分か金を集めて中學校より女學校なりを設立する

だけの勇氣はないのと同一である。どうも子供の遊び場がないとか、遊び場所があつても非教育的であるとか心配する親はあるが、それ等を根本的に解決する方法を取る者は無い。

大分以前から市内では、學校を放課後開放して子供の遊戯に提供して居る。これは米國の大都市あたりで屋上運動場とか地下遊戯室とかを開放して居るのに模して居るのであらうが、彼地ほど東京は繁昌しない。當事者に聞けば金がなくて、設備が出来ないし、又指導者を置く事が出来ないからであると云ふのである。これは儲かの一の理由ではあるが、實際これ等の解放された運動場を見ると、直ぐ近くにはガラス窓があつて、それを壊す危険があり、又餘り汚くすると當直の小使から叱られるといふ有様で、學校に居る時と少しも相違がない。一體子供には學校といふと勉強する所、きまりをよくする所と考へて、自由にのんびりと遊ぶ所とは考へてない。中には自由に遊ぶうとする子供もないではないが、前述のやうに叱られたりしては、やはり自由に遊ぶことは出来ない。

### 兒童遊園の最低標準

それにはどうしても、兒童専用の遊園地を作らなければならぬ。合衆國の勞働局の兒童課では大都市の子供が通路で遊ぶのを一掃する爲めに、遊園地を増設する計を立て居るが、その最低標準によると各の子供に一年中毎日二時間位は少くとも遊ばせるやうにしなければならぬ。それで六歳以下の子供に對しては四分の一哩の處に運動場を作り、六歳の子供の爲めには半哩の處に運動場を置き、又年長の子供でベースボールの出来るものには、半哩より遠くない所にその競技場を作る。運動場の面積は一エーカーに五百人を最小限度とする。尤も此の一般運動場では競技を許さないで、フットボール、テニス、ベースボール等をする所には、六エーカー位の競技場を作るやうにしようといふ計畫である。

處が、東京の下町へ行くと、狭い路地の處に蠢々と子供が遊んで居て、極めて非衛生的非教育的の遊びをして居るのを見ると、前記の最低標準どころか一坪の空地でも欲しいと思はれる。従つて遊園の設備に對する理想案の如きは、實に机上の空論で、目下の急迫せる問題は、何の設備も要らないが、せめて空地を作ることだけでも、澤山であると思はれるやうであるが、しかし近



時大分問題にされて、各地の社會課で、この種の計企があるので、是等の設備に就て少しく卑見を述べて参考に供したいと思ふ。

### 遊園設備の理想案

兒童専用の遊園はどう作るかと云ふに、それは兒童本位にするといふ一言で盡きて居る。しかも之を少しく分析すると先づ彼等の心身の状態を知つて作らなければならぬといふこと、次はその土地の状況を考へなければならぬといふこと、最後に天候や季節を考へなければならぬといふことである。その他種々のことはあるが、大抵この三項に盡きるやうである。説明のし易い爲めに前記の順序を轉倒して最後のものから述べることにする。

兒童は年中遊ばなければならぬから、冬でも夏でも、又雨天でも、晴天でも、それ相當に遊ばれるやうにしなければならぬ。寒い時は防寒の設備をした運動館が必要であり、雨天には雨を凌いで遊べるやうな建物が要るのは勿論である。青年會館で寒中でも水泳の出来るやうな設備をして居るが、それ程まで無くとも寒さを防ぐだけの設備は必要である。冬など室内運動をし

ても厚い着物を着てするやうでは十分でない。薄い運動服をつけてやる位にしなければ、十分運動は出来ない。米國の大都市ではこの種の設備が可なり澤山あるが、倫敦あたりでも冬期夜間の運動開始で非常に好成績を擧げて居る報告がある。

次は土地の状況を考へることである。即ちその土地で不足して居る遊戯をさせる場所を作ることである。山あり原あり川ある田舎では人工的遊具や體操具が必要であり、人工的器具の多い都市では自然的運動場の設備が大切である。紐育の眞中にセントラルパークがあり、倫敦の眞中にハイドパークがあるやうに、我東京でも欲しいと云つた處で、出来ない相談であるが、せめて東京の近郊に自然的風光を供へた大遊園地、殊にそれが兒童本位で出來て居ればよいと思ふ。鶴見の花月園などは、この點に於て都人士の足を曳く所になつてゐるが、余の望む所は今少しく徹底した兒童本位の遊園があればよいと思ふのである。半分は大人向き、半分は子供向きと云つたやうな、設備でなければ繁昌しない日本の傾向は、未だ親達が眞實に子供を愛して居ない證據である。よく世間では子供を連れて芝居見に行く親を非難するが、全然子供本位でない遊園に一日を

暮すのも五十歩百歩の争ではあるまいか。

最後に兒童本位の遊園は兒童の心理と體格とを理解して作らなければならぬ。子供は常に球を投げたり、駢足をしたり、スベリ臺に乗ることのみを喜ぶものでない。時々はおたまをしやくつたり、蜻蛉を捕へたり、花を摘んだりすることを喜ぶものである。尙進んでは之等の動物を飼育したり、植物を培養したりして喜ぶのである。合衆國では學校園を可なり大きくやつて居る所があり、中には私設の植物栽培場があつて、子供は播種・除草・收穫等をやらせて居る。近年東京でも芋掘りを生徒にやらせたり、夏期に一種の田園植民をやらせたりする學校が殖えて來たが、未だ一般的になつて居ない。

以上は只興味的一端を例示したのであるが、この他手藝に關する趣味、演劇や音楽やお話に對する興味を十分に満足せしむることも遊園地の一事業として看過することは出来ない。お隣の會は大分方々に行はれて居るが、音楽や演劇に關する會合は少ない。偶には行はれるけれど、兒童の年齢を無視したり、或は附添人の爲めに子供には無興味の音楽を挿入したりして、吾人の所謂

兒童本位の目的の遠ざかるものが可なりに多い。活動寫眞も子供は非常に好むからして、これも十分に利用しなければならぬ。文部省などで選擇するやうになると、責任が餘り有り過ぎる爲め、どちらかと云ふと、先づ無難のものを取る嫌があり、無難の物といふ事は消極的を意味する。消極的でなく、もつと積極的に利益になり興味をそゝる映畫が必要である。道徳とか、狭い意味の教育的といふやうになると、極めて制限的になつてくる。世の所謂教育的映畫に對して子供が餘り喜ばないのは當然のことで、それ等は大人の道徳や大人の教育から割り出した物であるからである。これは單に映畫ばかりでなく、何れの娛樂に於ても同一である。

前に一寸年齢の差別を無視することを述べたが、我國の遊園にせよ、娛樂機關にせよ、何一つ年齢別に計畫されたものは無いやうである。我國でも兒童の心理學や生理學は可なり前から教へられて居るが、何れも机上の學問が多く、實際に應用したものは極めて尠ない。米國の兒童遊園も細かく別ける程までは發達して居ないが、幼兒・少年・少年後期位に區別して、其一々に監督者がついて運動や遊戲を指導して居る處は可なりにある。我國では小學校ですら唱歌・體操の如

き學科の一部となつて居るものは、教程によつて幼より長に進むやうになつて居るが、運動場に於ける自由遊戯は全然無制限である。茲に述べた制限は拘束と同一義であると解釋されてはならない。余の主張は自由の遊戯を拘束するのではなく、兒童の心身發育上の制限を省みなければならぬと云ふのである。東京の學校の運動場などを見ると幼い者や氣の弱い者は何時も板塀の所に佇立して居るやうに思はれる。所謂自由遊戯は年長者や亂暴な生徒の間にのみ行はれて居る傾がある。尤も東京の學校のやうな狭い運動場で、如上の非難は少し無理かも知れない。それで私は之等の缺陷を補ふ遊園地があつて、せめて一週間に一日だけでも、子供の年齢相當な自由の活動をさせたらば、子供に取つてどんなに幸福なことであるかと思ふのである。

## 第六 母性擁護の叫び

### 大戦以來母性擁護の聲

歐洲大戦以前から母親の保護といふことは、識者の注意を惹き、先進國殊に獨逸に於ては種々の設備や法律が設けられて、極めて行届いた方法を講じて居た。處が戦争が始まつてからは、一方に機械力の偉大なる効果を認めるに至つたと同時に、他方に人間力の價値が亦極めて重大なることが分つて來た。どんな巧妙な機械が發明されても之を運用する人がなければ駄目である。殊に一方にどしどし血氣盛んな青年が戦争の犠牲になるので、之が補充を計らなければ到底國力の萎靡を免れないのは理の當然である。それで兒童保健とか母親保健とかの問題が戦争中から戦後にかけて著しく唱導されるやうになつた。ウイルソン大統領の如きは平時に於ける兒童保健に力を致すのは、戦時に於ける兵士に力を竭くすと同様、國家に忠なるものであると述べて、莫大な國庫補助を兒童の保健事業に與ふることにした。

## 我國の幼時死亡率

處が、この兒童保護を十分に貫徹せしむるには、どうしても、母親の擁護と、その啓發とを計らなければならぬ。かの英吉利や佛蘭西に於ける生産率を調べて見ると年々減少して居る。處が我國では年々増加して居る。しかし一方に死亡率が先進國では年々減少して居るが、日本では減する所か、却つて年々増加の傾向を示して居る。それで英・佛・獨・澳に於ける人口の増加率は我國のそれに比して大差がないことになつて居る。即ち先進國では出生数は少ないが死亡數も少ないので増加率に影響しないが、我國では出産も多いが死亡も多いので、結局人口の増殖が多くないことになるのである。之は我國に於ける幼兒の保護が完全でないといふことに歸着するのであるが、この幼兒の保護を完全に行はしむるには、政府や公共團體の施設も必要であるが、又一面に母親を保護し母親を教育することが極めて大切なことであると思ふ。

然らば澤山子供の数が増えれば、質はどうでもよいかといふにさうでない、近頃は新マルサス主義が各地に多少唱導されて來て、質のよいものを假令少數に制限しても作り上げようとする運

動が起つて來たが、數の制限は尙異論のあることゝしても、質の良好なる幼兒を生育しようといふ點に於ては、何れの論者も一致した點である。而して質の良好のものが出来るやうにするにはやはり母性の擁護と教育とが大切である。而してこの母性の擁護と教育とが徹底したならば、必らずや數に於ても質に於ても兩立し得ることが出來やうと思ふ。數を捨てゝ質を取らんとする主義の如きは、未だ完全に母親の保護と教育とが徹底しない過渡期の產物であるまいか。

### 有識階級の出生率

先年ドレスデンの萬國博覽會に出品された佛蘭西の才能ある階級の親と、その子供の數との比較を見ると極めて興味ある結果が表はれて居る。即ち知名の佛人四百四十五人、換言すれば八百九十人の兩親があつて、その子供の數が僅か五百七十五人しか無いといふ結果になつて居る。その内譯を見ても、例へば政治家の親が二百二十二人に對して、その子供が百九十三人、文豪の親が二百二十六人に對して、その子供が百二十七人、實業家の親が四十六人に對して、その子供が三十五人、美術家の親が百八十八人に對して、その子供百四人、將校六十六人に對して、其子供



が五十四人、官吏六十六人に對してその子供が五十一人といふやうに、偉人の子孫は漸々減少して居る傾向を示して居る。偉人の子供のみが偉人となるとは限らないが、他の條件さへ烈しい相違がなければ種のいゝものがやはり善いことは遺傳學上明白なことであるから、是等偉人の子孫の減少は大に考慮すべきことである。

翻つて我國の狀況は如何といふに、大正四年の人事興信錄にある著名の博士百六十五名の子供の數を調査した人があるが、それによると、子供のないのが十六人で、五人の子供を有する者が最も多くて二十四人、その次は三人の子供を有する者が二十三人である。中には十人や十二人といふやうな多くの子供を持つた博士が三人ある。而して子供の總數は六百九十九人で、親の數に比して非常に多くなつて居る。この百六十五名の博士夫人は明治四年以前の出生であるから、今後子供は生れないといふことが出来るが、更に明治四年以後出生の夫人を有する博士二百七十二名の子供の調査をして見ると、子供の總數が千二十五名で、今後もそれ以上に殖えることはいふまでもない。之によると我國の學者の子供は、佛國の結果と反して劣等階級の子供が跋扈する如

き憂はなく、大に喜ぶべき現象を呈して居る。

しかし吾人はこの一部有識者の子孫の増加を以ては満足出来ない。現時に於ては無智の両親を有して居ても、之に相當の保護と教育とを施して、その子孫の向上を計ることが大に必要である。殊に民衆の力を認め、民衆の参政権を高唱する現時に於ては益々優良なる民衆を必要とする。衆愚の政治を脱して衆賢の政治を行ふには、どうしても一般の母親を保護し、その教育を施して優良の子孫を作ることが急務である。戦後獨逸では統一學校の運動が起つて來た。英國でも佛國でも、この統一學校の精神を採用せんとして居る。この統一學校といふのは、或特殊の子弟のみの教育に努めないで、一般民衆の中から秀才の者は凡て同一の教育を施さうとするのである。蓋し獨逸では今次の大戦に壯丁が足りなくなつた爲めに、十三四歳から十八九歳までの少年に動員令を下して、種々の方面に使用して見たが、仲々有能の者が多いことを發見し、從來の特權階級者の教育のみでは不十分であるとし、一般民衆の子弟もその能力に應じて、十分に教育を受くるやうに國家が保護獎勵しようとする法案である。かやうに民衆の力に俟つといふことが大となれば

なる程、その子弟を養育すべき親は殊に母親の教育が大切になつてくる。かのナポレオンは、「一國の盛衰を知らんと欲せば先づその母親を見よ」と云つたと云ふことであるが、流石は萬古の英傑の言であると思ふ。

### 母性擁護の方法

然らばその目的を達するには如何なる方法を用ふべきかといふに、それには先づ婦人の勞働に關する規定・母親の保險・母親の給食事業・純良なる小兒牛乳の配布・託兒所・母親相談所の設立等幾多の施設經營を要することはいふまでもない。しかし是等の機關が完成しただけでは十分でない。我國の様に中産、或はそれより少し下つた階級の人民の多數である所では、是等の階級に屬すべき母親に對して、その民族の發展に自己が如何に重大なる責任を有して居るかを自覺せしむることが必要であると思ふ。即ち一方に保護をすると同時に、他方には母親の自覺を促すやうな教育をすることが急務である。現時の我國に於ける多數の母親程、多忙な者はない、主人の世話・子供の教育・一家の處理・その他職業ある者はその職業に従事して、毎日毎日目の廻るや

うに忙しくして居る。到底修養とか自己教育とか自覺とかを考ふる違さへない。之は現時の家庭生活の缺陷であつて吾人は大に家庭事務の簡捷を強調する者である。

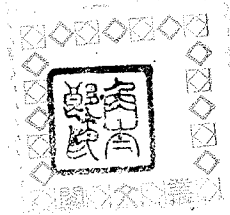
## 兒童の心理終

### 第六 母性擁護の叫び

昭和九年九月七日印刷  
昭和九年九月十二日發行

定價金壹圓五拾錢

(添丁廻子は何時でも取り換へます。)



編輯者  
兼發行

東京市麴町區九段四丁目八番地

西村 豊吉

印刷者

東京市芝區南佐久間町一ノ五三

杉山 愛二

印刷所

東京市芝區南佐久間町一ノ五三

巧秀舎印刷所

發行所

東京市麴町區九段四丁目八番地八

叢

文

閣

電話九段二五六八番  
振替東京四二八八九番

付奥理心の童兒

柳 宗悅著 宗教とその眞理 定價一圓五十錢  
送料十六錢

フアブル原著 昆虫記 (全十卷) 各冊十一圓  
送料十二錢

竹越與三郎著 陶庵公 定價一圓五十錢  
送料十四錢

高村光太郎譯 ロダンの言葉 定價八圓  
送料八錢

高村光太郎譯 續ロダンの言葉 定價八圓  
送料八錢

ロマン・ロラン原著 高田博厚譯 ベーオートオヴエン 定價六圓  
送料六錢

梅津勝夫譯 ベーオホヴエンとゲエテ 定價八圓  
送料八錢

鈴木賢之進譯 ニーチエとヴァクナー 定價九圓  
送料八錢